

丸亀市吉岡神社古墳の再検討 - 供献土器のありかたを中心として -

蔵本晋司

はじめに

前期古墳に土師器が伴うことは、かなり古くから知られ、これまで古墳編年の基準資料として、あるいは葬送儀礼の問題の中で取り扱われてきた。近年においても、古墳出土の土師器を正面から取り扱った研究会も数度開催され、古墳研究におけるこの問題の重要さを物語る。

私は、香川大学丹羽祐一先生、丸亀市教育委員会のご好意により、同市吉岡神社古墳出土資料について調査をする機会に恵まれた。当初は、各研究者により齟齬のみられる既往の古墳の編年研究（國木1997・渡部1991・大久保1995・同2002・蔵本1999c）の一助として、基礎資料の提示を意図してはじめた調査ではあった。しかし資料整理を進める過程で、とくに供献土器の問題について深く掘り下げる必要性を痛感し、資料の整理報告とともに本地域の弥生墳墓から前期古墳への供献土器について、考えをまとめたのが小稿である。

本地域における供献土器の問題については、大久保徹也氏による精緻な研究が既に公表されている（大久保1996・同2000）。小論では、こうした大久保氏の研究に導かれながら、弥生時代から古墳時代にかけての供献土器を素材として、筆者なりの古墳時代像を提示することを目的としたい。

なお、以下で述べる前期古墳の年代観は、鐘方正樹・上田睦両氏の近年の埴輪編年（鐘方2003・上田2003）を基礎に、一部供献土器類や副葬品などの年代観を取り混ぜて考察したものである。前1～前5期が埴輪編年の一期に、前6期が二期に、前7期が-1期に、中1期が-2期にそれぞれ相当する。

期は前後2時期に細分され、したがって前6期も将来的には細分可能だが、本地域で良好な資料が少なく今後の課題としておきたい。また、B種ヨコハケの出現時期とされる-1期ではあるが、前7期の古墳に明確なB種ヨコハケが伴う例は未だ確認していない。B種ヨコハケの地方への波及の問題とも絡め、前6期以降の埴輪の畿内地域との併行関係については、別稿において検討したい。

吉岡神社古墳の再検討

1. 吉岡神社古墳の概要

吉岡神社古墳は、現在の行政区画で丸亀市飯野町東分826（北緯34°17'21"、東経133°49'21")に所在する（第1図参照）。古墳の南面平野部側には、石ケ鼻神社が鎮座する。古墳の名称は、この神社の地元での通称から名付けられたものであり、「吉岡」は神社東南方の小字名である。古墳は、丸亀平野北東隅に屹立する青ノ山（標高224.5m）南西裾部より南に長く延びた舌状丘陵上に築造された前方後円墳で、後円部を平野部側に、前方部を山側に設定し、墳丘主軸は丘陵軸と一致する。青ノ山の東西には、それぞれ大東川と土器川が北流し、流域には平野部が広がる。古墳の所在する丘陵のピーク（標高45.5m）は、古墳の北方約180mにある。また、古墳の南側下方には、神社社殿や祭場の所在する長さ90m、幅25mほどの平坦面が存在する。この平坦面は、もちろん現社殿の建設時に造成されたものであり、古墳築造時には緩斜面ないしは瘤状の小ピークをなしていたと想像され、かろうじて神社隨身門周辺の



第1図 吉岡神社古墳位置図

丘陵端部に若干の隆起をみることができる。この部分にも古墳を築造することは可能であったかもしれないが、旧地形が大きく損なわれているため、詳しいことは分からぬ。古墳は、この丘陵先端部ではなくやや奥まった、尾根幅が広がりをみせはじめた端部付近に構築されている。より背後の丘陵ピーク部分に古墳を構築すると、大束川流域への眺望が東側に所在する尾根によって遮られ、平野部への眺望を重視した構築可能な位置は、現位置かより丘陵端部へと制限されたと考えられる。後円頂部の標高は32.5m、平地との比高約26.5mを測る。古墳からは、背後（北側）の青ノ山山塊を除く各方面に視界が開ける。青ノ山周縁の丘陵の中で、大束・土器両河川下流域の平野部と瀬戸内海の三者を同時に俯瞰可能な位置は、この吉岡神社古墳の所在する尾根以外にはない。こうした立地については後に考えよう。

さて本墳における調査として、昭和57年度に香川県教育委員会による測量調査（以下、1次調査と呼称する）平成3・4年度に丸亀市教育委員会と香川大学による発掘調査（以下、2次調査と呼称する）がおこなわれ、それぞれ調査成果が公表されている（香川県1984・丹羽1995、以下、とくに断らない限り吉岡神社古墳の調査内容の記述は後者を指し、小論中では「報告」と省略する）。こうした調査データをもとに、まずは墳丘形態を復元しよう。

古墳は、きわめて風化のすんだ花崗岩を基盤とする丘陵上に築造されている。後円部頂部には、後述する鳥居などの紀年銘から江戸末期と推定される本殿などの基壇が設置され（現在上部建築物は撤去されている）。それに通じる花崗岩製の石段（石段脇の水盤に安政5年（1858）石段の中程にたてられ

た鳥居に慶応3年（1867）の紀年銘がある）が後円部南面の墳丘斜面に取り付けられている（第2図参照）。また、後円部東面を中心に採土によるとみられる攪乱を蒙っている。こうした後世の人為的な改変とともに、雨水などによる浸食や滑落による変形も顕著で、墳丘の隨所に地山の風化バイラン土が露出している。墳丘は、自然地形に大きく手を加えることなく旧地形を巧みに利用して築造されているとはいえ、整った形状を実現するために盛土工などの土木的造成がなされたと考えられる。しかし、墳丘の改変は現状でそれを確認することをかなり困難にしている。

とくに後円部の変形は著しく、後円部が丘陵幅を最大限利用して構築されていることもあり、明確な墳裾をなさずに緩やかに自然地形に移行する。したがって、墳丘の正確な規模や形状を測量図から判断するのは困難である。後円部東面の標高26.0m付近において確認される、わずかなテラス面の存在を最大限評価して、小論では後円部径約28mと復元したい。1次調査時には、石段付近の標高28.0m前後の傾斜変換点を評価して、これを墳裾として墳丘復元が試みられている。しかしこの傾斜変換点は、石段付近に限られ後円部を全周するものではないことから、石段及び鳥居設置時の改変により生じたものと考えられ、墳裾とすることはできない。

前方部前面は、2次調査時に尾根筋を断ち切るように掘り込まれた、幅2m程の溝状を呈する人為的な掘り込みが検出され、墳裾は明確にとらえられた。前方部側面は盛土などの流出により明瞭な裾部をとらえられないが、おおむね標高29.2～29.5mに墳裾を求め、バチ形に開く前方部形状を復元したい。前方部形状は、図に示したように中程から開くバチ形を呈すると判断したが、必ずしも築造当初の形状を調査データから実証的に復元したものではない。

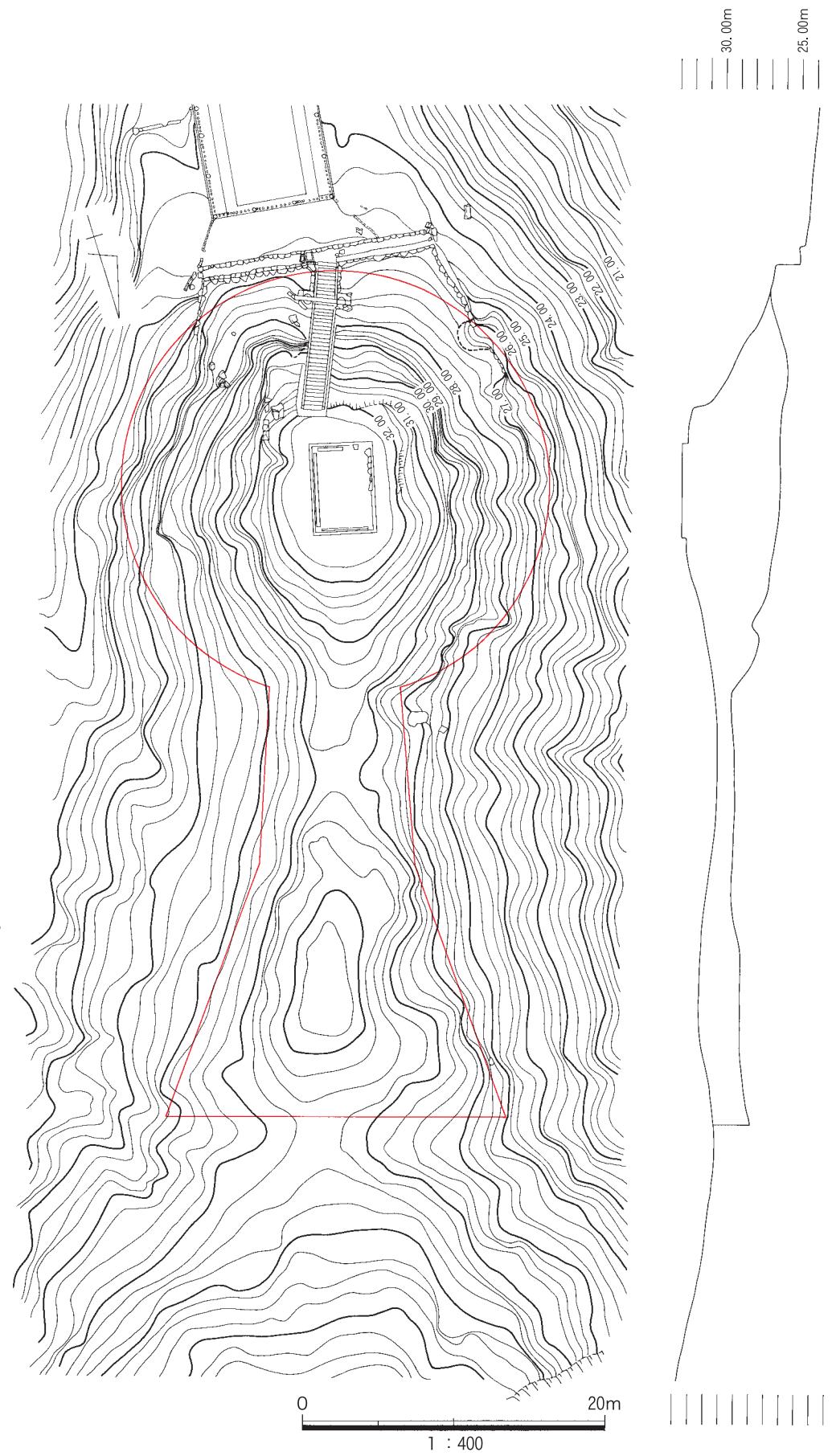
以上の検討から、本墳は全長55.6m、後円部径28.0m、同高6.5m、前方部長28.4m、くびれ部幅8.6m、前方部前面幅22.4mの前方後円墳と復元される。段築は認められない。墳丘基底部は、前方部前面で標高30.0m前後、後円部前面で同28.0m前後となり、傾斜角約5.5%となる。

さて、前方部前面の溝状の掘り込み内からは、拳大から人頭大程度の石材とともに、土器片が出土している。いずれも底面よりかなり浮いた位置にあり、溝埋没過程において流れ込んだものである。これら石材の性格については、墳裾部にまとまって出土していることから、葺石を考えることもできようが、墳丘各部に設定した他のトレーナーからは石材の出土がみられず、また出土した石材も少量なため断定することはできない。葺石であったとしても、墳丘基底部付近に2～3段程度積まれた、列石状のものであった可能性が高い。土器片は、後述するように広口壺の口縁部や体部の小片であり、出土状況から判断して、前方部頂部に据え置かれていた可能性が高い。

埋葬施設は、後円部中央に設けられた竪穴石槨である。現状では、石槨以外に埋葬施設は認められない。報告書に掲載された石槨断面図には、石槨被覆粘土の上面に層厚0.3mほどの「封土」とされる濃灰褐色泥砂の堆積が記載されており、わずかではあるが盛土の存在が推定されている。しかし石槨壁体の周囲にまでは記述が及んでおらず、墳丘盛土と石槨、それに地山の関係は不詳である。石槨は、墳丘主軸と平行してN20°Eと、ほぼ南北に主軸を設定する。四国北東部の前半期古墳では、墳丘主軸に斜行させかつ東西主軸優位が説かれている（天羽1986・北條2003）が、本墳の場合、こうした地域的原則からは逸脱する。石槨の規模は、長さ約5.5m、幅0.7mである。石槨の構造は、まず基底部に拳大程度（重さ230g前後）の小亞円礫を0.2m以上の厚さに敷きならべ、その上に安山岩板石でもって石槨壁体を積み上げる。同時に床面は、安山岩板石を隙間なく敷きならべて、その上に粘土床を構築する。粘土床上面は、「全域にわたって後世の攪乱が認められるので、本来の形状は不明」と報告されているが、一部床面

を敷石上面まで掘り下げた石槨。中央部床面の断面写真には、粘土床上面にU字状に窪む赤色顔料の薄層が明瞭に観察され（図版1参照）。割竹形木棺が安置された可能性が高い。石槨壁体基底石の2～3段は、幅0.1m程度石槨内側へせり出すように積まれてテラス状を呈しており、粘土床残存部の上端はこのテラス状を呈する壁体部分上端とほぼ同じレベルであったとされる。

石槨壁体は、下位0.6m程はほぼ垂直に積み上げられ（報告では内反りに立ち上がるとされるが、掲載の実測図や写真より判断した）、それ以上は内側に持ち送られて幅を狭める。石材は、横積みを基本的としつつ、



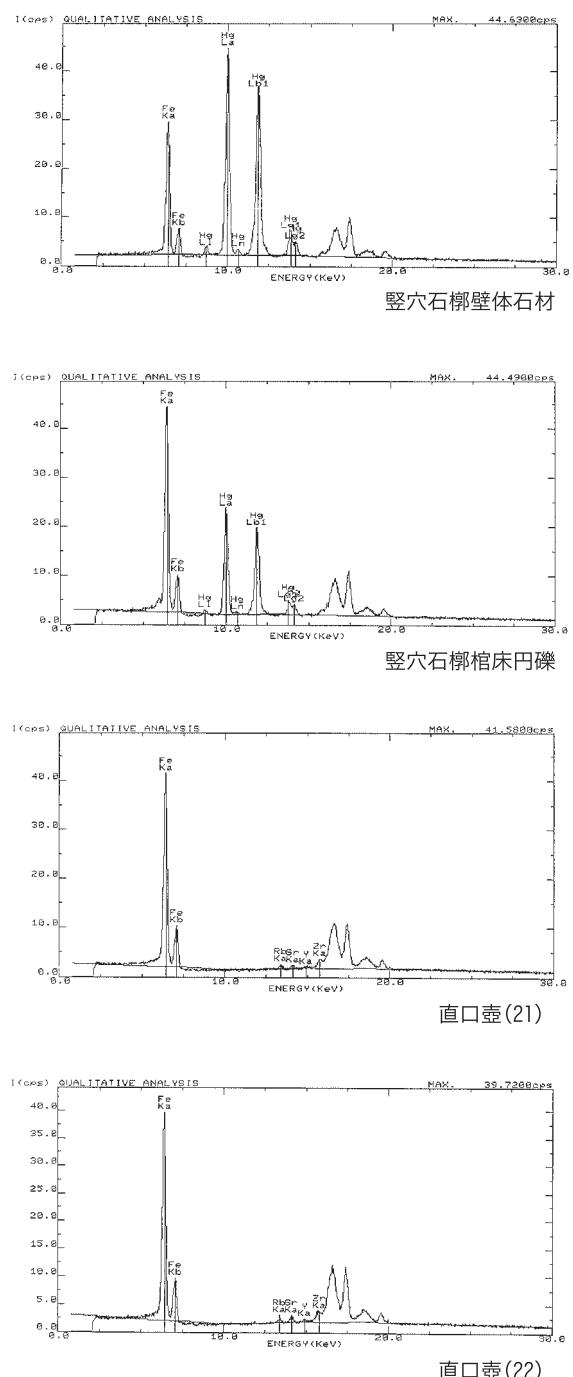
第2図 吉岡神社古墳墳丘測量図

小口積みも混じる。厚さ10cm以下の板状の割石が大半だが、一部にやや厚みのある塊石状の石材も散見される。南小口部の壁体の最上段は、2枚の板石を立てて積まれていた。意図的になされたのか、石材の不足によるものかはさらに類例などを検討して判断したい。先の床面板石から蓋石までの高さは約1mである。蓋石は7枚の安山岩板状塊石でもって塞がれ、さらに隙間を小振りな塊石で充填し、粘土でもって厚く被覆される。報告には、被覆粘土は色調の異なる三種の粘土が使用されたとされる。

石槨の壁体には、板状割石が多用され、調査時の記録写真や丹羽先生からのご教示によると、壁体はすべて安山岩系の石材で構築されていたようである。この石材の石種を特定するため、石槨内に転落していた板状石材および円礫を丹羽先生にご提供いただき、偏光顕微鏡による観察をおこなった（註1）（図版1参照）。板状石材は、表面は風化して黒灰色を呈し緻密、裸眼で斑晶を認めることはできない。鏡下で斑晶は乏しく、カンラン石微斑晶を認める。カンラン石は、0.5mm以下の自形結晶で、多くは変質のため粘土鉱物に置換されている。石基は、斜長石・单斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物があり、ガラス基流晶質～ピロキシティック組成を示す。また、外来岩片の可能性がある斜方輝石の集合斑晶がみられる。以上の特徴から、本石材は斜方輝石安山岩と推定される。また円礫は、0.5mm以下の石英・斜長石・カリ長石・泥岩の岩片を含むことから、砂岩と推定された。

青ノ山には、標高160m以上に斜方輝石安山岩などの火山岩の露頭が存在し、山麓には無数にその転石がみられる。また青ノ山山頂付近の斜方輝石安山岩は、石槨壁体に使用された安山岩と鏡下での特徴は酷似する。さらに石槨壁体となる規格的な板状石材を多量に集積するためには、板状節理の発達した露頭から直接採取する必要があろう（蔵本2004）。こうした点は、古墳築造の労働力の節減という観点からも、青ノ山山麓がその石材採取地としてもっとも有力な候補地となることを示している。しかしわざか1点のみの、しかも鏡下での鑑定結果のみからの推測であり、石槨石材すべてについて断定するわけではない。また円礫は、類似した砂岩が和泉層群中に認められることから、同層群中に源を発する土器川河床を採取地と考えたい。

なお、石槨壁体には赤色顔料が塗布されており、また基底部の小円礫にも赤色顔料の付着が認められ



第3図 出土石材・土器蛍光X線分析結果

た。石種鑑定をおこなった資料について、蛍光X線による赤色顔料の同定分析を実施した^(註2)。板状石材には、全面に赤色顔料が厚く付着しており、壁体組み上げ以前に石材に顔料を塗布した可能性も考えられる。分析の結果は、第3図に示したように水銀(Hg)の存在が確認され、水銀朱(HgS・硫化水銀)が塗布されたことが推定された。後述する人骨からも水銀朱の検出が報告されていることから、少なくとも遺体埋葬時と石槨構築時の2度にわたり、水銀朱を用いた儀礼をおこなったと判断される。

副葬品は、すべて石槨内より出土した。2次調査以前に、筒形銅器1、銅鏡5、鉄刀子、鉄剣などの副葬品が知られていたが、現在は散逸してしまい実見することはできない。

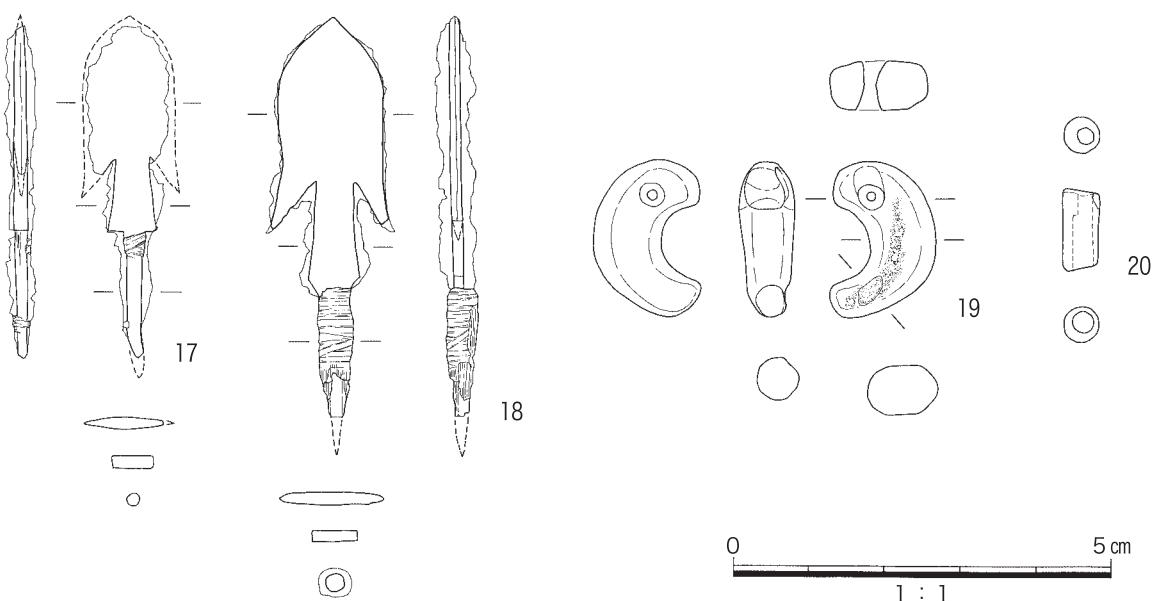
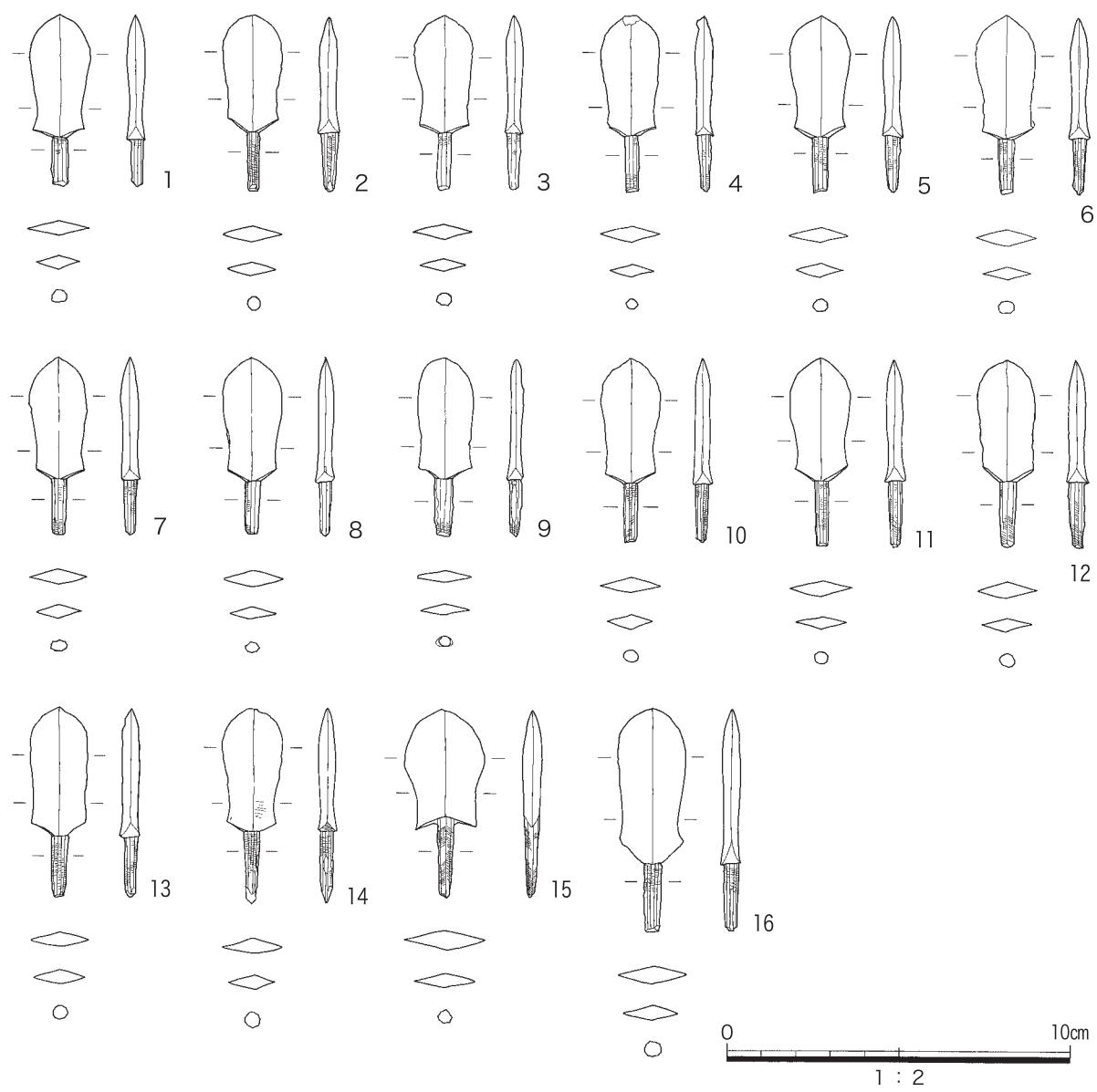
2次調査では、豎穴石槨内より銅鏡16、鉄鏡4、鉄刀子片、ヒスイ製勾玉1、碧玉製管玉1、土師器直口壺2以上、近世陶器壺2、1体分の人骨が出土した。銅鏡は、すべて南小口部の乱掘坑付近よりまとまって出土した。出土状況に規則性がなく、乱掘時の移動の可能性は拭えない。鉄製品と玉類は石槨中央部付近攢乱土中などより、土器は乱掘者により近世陶器壺に納められたものほか北小口部より破片数点が出土した。石槨内より土器片が出土したことは、土器が墳丘上あるいは墓壙上面へ供献されたものではなく、石槨内に副葬されていたことを示している。以上の副葬品はいずれも、本来の副葬位置から遊離している可能性が高い。なお、鉄鏡と銅鏡は後述するように、一部に矢柄が装着されていた可能性がうかがえることから、鞞などに納められて副葬された可能性も考えられる。しかし、出土状況から鉄鏡と銅鏡が同じ鞞に納められていたかどうかは判断できない。人骨は、もう1点の近世陶器壺に納められて出土した。人骨には、頭蓋骨に赤色顔料が多量に付着していることから、本墳の被葬者のものと判断される。報告には、香川医科大学法医学教室の霧生孝弘氏の鑑定結果が掲載され、それに従うと30歳前後の男性とされる。男性被葬者に鏡類が副葬される頻度が高いことは清家章氏によって指摘されており(清家1996)、本墳での人骨の鑑定結果と副葬品組成はこれと矛盾しない。

2. 出土遺物の検討

本墳より出土した遺物は上述したとおりである。以下、個別の遺物について若干の説明をおこなう。

筒形銅器は、江戸末期に出土したとされるものが1点、神社総代のもとに保管されていたようだが、現在は所在不明で実見することができない。しかし、昭和29年飯野村史編纂に際して実測図が作成されており、およその形状をうかがうことができる。実測図によると筒形銅器は、全長13.1cm、上端径2.0cm、下端径3.1cm、器壁厚0.2cmとされる。透孔は上下2段4方向にあけられており、上端より1.5cm下方に径0.5cmの目釘孔が穿たれている。透孔は、上段が長さ3.9cm、幅0.4cm、下段が長さ5.0cm、幅0.6cmのいずれも長方形で、上下千鳥に配されている。山田良三氏の分類(山田2000)の第1類に分類される。また、全長15cmを超える大型品が、相対的に古相を示すとする指摘(福永1996)にしたがえば、吉岡神社古墳例は小型の部類に含まれ、より後出的様相を備えている可能性がある。

銅鏡は、江戸末期の乱掘時に5本、2次調査時に16本の計21本が出土している。これは香川県内では最も多い^(註3)。四国島内でも愛媛県朝日谷2号墳の44本、同国分古墳の36本に次いで多く、現状では徳島県愛宕山古墳の21本と同数である。2次調査では、すべて石槨南小口付近の「床下部の礫層と床板石上、壁下部段上部上」の3箇所に分かれて出土した。いずれも乱掘による2次的移動を蒙っている可能性が高いことは既述したとおりである。緑青により表面の腐食が進行している資料が多く、一部に白銅色の光沢を放つものも認められた。銅鏡は、柳葉式20点と十字鎬腸抉柳葉式1点の2種類に大別され、柳葉式はさらに大形と小形の2種に細別される^(註4)。



第4図 吉岡神社古墳出土遺物実測図 1

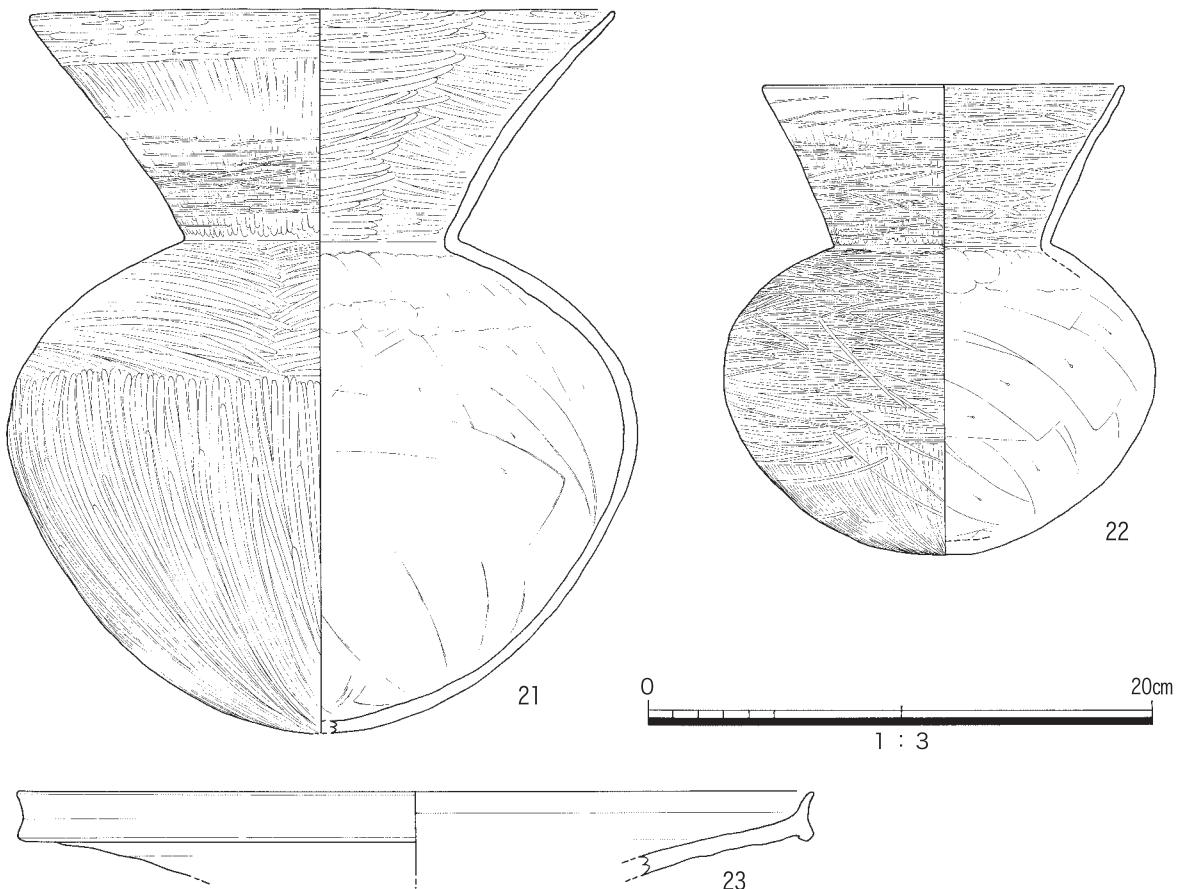
大形柳葉式銅鎌（第4図16）は、1点のみ出土している。全長6.4cm、鎌身長4.5cm、同幅2.0cm、同厚0.53cm、重量18.30gで、鎌身中軸に縦一字に鎬がある一般的なものである。鎌身部の整形痕は不明瞭で、これは他の銅鎌にも共通する。身部・関の外形ラインは整ったS字状を呈し、切先は鋭い。茎端部は切断され、その形状は「突起状に残るタイプ」（松山市1998）である。茎の整形は非常に丁寧で、軸に直交する方向を主として一部斜交する方向に研磨され、均等な幅の11面ほどに仕上げられている。

小形柳葉式銅鎌は、19本出土している。詳細な観察が可能なのは、調査により出土した14本（同図1～14）である。全長5.0～5.65cm、鎌身長3.4～3.75cm、同幅1.6～1.8cm、同厚0.4～0.5cm、重量8.81～11.97gで、大形鎌同様一般的な形態である。鎌身長及び同幅は一定しており、一定程度の規格性は伺えるが、細部形態には若干の個体差が認められる。細部形態より、身部・関の外形ラインはかろうじてS字状を呈し、鎌身幅が関部幅を上まわり、関下端部が直線的ないし緩い曲線状に成形される（1～8・10・11・14）と、外形ラインのS字状カーブが不明瞭で、鎌身幅と関部幅がほぼ等しい（9・12・13）の大きく2種に細分される。しかし、前者にしても鎌身部の平面形態が左右で異なり、切先がやや鈍化した後出的様相を呈するものが含まれるなど、全体的に整形工程の粗雑・省力化傾向がうかがえる。この点は関の位置と厚みにも反映されており、関高は4mmを超えるものではなく、関厚も6.5mmを超えるものはない。鎌身部の整形痕は不明瞭で、かろうじて確認された14では、鎬に直交して研磨されたとみられる。茎端部は切断されたものが多数を占め、大形鎌同様「突起状に残るタイプ」が多数を占める（1～11）。茎の整形は概して丁寧で、その研磨方向は軸に直交する（1・3～8・10・13・14）と、斜交する（2・9・12）と、直交を主に一部斜交する（11）の3者があり、8～11面ほどに仕上げられている。なお、3は関部にも整形がなされており、図の茎左面に縦方向の研磨痕が認められる。

十字鎬腸抉柳葉式（15）は、1点のみ出土している。全長5.4cm、鎌身長3.4cm、同幅2.35cm、同厚0.55cm、重量14.01gである。雪野山古墳での分類の、身部幅の広いb類に分類される。しかし逆刺の整形は、雪野山での分類に合致せず、逆刺の内面が稜をなしたa類の整形法が採用されている。a類がb類に先行する可能性が指摘（高田1997）されていることからすれば、本例はその移行期の製作の可能性も考えられる。茎端部は、鋳放しのままの可能性が高い。茎の整形は、茎の両側から逆刺に平行する方向に削り込み、8面ほどに整形されている。なお、茎の一部に矢柄とみられる木質部がわずかに付着する。

鉄鎌は、江戸末期の乱掘時に3本、2次調査時に4本の計7本が出土している。調査時の資料のうち、図示した2本（同図17・18）が丸亀市立資料館に保管されている。いずれも広根式の腸抉柳葉式鉄鎌で、鎌身部の大きさと関の形態が相違する^(註5)。18は、茎端部以外完存し、現存長10.5cm、鎌身長5.65cm、鎌身幅2.8cm、現重量32.77gである。17は、茎以外に刃部の大半を欠損し、現存長8.75cm、復元される鎌身長4.7cm、鎌身幅2.5cm、現重量14.76gである。前者は斜関、後者は角関である。身部はいずれも扁平で、茎の断面形は円形を呈する。いずれも矢柄の口巻部分が残存し、樹皮巻きである。

勾玉は1点（同図19）のみ出土している。全長2.05cm、幅1.35cm、厚さ0.7cm、重さ2.98gの抉りの浅いC字形を呈する。ふかい緑色（3.5G4.5/6）を呈する^(註6)透明度の高い良質のヒスイ製で光沢をもつ^(註7)。穿孔は両面からあこなわれ、孔径は3.0mmである。図右側面では、頭部から尾部にかけて幅4.2mmほどの浅い楕状の彫込みが認められ、その部分を中心に側面の一部に未研磨部分が帯状に観察される。おそらくこれは、原石段階での加工痕が残存したものか、もしくは元の製品に穿たれていた穿孔痕跡で、その製品が破損などしたために本製品に再加工した可能性も考えられる。なお、右側面にはごく僅かに赤色顔料の付着が認められる。



第5図 吉岡神社古墳出土遺物実測図2

管玉も1点(同図20)のみの出土である。全長1.03cm、径0.48cm、重さ0.35gの整った円筒形を呈する細身の管玉である。やや緑味の強い灰青緑色(2.5BG 5/2)を呈する碧玉製で、よく研磨され光沢をもつ。上下端とも斜めにカットされており、とくに下端は傾斜が大きい。しかし、下端が平坦な面を呈するのに対し、上端はごく僅かな突面状を呈し、また周縁の稜線を潰すように研磨されている部分や微細な剥離痕も見受けられる。このことから、上端は製作途上もしくは製作後に欠損し、幾分長さを減じて再加工された可能性が考えられる。穿孔は石製穿孔具による両面穿孔^(註8)で、上端の孔径2.4mm、下端の孔径3.2mmである。また上端より浅い位置で孔のずれが見受けられるが、これも上記した再加工の推定と矛盾しない。

土器は3点(第5図21~23)を図示した。21・22は竪穴石槨内より出土した精製直口壺である。21の口縁部は0.2cmほどの歪みがみられ、復元される口径は22.8cmとなる。器高28.7cm、口縁部高9.0cm、体部高19.7cm、体部最大径は復元値で24.8cmを測り、体部内容量は約5.4ℓである。口縁部は約80%、体部は約40%が残存するのみで、完形品ではない。口縁部は緩やかに外反して開き、端部付近でわずかに内湾する。端部は丸くおさめる。口縁部外面は、縦方向のミガキ調整の後、ヨコナデ。端部付近に横方向のミガキ調整が施される。内面は、横方向のミガキ調整である。体部は、やや肩に張りのある球形を呈し、底部は丸底となる。体部最大径は、体部高のほぼ3/5の位置にある。体部外面は、縦ハケの後、肩部は横方向のミガキ調整が、体部下半は縦方向のミガキ調整がそれぞれ施される。内面は左上がりの削り調整の後、肩部に押圧痕が附される。全体にミガキ調整は緻密であり、比較的丁寧に施されている。胎土

はきわめて精選された素地粘土が使用されており、最大粒径1mm以下の石英・長石・火山ガラス粒を少量含むのみである。なお、体下半部外面に、径12.5cmほどの黒斑がみられる。

22の口縁部は約7mmの歪みがあり、復元される口径は14.45cmとなる。器高18.5cm、口縁部高6.3cm、体部高12.2cm、体部最大径16.75cm、体部内容量約1.5ℓで、体部最大径は体部高の中位より若干高い位置にある。口縁部は約40%、体部は約70%が残存するのみで、完形品ではない。また、器表面の1/3程度は磨耗や剥離が顕著にみられる。しかしこれが土器製作から出土までのどの段階で生じたものかは不明である。口縁部は緩やかに外反して開き、端部付近でわずかに内湾する。端部は丸くおさめる。外面は縦方向のミガキ調整の後ヨコナデ調整、内面は横方向のミガキ調整を施す。体部はやや偏球状を呈し、底部は丸底。頸部内面は丸く仕上げられる。外面の調整は、縦方向のミガキ調整の後、主に体部上半部を中心に横方向のヘラナデ調整を加える。内面は、完形に復元されているため必ずしも詳細な観察がおこなえたわけではないが、左上がりの削り調整を主として、肩部に押圧痕をとどめる。なお外底部に径6.5cmほどの黒斑がみられる。

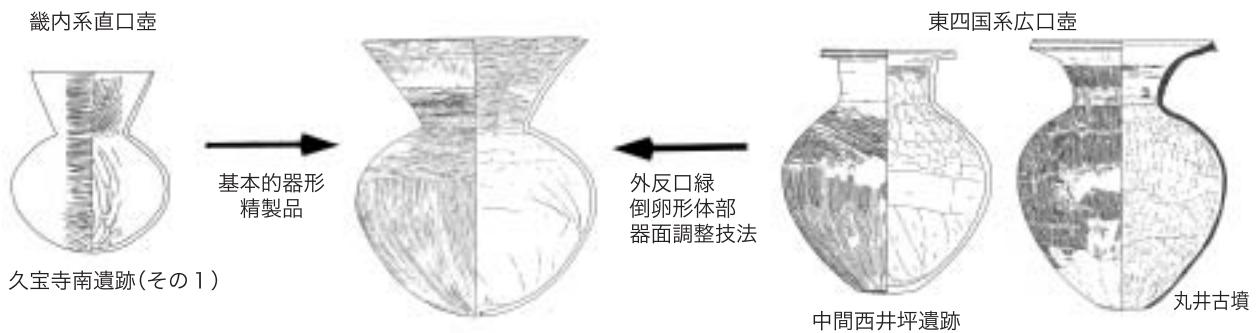
以上のように直口壺2点は、外面調整などの点を除けば、基本的には同一の成・整形技法で製作されている。胎土の特徴も両者は酷似しており、素地粘土採掘地と共に、土器製作技法を共有する集団内で製作された可能性を示唆する。また、いずれも完形に復元されているため断定はできないが、現状では人為的な穿孔の痕跡は認められない。顔料の塗彩についても確認できなかった。

23は、前方部裾より出土した広口壺の口縁部片である。8cm角程の小片のため、計測値や図上での傾きにはやや難がある。口径31.4cmに復元される。口縁部は斜上方へ直線状に開き、端部は上方へ強く摘み上げつつ、下方にも鈍く肥厚させ大きく拡張する。端面は直立しつつ、強くヨコナデ調整を加えて緩やかに湾曲する。口縁部外面は押圧後ヨコナデ調整、内面は摩滅・剥離のため調整は不明。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。器表面への顔料塗彩は確認できない。胎土はやや粗く、3.0mm以下の石英・長石粒を含み、少量の黒雲母細粒も混じる。また、やや多量の火山ガラス粒も含まれる。胎土の特徴から、花崗岩起源の沖積層を素地粘土に使用していると考えられ、古墳周辺の丸亀平野内の製作の可能性が想定される。なお、上記した2点の直口壺とは、胎土・色調は明瞭に異なり、素地粘土採取地を異にする可能性が高い。

さて、以上の出土遺物から、本墳の築造時期を特定することを試みよう。まず研究の進んでいる土器の編年的位置関係を検討し、その他の遺物がその時期と矛盾しないかどうか検証し、本墳の築造時期を決定したい。

まず直口壺について検討する。この直口壺は、いずれも基本的には畿内系の土器であり、本地域の集落遺跡においてはまれに数個体の出土がみられる程度で、弥生時代後期以降の土器組成の中に直接その系譜を辿ることのできない資料である。したがって畿内地域での編年の枠組の中で所属時期を求める必要がある。

2点の直口壺のうち大形品(21)について、大きく外反して開く口頸部と倒卵形体部にみられる形態的特徴、及び口縁部内面と肩部外面に施された分割ミガキ調整と体下半部の縦ミガキ調整といった整形技術は、本地域の弥生後期以降の中形広口壺などを中心に共通する内容を有する。基本的形態として畿内系直口壺を採用するが、その成・整形手法には在地の伝統が色濃く認められ、畿内系からは逸脱した様式を備える模倣品と位置付けられよう(第6図参照)。これを直接畿内の編年觀の中に位置付けるのは多少無理がある。



第6図 吉岡神社古墳出土大形直口壺成立概念図（縮尺不同）

次に小形の直口壺（22）は、おおよそ無理なく畿内地域の直口壺と比較可能な資料と考え、これを素材に時間的位置関係を確認したい。以下強引ではあるが論証の手間を省いて、その形態的類似性から大阪府久宝寺南遺跡（その1）K3号墓K-SX-3出土資料との比較を行う。

久宝寺南遺跡出土資料と比較すると、吉岡神社出土資料では頸基部径が太く、口頸部高と体部高の比がより1:1に近い、口径と体部最大径がほぼ等しいといった相違がみられる。こうした諸点は、寺沢薰氏の編年案（寺沢1986）に従うなら、吉岡神社古墳出土資料がより新しい様相を備えていることを示している。久宝寺南遺跡出土資料が布留2式前半に位置付けられる（杉本2003）ことから、吉岡神社古墳出土資料は同2式後半以降となろう。

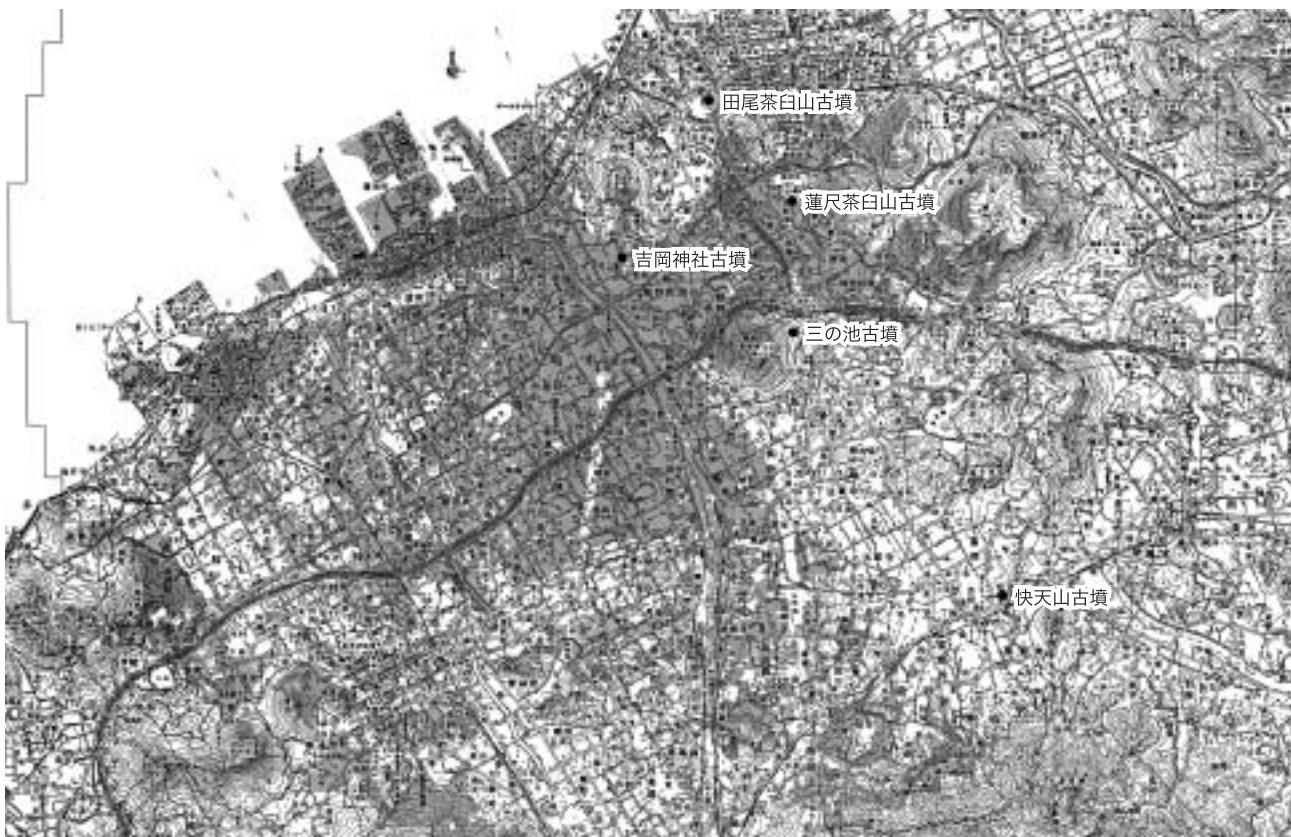
布留2式後半の精製直口壺は、退化傾向にあることが指摘されている（杉本2003）が、なお資料の増加を待ちたい。布留3式以降、精製直口壺の良好な資料は乏しいようだ。しかし香川県金毘羅山遺跡区SK01、奈良県伴堂東遺跡SK2211、同発志院遺跡SK15中層出土資料など限られた資料をみると、プロポーションの崩れやミガキ調整の退化傾向が進展するのは間違いない、このあたりを吉岡神社古墳出土資料の下限とできよう。しかし、古墳への供献を目的として製作された専用器に、一般集落出土土器の変遷觀をそのまま適用することにも不安がある。現状では、吉岡神社古墳出土直口壺は布留2式後半併行期を中心に、布留3式前半まで下る可能性を考えておきたい。

広口壺は、口縁部のみの資料であるため、時期を特定するのは非常に困難である。ただし口縁端部は大きく拡張するものの、端面への凹線などの加飾は省略されており、国分寺六ツ目古墳や姫塚古墳出土例よりはより新しい傾向と捉えることもできよう。こうした点は、先の直口壺の年代観と矛盾するものではない。

次に副葬品であるが、銅鏡は既述したように雪野山古墳出土資料に近い内容をもつ。しかし小形柳葉鏡を中心に、切先が鈍化し、鏡身・関部の外形ラインが崩れ、茎の整形面も8面が主体となるなど、各整形工程にみられる一定の省力化傾向は、後出する様相と理解できる。

以上の検討をふまえ、吉岡神社古墳の築造時期を前5期として理解しておきたい。

なお、吉岡神社古墳と同様に供献土器として中形直口壺が出土した古墳には、管見に触れた限りで、福井県宿東山1号墳、岡山県矢部18・19号墳、同郷境墳墓群5号墓、同田邑丸山2号墳、同光坊寺1号墳、広島県上安井古墳、同弘住第3号古墳、福岡県横隈山遺跡第7地点方形周溝墓、同津古生掛古墳、同津古2号墳、佐賀県赤坂古墳、同双水柴山2号墳がある。上掲した各資料はいずれも布留2式前半までにおさまる可能性があり、布留2式後半以降に下る吉岡神社例は最も後出する可能性が高い。しかし、各古墳間には地域やその内容、供献位置などに斉一性がなく、有意な関係性を認めることは現状では困



第7図 吉岡神社古墳可視領域図

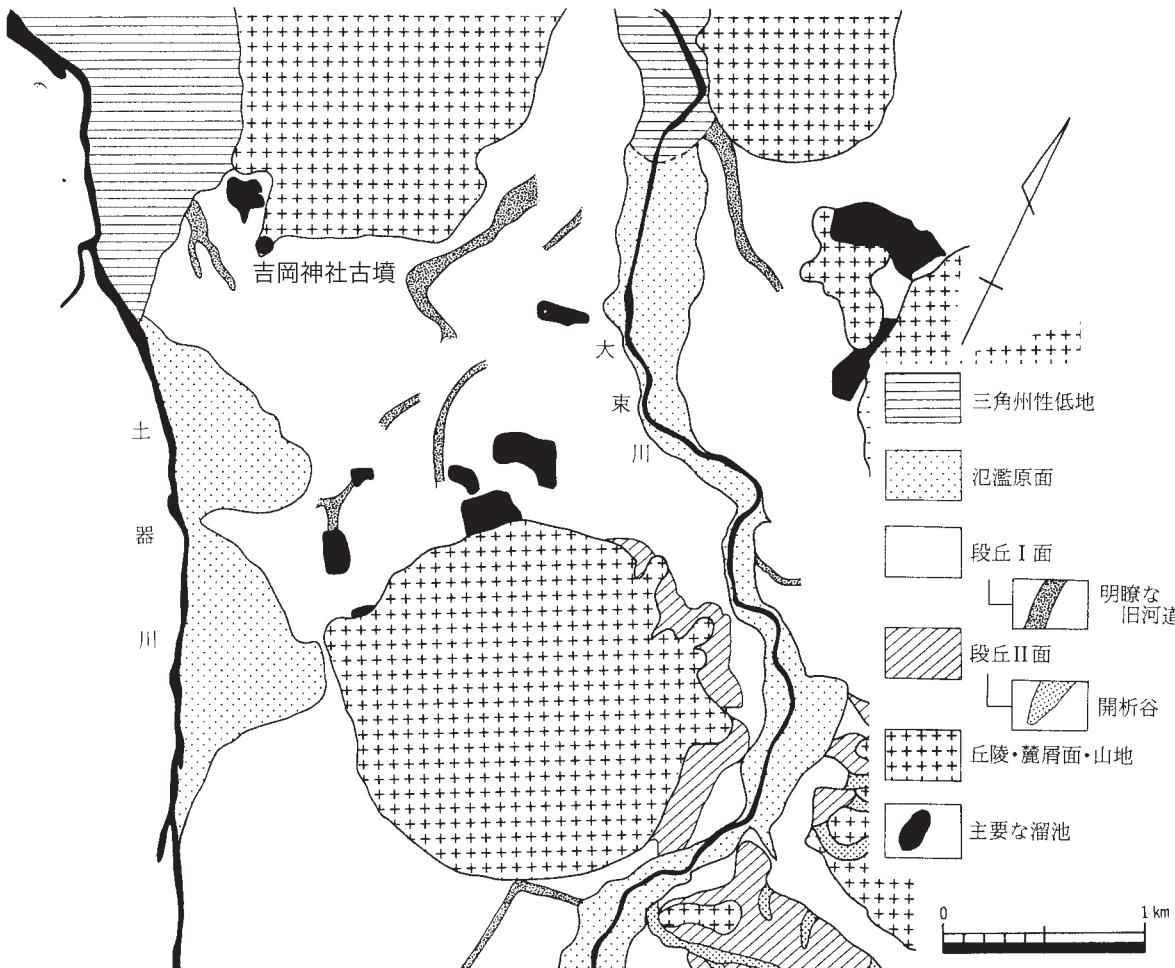
難と思われる。むしろ、各古墳の個別の事情を想定すべきではなかろうか。

3. 吉岡神社古墳築造の歴史的背景

以上、吉岡神社古墳の既往の調査資料を再整理し、事実関係について確認作業をおこなってきた。吉岡神社古墳は、後円部を平野部側に設定し後円部側へ傾斜する墳丘基底ライン、細長くバチ形に開く前方部形態、明確な葺石の不在、墳丘上への在地系壺形土器の供献などの点で、在地の伝統的な儀礼様式を認めることができるいっぽう、豊穴石櫛は墳丘主軸に平行しつつ南北に設定、畿内系土器の供献などの点から、非在地系様式を融合させた独特の造墓プラン = 儀礼様式を有していることが判明した。本地域における各古墳の造墓プランの多様性から判断して、どのような儀礼様式を採用するかは、基本的にその古墳の被葬者ないしは継承者の独自の判断のもとにおこなわれた可能性が想定できる。そこには前方後円墳築造の目的のひとつが表現されているに違いない^(註9)。

また吉岡神社古墳の副葬品に含まれる筒形銅器については、大和盆地北部や河内平野に巨大古墳群を築いた政権内の新興勢力により、「あらたな身分的格付けを得た各地の首長層、有力者に与えられたもの」との福永伸哉氏の評価がある(福永1998)。一方田中晋作氏は、畿内地域の筒形銅器と定型化以前の甲冑との供伴例に注目し、両者を副葬する古墳は既存の伝統的な勢力ではなく新興勢力であることを想定し、列島内での生産・供与主体を特定できないとする(田中1998)点で福永氏の見解と対立する。両者の相違は、おそらく佐紀古墳群の実態解明の中で解決される問題であろう。筒形銅器副葬の契機についてはおくとしても、なお銅鏡の大量副葬に顕現される畿内の政権との関係性は想定しておきたい。

以下では、近接する古墳の動向を踏まえつつ吉岡神社古墳の有する位置についていくつかの課題を提示することで、今回の資料再整理のまとめとしたい。



第8図 吉岡神社古墳周辺地形分類図

第7図は、吉岡神社古墳の後円頂部より半径10km圏内の可視領域を、「カシミール3D」を使用して国土地理院発行の1/50,000地形図の中に示したものである。この図から、土器川及び大東川下流域を中心に半径約3.5km圏内がとくに眺望に優れており、裸眼により古墳を目視した場合に対象物を認識可能な範囲も、おそらくこのあたりを限度とするであろう。つまり、半径約3.5kmのこの範囲は、吉岡神社古墳を築造した集団の基盤を一定程度反映していると考えられる。

大東川下流域には、三の池古墳以下3基の前方後円墳からなる首長墓系列が認められる。吉岡神社古墳は、上述した理由からこうした土器川・大東川下流域の首長墓系列に含めて考えることが妥当であろう。墳丘形態や副葬品の内容などから各古墳の編年は、三の池古墳（全長35.0m・前3期）蓮尺茶臼山古墳（前4期）吉岡神社古墳（全長55.6m・前5期）田尾茶臼山古墳（全長76.5m・前6期）となる。もっとも内陸部に位置する三の池古墳以降、順次海側へ築造位置を移動させつつ、また墳丘規模を拡大させながら、首長墓墳の継起的な築造がなされたことを想定したい。

土器・大東川下流域が古墳時代にどのような地形環境を呈していたかは、ここで詳しく触れる余裕はない。木下晴一氏の復元によれば、両河川河口部の砂州背後には三角州性低地が広がり、古代末～中世の両河川の段丘化による河道の固定化以前は、土器川は飯野山北方で緩やかに蛇行して、大東川方向に流下していたとされる（木下1991・同1995）。本地域の平野部には、こうした網目状に配された両河川旧流路に縁取られた紡錘形の微高地が点在し、そのいくつかに当該期の集落群が展開していたのである。

機能を停止した低地帯の多くは、生産域として利用されたと推定されるが、4代にわたる首長墓墳を誕生させた原動力を、本地域の生産力の中にのみ求めるのはやや無理があるのではないだろうか。

再度吉岡神社古墳に戻ろう。吉岡神社古墳の北西0.6km付近には「郡屋」という字名があり、古代の鶴足郡衙の所在が推定されている（木原1988）。さらにその南、雁又池付近からは、かつて奈良後期の複弁八葉蓮華文軒丸瓦などが出土し^(註10)、中世文書にその名を記す歓喜寺の存在が想定されている（丸龜市2000）。考古学的に郡衙遺構を示すデータは現在までのところ得られていないが、隣接する古代寺院の存在は有力な傍証となろう。そして、推定南海道より北に約3kmも偏在して郡衙が設定されていること、「郡屋」に近接して土器川西岸に「高津」という字名^(註11)もみられることは、鶴足郡衙が土器川河口部の港湾施設を兼ね備えた機能を有していたことを想定できないか^(註12)。かつて佐藤竜馬氏は、坂出市下川津遺跡での7世紀中葉にはじまる大型建物群の特殊な配置形態に注目し、周辺遺跡の動態と出土遺物の検討から、在地首長層が主導した生産・流通拠点としての下川津遺跡像を提出した（佐藤2000）。

土器・大東両河川下流域の集団が保持した、こうした物資集積と港湾機能をどの時代まで遡らせて付与できるのかは、なお資料の増加と慎重な検証が必要だろう。隣接する綾川下流域の集団や丸龜平野西縁の大麻山北東麓の集団は、一定数の積石塚前方後円墳系列を擁し、土器・大東川下流域集団と際立った対照をみせる。前4期の蓮尺茶臼山古墳に彷彿三角縁神獸鏡が、続く吉岡神社古墳への威信財の副葬は、既述したように畿内の勢力との緊密な関係を物語る。その背後に、瀬戸内航路の寄港地として、土器・大東両河川を利用した物資集積地としての本地域の立地特性を大きく評価すべきなのではなかろうか。また、蓮尺茶臼山古墳の築造とほぼ時を同じくして、当時としては四国最大規模の快天山古墳が大東川上流域に築造されることは、より広域的な視点から本地域の首長墓墳の築造を考察する必要を示している。

弥生後期から古墳前期の土器供献儀礼について

1. 弥生墳墓における土器供献儀礼

東四国地域、とくに讃岐地域の弥生時代の墳墓は、丘陵上に選地し出自集落からは乖離した位置を占めるタイプと、集落近接地ないしは集落内に墓域を設定し、出自集落との関係を明確に意識するタイプの2タイプが存在する。両者とも後期中葉から後半には出現しており、現状ではほぼ同時に本地域の弥生墓制の中へ登場する。前者を墳丘墓、後者を周溝墓と仮に呼ぶ^(註13)こととすると、墳丘墓型の立地は前期古墳へと継続するのに対して、周溝墓の系譜を引く古墳時代の墳墓は、前期初頭の空港跡地遺跡S T a 01・05以外には現在までのところ確認されてはいない。空港跡地遺跡例にしても、基本的にはわれわれが首長墓墳と認識するいわゆる古墳とは異質な小規模墳である。こうした立地の差は、それぞれを築造した集団のイデオロギーの差として理解できる。墳丘墓型の丘陵上立地は吉備を中心とした瀬戸内地域に、周溝墓型の平野部立地は畿内を中心とした地域に、それぞれの来歴を求ることは可能だが、その讃岐への波及の実際はなお検討の余地があろう。

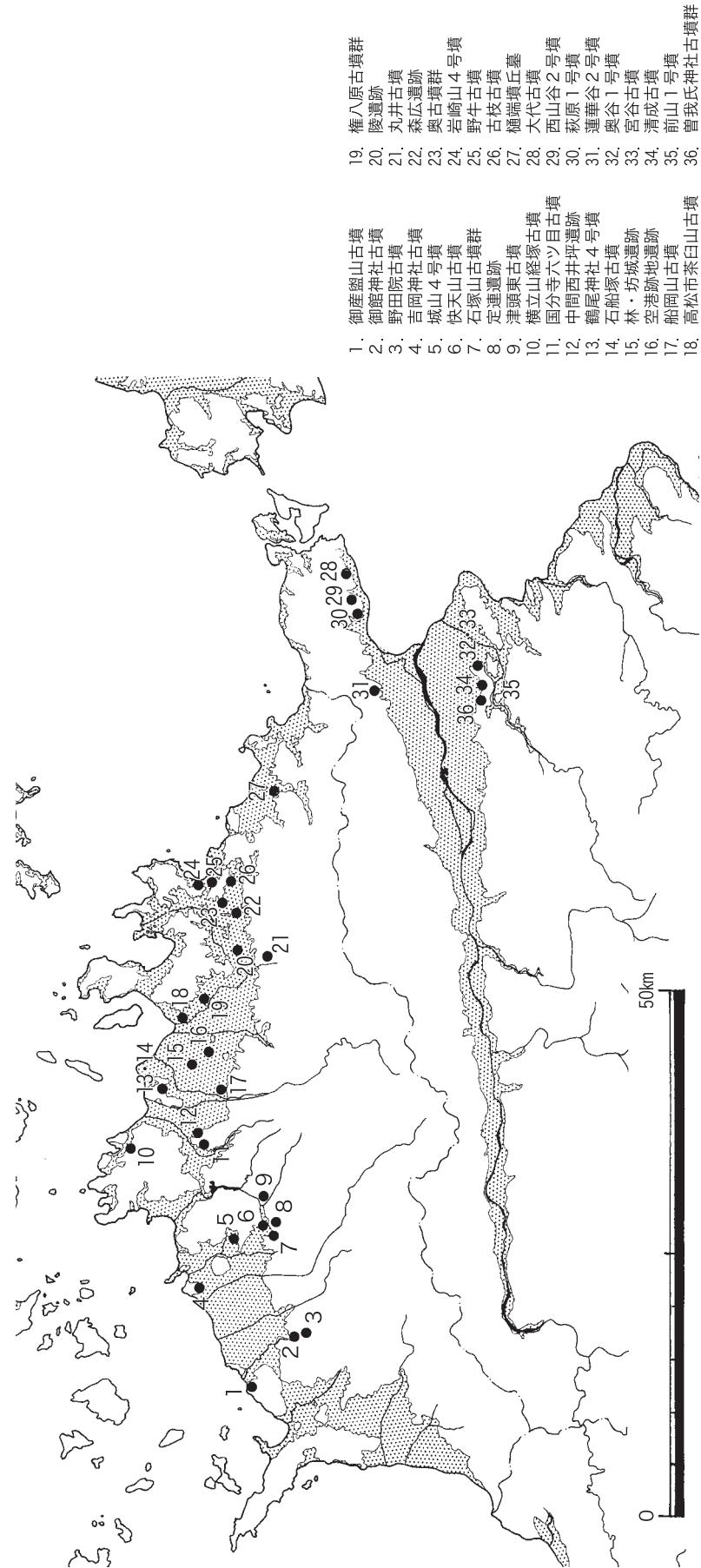
上記したように、本地域において墳丘を有する墳墓が顕在化するのは後期後半期以降となる。たしかに前・中期の周溝墓は知られているが、それが後期後半期以降の周溝墓の系譜的な祖型とはならない可能性が高い。少なくとも後期前半期には、墳丘を有する墓の断絶期が存在することは確実な情勢である。この点は、より重要な現象として今以上に評価すべきである。それは単に墳丘の顕在化以上に他の要素、例えば鉄製武器や農工具類の副葬や供献土器の特化現象を伴った変化であることを含め、今後の検討に

委ねたい。

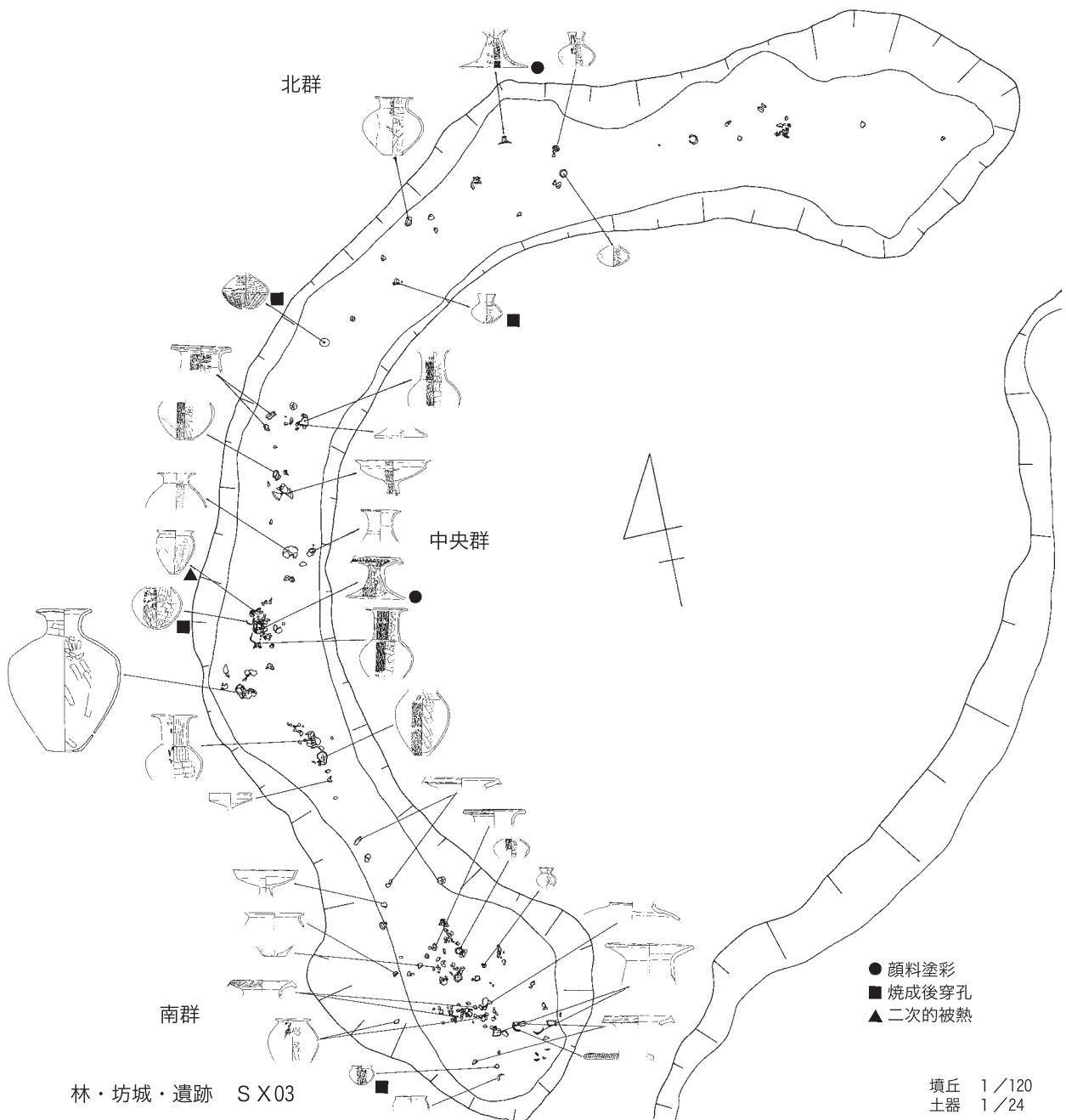
土器は、墳丘墓、周溝墓いずれからも一定量出土している。しかしながら、築造の母体となる集落に近接する周溝墓の場合、それが供献されたものであることを実証するのは、特殊な場合を除いてかなり困難が伴う。つまり儀礼とは無関係な周溝埋没途上での投棄行為などにより、土器が混入する可能性が否定できないためである。墳墓への土器供献の研究は、それをはじめた瞬間に大きな壁に突き当たる。土器の残存率や出土状況を基準とする場合でも、周溝内出土の供献土器の場合、二次的移動などの不確定要素を考慮する必要があり、実証的な供献土器の抽出は事実上不可能に近い。したがってあってこの問題には深入りせず、以下の検討では時期的にまとまっていれば積極的に供献土器として評価する姿勢をとる。確かに一定のノイズを伴うことは避けられないが、少なくとも取りこぼしなく供献土器を一定の基準にしたがって検証することを優先すべきと考えたからである。

では讃岐地域の弥生墓における供献土器の具体相を検討することとしよう。

林・坊城遺跡 S X 03^(註14) 標高 9m 前後の緩扇状地上に立地する円形周溝墓群であるが、母胎となる集落域については確認されていない。現在までに約 50m 離れてほぼ等間隔に南北に列状に並んだ 3 基の周溝墓が検出されている。詳細な調査内容が公表されているのは、中央に位置する S X 03 である。S X 03 とそれ以外



第9図 検討遺跡分布図



第10図 弥生墳墓出土の供献土器 1

の各周溝墓間では、墳丘規模・形状は酷似するものの供献土器の量や内容に格差がみられるという。こうした格差が生じた要因は、詳細な調査内容が公表された以降の重要な検討課題となろう。

さて、SX03は径13mほどの円形周溝墓で、南北2方向に幅2~3m、長さ4m前後の立橋部を有する。墳丘は大きく削平され、周囲に残存深0.4mほどの周溝が残されているに過ぎず、また埋葬施設も確認されていない。後述する周溝内出土土器より、後期後半に位置付けられる。

周溝内よりコンテナ15箱程度と多量の土器が出土した。これらは主に西側周溝からの出土であり、東側周溝についてはその形状を含め詳細は不明である。以下に記述する土器は、したがって西周溝より出土したものである。周溝内からは、後期後半の土器群とともに布留式新相併行期の土器群が混在して出

土している。周溝内堆積層が薄いことは、両期の土器群が成層的に堆積したものではないことを示しており、周溝内の複数遺構の重複の可能性も想像されるが、報告内容に明確な根拠は提示されていない。後期中葉の土器群が第10図に示すように周溝内各所より出土し、また残存状況の良好な個体も多く含まれることから、ここでは本土器群が墳墓に伴う供献土器であることを確認するにとどめる。

供献土器は、図に示すように大きく北・中央・南の3群に分かれて出土している。北群は、中形広口壺1個体、中形細頸壺1個体、小形直口壺3個体、中形器台1個体ほかが、中央群は、大形広口壺3個体、中形広口壺2個体、中形長頸広口壺5個体、中形甕1個体、中形高坏2個体、中形器台1個体ほかが、南群は大形広口壺6個体・中形細頸壺1個体・小形直口壺1個体・中形甕1個体・中形高坏1個体・小形鉢2個体ほかがそれぞれ出土している。各群により器種組成にそれぞれ相違があり、また完存率も北・中央群で高いのに反して、南群では破片資料が多数を占める。一方大形壺は、いずれも破片資料が大半で、周辺に散在する体部破片も接合不能な個体が多い。こうした大形壺の出土傾向は、遺構上面の削平や調査精度を考慮する必要もあるが、基本的には墳丘上への供献とその後の転落・埋没というプロセスを示唆するものであろう。大形壺がとくに南陸橋部周辺に集中することは、陸橋部上への集中的な大形壺の供献を反映しているものと考えたい。

供献土器は、集落出土器種のかなりの部分をカバーする、器種組成に富んだ内容をみせる。全体的に壺の頻度が高いのは、墳墓という特殊な事情を示唆するものと考えたい。一見雑多な壺諸形式の集合にもみえるが、その実は大形広口壺、中形長頸広口壺、小形直口壺と、器形により主体となる器種に偏りがみられ、意図的な選択がなされている可能性が高い。こうした選択は供献位置にも一定程度反映されている可能性があり、南群は大形壺、中央群は中形壺、北群は小形壺がそれぞれ主体を占める。

なお2個体の器台の外面は、いずれも水銀朱により塗彩されている(第20図参照)。磨滅や剥離の進んだ土器が多数を占めるが、確実に顔料により塗彩されていたのは、上記器台のみであった。また線刻などによる加飾も、中形長頸広口壺と中形器台それぞれ1個体にみられるのみで、概して装飾性に乏しい。穿孔は、中形長頸広口壺、中形細頸壺、小形直口壺のそれぞれ底面中央と、小形鉢底部付近に焼成後径1.3~2cmほどの小円孔が穿たれているのを確認した。資料的制約から穿孔行為の正確な頻度は不詳ながら、すべての個体に穿孔がなされていたわけではなく、また甕・高坏には穿孔がおこなわれなかつた可能性が高い。想像を逞しくすれば、上記した器種の選択された1個体のみに穿孔がおこなわれたことも想像される。二次的焼成、つまり煮沸行為の痕跡は、磨滅・剥離による観察不能な個体が多くを占めることもあり、中形甕1個体にのみその可能性が指摘されるにすぎない。土器の胎土には、含有鉱物などの内容から数種類の素地粘土が観察される。これらは粘土採取地の相違を示しており、土器製作地の相違をその中に含むものである。つまり供献土器の一定数は、林・坊城遺跡周辺からの搬入土器が含まれる可能性を示唆する。こうした搬入土器の製作地や出現頻度は、今後の検討に委ねる。ここでは、供献土器に一定数の搬入土器が含まれる事実だけを指摘するにとどめたい。

奥10号墓^(註15) 比高50mほどの丘陵上に構築された径約14mの円形墳丘墓である。埋葬施設として、竪穴石槨と壺棺各1基が検出されている。供献土器は、石槨上面の円礫堆中より、特殊細頸壺2、高坏2、器台1および細頸壺の体部片2の出土が報告されている。このうち特殊細頸壺1、高坏1、細頸壺体部は破碎供献、その他は完形のまま供献されたとされるが、現状では特殊細頸壺1以外は、いずれも完形には復元できない。供献土器の素地粘土は、その鉱物組成から3~4種類に分類され、少なくともその中に複数の粘土採取地を含む。高坏のうち1個体は、明らかに高松平野からの搬入品である。また、

供献土器は、いずれも彩色は認められず、特殊細頸壺と細頸壺体部に穿たれた穿孔は、焼成後のものである。出土土器から、弥生時代後期後半に位置付けられる。

奥11号墓 奥10号墓の尾根上方、比高75mの丘陵上に構築されており、その点で奥10号墓より優位の立地を示す。径16mほどの円形墳丘墓で、2基の竪穴石槨を埋葬施設とする。供献土器は、そのうちの規模の大きく中心主体となる石槨埋土中より、小形短頸壺1個体、高坏2個体、壺の底部片1点が出土している。いずれも破碎供献とされ、顔料塗彩は認められない。胎土に2種類が認められ、複数の粘土採取地の土器をそのうちに含む。また、小形短頸壺の底部に穿たれた穿孔は、焼成後のものである。時期は、奥10号墓と直接に比較するのは困難だが、近接した時期が想定される。

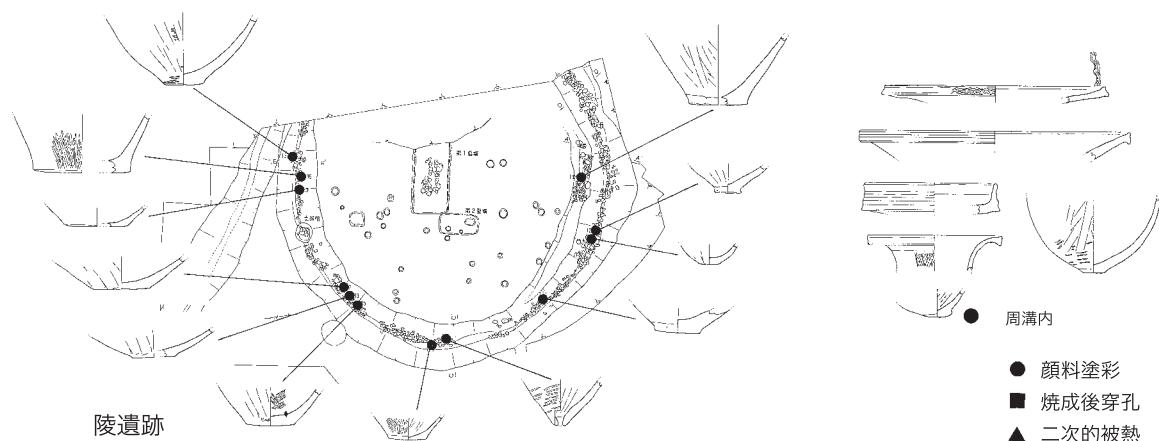
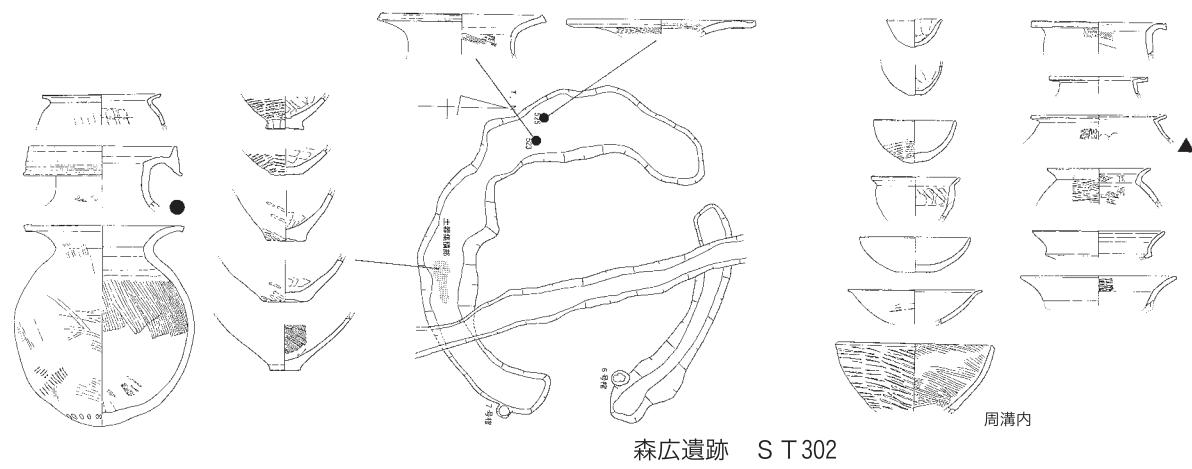
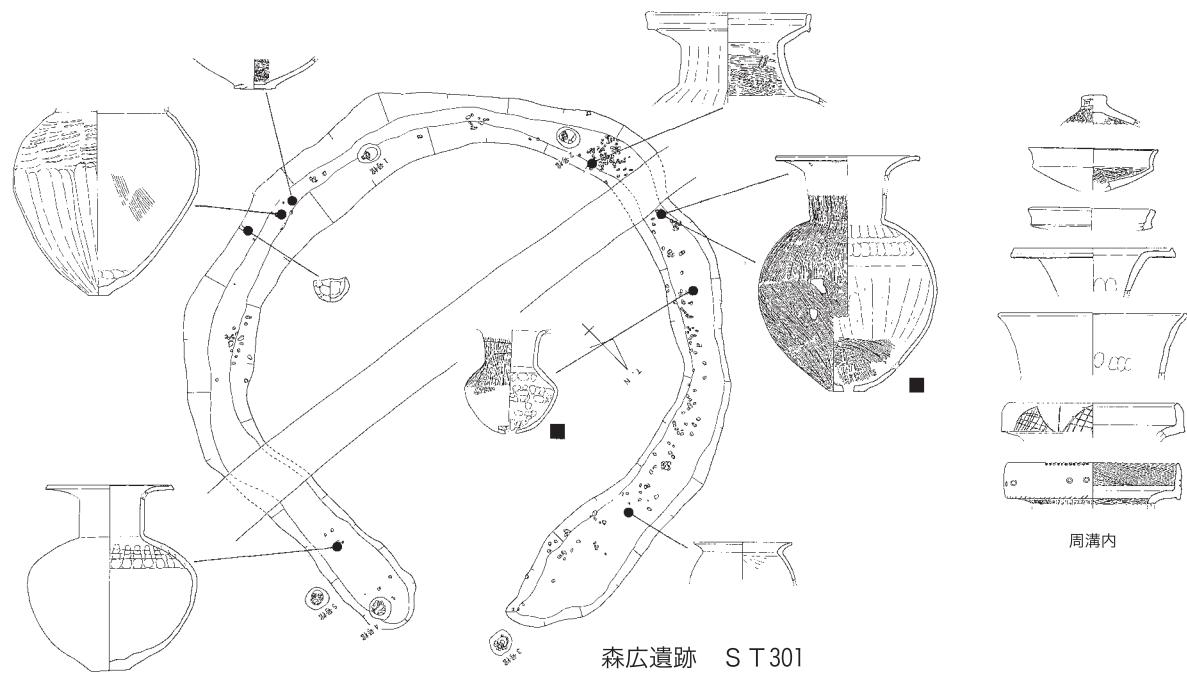
森広遺跡 S T 301^(註16) 同時期の拠点集落に近接して検出された径約18mの円形周溝墓である。墳丘は削平され、中心となる埋葬施設は確認されていない。周溝内に3基と周溝際に2基のそれぞれ土器棺墓が検出されている。

供献土器は、すべて周溝内より出土した。周溝内埋土は3層に細分され、その最下層より小形甕1個体、広口壺2個体、壺1個体、小形鉢1個体、底部片が、上層より小形広口壺1個体、短頸直口壺1個体、二重口縁壺2個体、複合口縁壺2個体、甕1個体、高坏1個体、小形鉢1個体ほかがそれぞれ出土している。最下層より出土した壺2個体と上層より出土した小形壺1個体が完形に近く復元される以外は、いずれも小片である。いずれも顔料塗彩は認められない。また、二次的被熱の痕跡も認められないが、底部片の中に赤変が著しいものが含まれる。穿孔は、小形広口壺の底部と中形広口壺の体・底部4箇所に、径数cm程の不定形の孔がいずれも焼成後穿たれている。高坏は高松平野からの搬入の可能性が高く、また胎土や色調などから複数の素地粘土を使用した土器が供献されている可能性がある。

森広遺跡 S T 302 S T 301に隣接して構築された径約10mの円形周溝墓である。本周溝墓も、墳丘は削平され埋葬施設は確認されていないが、周溝埋没後に埋葬されたとされる2基の土器棺墓が周溝掘り方に接して検出されている。

供献土器は、いずれも周溝内より出土した。周溝埋土は2層に分層され、土器はいずれもその上層より出土し、また周溝中軸より外側に多く偏って出土したことから、調査担当者は周溝の一定埋没後、墳丘外からの投棄の可能性を指摘している。確かに調査担当者の観察は十分な論拠をもっているが、周溝の残存深が0.18~0.43mときわめて浅く、そのなかでの埋土の上層としても、それは十分に周溝機能時の堆積層と考えられ、出土位置も墳丘上からの崩落の可能性をまったく否定する根拠とはなりえない。これら土器群が、供献土器としての性格をなお有している可能性はあると判断される。器種は、広口壺4個体、複合口縁壺1個体、甕4個体、高坏2個体、中形鉢1個体、小形鉢6個体、土玉1点ほかが報告されている。小形鉢と中形広口壺などは完形に近く復元されるが、それ以外は小片が多い。複合口縁壺の口頸部外面に赤色顔料の塗彩痕跡が認められる。底部片2点と甕1個体に二次的被熱痕が認められる。穿孔は確認できなかった。高坏、甕などに高松平野からの搬入品が含まれる可能性があり、また他の土器も胎土や色調から複数の素地粘土を使用した土器群が供献されている可能性がある。

陵遺跡 S T 02^(註17) 同時期の集落に近接して構築された径約11mの円形周溝墓である。墳丘は大きく削平されていたが、墳丘中央で礫群を伴う木棺痕跡を確認している。副葬品は出土していない。調査担当者は、木槧木棺墓の可能性を指摘するが、木槧側板の痕跡とされる溝状の掘り込みが、墓壙長軸にはみられるが短軸には検出されていないこと、内部の棺痕跡がまったく確認されていないこと、これまでに確認されている弥生期の木槧墓とは構造が大きく異なることから、現状では担当者の見解に首肯する



第11図 弥生墳墓出土の供献土器 2

墳丘 S = 1 / 300

土器 S = 1 / 10

ことはできない。また墓壙床面で出土した礫群は、担当者は棺台の可能性を指摘するが、棺台としては礫上面が起伏に富むこと、整った配置がなされていないことなどから、棺上面に置かれた可能性も否定できないと考えられる。

供献土器は、周溝内より出土している。出土位置は、大きく3層に分層した周溝埋土の各層より出土したとされる。土器と混在して墳丘外表に使用されていた可能性のある石材が出土していることも、供献土器群である可能性を否定するものではない。器種は、広口壺3個体、二重口縁壺1個体、小形鉢3個体、底部有孔鉢1個体ほかが報告されている。いずれも小破片であり、完形近くに復元されるものはない。底部片の内面に赤色顔料の付着が認められるものがある。また底部片の中には、器表面の剥離などのため積極的に評価できないが、外面が顯著に赤変しており二次的被熱の可能性が考慮されるものも含まれる。広口壺の口縁部に2箇所、径2mm程度の小円孔の焼成前穿孔が確認された。これは供献行為に伴う穿孔ではなく、蓋などの固定のための土器の用途に付随した孔の可能性が高いと判断される。時期は、弥生後期末頃に位置付けられる。

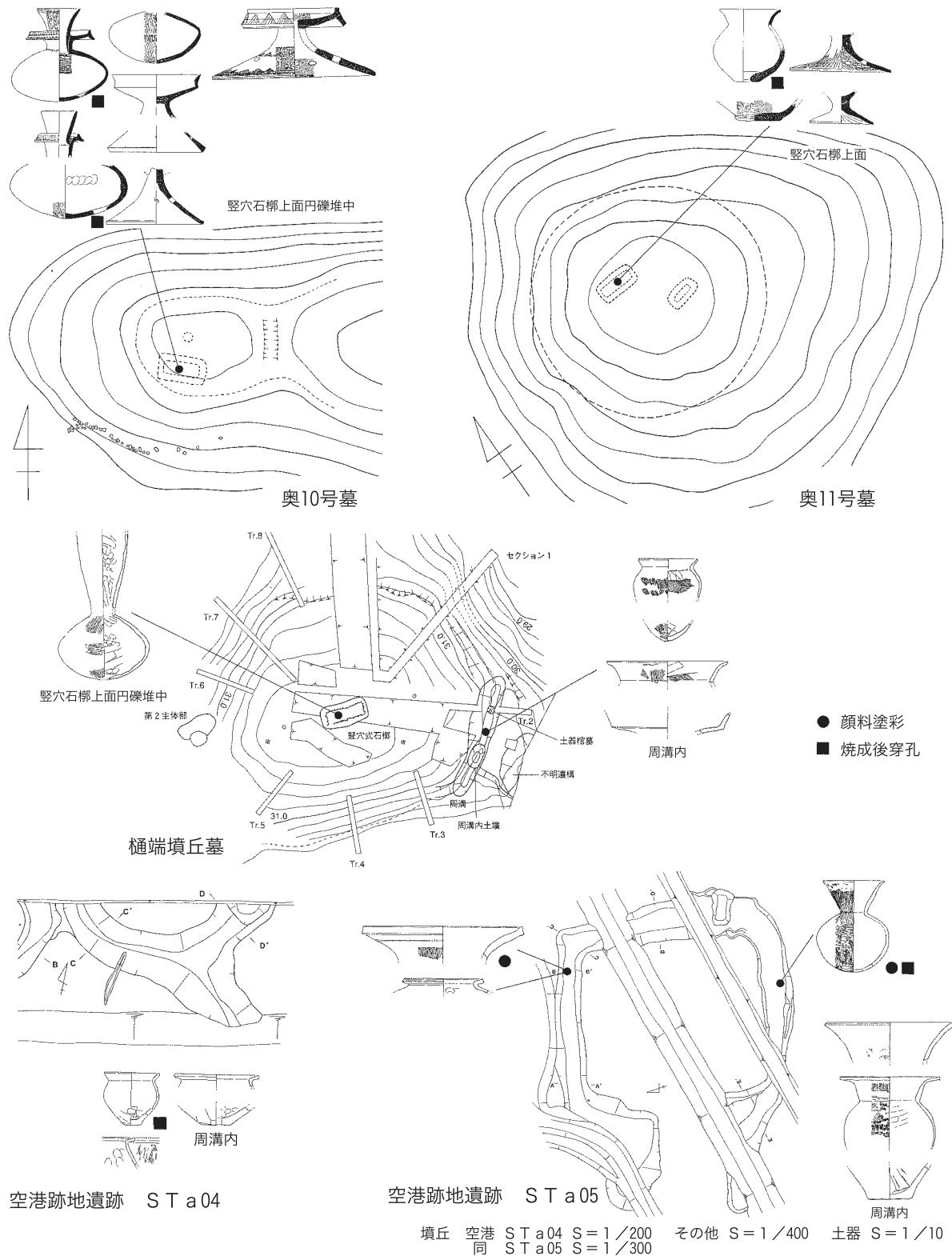
樋端墳丘墓 ^(註18) 比高15mほどの低丘陵上に築造された径約18mの不整円形を呈する墳丘墓である。埋葬施設は、墳頂部の全長約2.5mの豊穴石槨(第1主体)を中心に、墳裾部に土壙墓(第2主体)、周溝内に土器棺墓と土壙墓がそれぞれ構築されていた。副葬品は、第1主体上面の円礫堆中より石杵が、第1主体内より強く折り曲げられた鉈が出土している。

供献土器は、上記した円礫堆内より細頸壺、周溝内より小形甕、中形甕、二重口縁壺がそれぞれ1個体出土している。細頸壺は、小片化して出土したがほぼ完形に復元され、破碎供献された可能性がある。外面には、顔料による塗彩や二次的被熱の痕跡は認められない。底部は穿孔された可能性があるが、断定できなかった。器形や胎土の点から、高松平野からの搬入の可能性がある。周溝内より出土した土器は、いずれも小片化しており、小形甕を除いて全体の形状が判明するものはない。またいずれも塗彩や穿孔、二次的被熱の痕跡は認められなかった。二重口縁壺は、器形や胎土の点で阿波吉野川南岸地域からの搬入の可能性がある。

空港跡地遺跡 ^(註19) 既述した林・坊城遺跡のおおよそ1km南に位置し、弥生前期以降近世に至る複合遺跡である。小稿で検討する墳墓遺構は、同時期の集落に南接して検出された少なくとも2群にわかれ周溝墓状の墳墓群である。いずれも後世の削平により墳丘は残存せず、かろうじて木棺葬を確認したS T a 03を除いて、埋葬施設や副葬品などは不明である。弥生終末期から古墳前期初頭の造墓期間が想定される。

S T a 04は、西群に属する径5mほどの円形墓である。周溝内より、小形甕1個体、中形甕2個体、中形壺とみられる底部片などが出土している。小形甕は、ごく一部を欠損する以外完形で、体下半部に径1.4cmほどの焼成後穿孔がみられる。顔料塗彩や二次的被熱痕は認められない。その他の土器はいずれも小片、顔料塗彩や穿孔、二次的被熱痕も認められなかった。なお中形甕2個体は、器形や胎土より高松平野産の土器である。時期は、弥生時代終末期中葉前後とみられる。

S T a 05は、東群に属する全長約14mの前方後方墳である。供献土器は布留式最古相期に併行する資料であり、古墳として検討すべきではあるが、弥生墓と墓域を共有し墳丘築造の面においても弥生墓の伝統を色濃く残すことから、弥生墓に含め検討する。供献土器は、周溝内より大形広口壺1個体、中形広口壺2個体、小形直口壺1個体、中形甕1個体が出土している。このうち小形直口壺は非在地系、その他は在地系の土器である。小形直口壺を除いて、いずれも小片である。大形広口壺口縁部外面と小形



第12図 弥生墳墓出土供獻土器 3

直口壺口縁部内外面にベンガラによる顔料塗彩が確認された(第20図参照)。また小形直口壺は、底部附近に径1.7cmの小円孔と肩部に長さ1cmほどの線状のそれれ焼成後穿孔が認められる。その他いずれの土器にも、二次的被熱痕は認められない。なお、胎土の面で複数種の素地粘土の使用は認められず、

粘土採取地を共有する集団内で製作された土器が墳墓へ持ち込まれている可能性が想定される。

定連遺跡^(註20) 比高約40mの低丘陵上に位置する径15m前後の円形墳丘墓である。埋葬施設は、4基の土壙墓と土器棺墓などが検出されている。

供献土器は、採土工事中に採集されたものとその後の調査時に出土したものとがある。正式報告書未刊のため、詳細については不詳である。5個体以上の中形複合口縁壺と中形広口壺、1個体以上の大形広口壺が出土している。実見を許された土器については、いずれも顔料塗彩や穿孔、二次的被熱の痕跡は認められなかった。また第3主体部周辺より出土した中形広口壺口縁部内面には、鋸歯文状の線刻が認められた。なお、土器棺の可能性がある大形広口壺と、墳裾の土器棺周辺より出土した中形広口壺は、器形や胎土の点から高松平野からの搬入土器とみられる。

2. 弥生墳墓の供献土器が提起する問題

以上、煩雑ながらも各遺跡の状況について整理をおこなってきた。ここで弥生墓における供献土器の問題について抽出される課題を整理し、後の古墳における供献土器の問題との対比のために備えておきたい。

まず、供献土器の出土位置であるが、周溝墓においては周溝内、墳丘墓においては埋葬施設上面と墳丘裾や周溝内より出土している。埋葬施設上面より出土した土器については、その出土状況が供献行為そのものを物語るが、周溝内や墳丘裾より出土した土器は、供献後に自然的物理的要因によって二次的に移動し、本来の供献位置を示していない可能性が高く、その本来の供献位置を復元することが必要となる。そこでこれら周溝内土器の出土状況を観察すると、埋葬施設上面の出土土器と比して、土器の多くが破碎し接合困難な小破片となっていること、土器と周溝底との間に僅かではあるが土砂の堆積が確認され、すべてではないが周溝の埋没途上に土器が周溝内へ入り込んだ可能性が想定されること、陵遺跡例のように墳丘外表の石材と混在して出土しているものがあることなどの点から、周溝内への直接的な供献の可能性は乏しいと判断される。周溝内への供献が皆無であったとまでは断定できないが、その多くは墳頂平坦部周縁など周溝以外の場所へ供献されたものが、転落し埋没した可能性を想定したい。

次に器種組成であるが、周溝墓では集落内の生活空間出土の土器と異なる、多種多様な器種が複数個体出土していることに大きな特徴がある。各墳墓において器種の選択や構成比などの共通性は低く、この点で各周溝墓の独自性が強調される傾向にある。しかし、器種別に供献土器をみた場合、一般的な集落遺跡での出土頻度と比して中形壺が多く供献される傾向にあることは間違いない。このことは墳丘墓においても同様で、埋葬施設上面への供献土器の半数近くが、こうした中形壺で占められる。こうした中形壺の多用の傾向は、墳墓周辺で行われたであろう葬送儀礼において中形壺が主要な役割を有していたことを反映したものだと考える。

また、周溝内出土の土器を詳細にみると、林坊城遺跡例のように、数群にわかつて出土する傾向にあり、その各群に中形壺が含まれることに注意したい。こうした周溝内での土器群が、供献行為の一定の土器組成を反映していると仮定するならば、中形壺は他の器種とともに供献されるべき器種の一つであった、中形壺のみ特殊な用途が指定されていたわけではなかったことを示している。

さらに、埋葬施設上面への供献土器には、細頸壺と高壺といった供膳具が含まれる頻度が高いことが判明した。この2器種は、林坊城や森広遺跡の周溝内の供献土器にも認められ、いずれも高松平野産かそれに類した土器であることが共通する。さらに、奥11号墓を除いて、奥10号墓と樋端墳丘墓ではいず

れも円礫堆儀礼を伴っている(蔵本2004)。つまり、円礫堆儀礼とセットとして墓壙上面への細頸壺を中心とした供膳具の供献が、一定の規範として確立した可能性を想定したい。これはもちろん本地域の儀礼の中にその萌芽を認めるものではなく、おそらく楯築墓や黒宮大塚墓にみられる器種と共に通することから、吉備地域を発信源とする中部瀬戸内で醸成された儀礼内容と評価したい。

土器への顔料塗彩については、僅かに3基の墳墓の供献土器において確認された。いずれも周溝墓の周溝内出土土器であり、埋葬施設上面への供献土器に顔料塗彩が行われていないことは確実である。各墳墓の細片を含めたすべての土器について観察を許されたわけではないため、顔料塗彩が限られた墳墓においてのみなされた儀礼であるのかどうかはなお課題として残る。また顔料塗彩土器が全供献土器中に占める比率は、不確定要素は残されるがせいぜい1ないし2個体にとどまり、何らかの基準により特定の土器が選択されている点、塗彩された器種も器台・壺などと一定しない点には注意しておきたい。なお林坊城例が水銀朱であることが分析の結果判明したが、他の2例の顔料は不明である。

二次的被熱痕を伴う土器は、可能性のあるものを含めると周溝墓系の墳墓においては、空港跡地遺跡S T a 04を除いたほぼすべての墳墓において出土している。しかしその比率は顔料塗彩土器と同様1ないし2個体程度にとどまり、甕や一部の壺に伴う煮沸具としての機能は、供献行為の中には積極的に期待されていないよううつる。

大庭重信氏は、弥生時代中期の河内の周溝墓出土供献土器について詳細な検討をおこない(大庭1992)日常生活域出土の土器と比べて供献土器の方が、煮沸痕跡を伴う個体の出現頻度が高いことを具体的に数値をあげて示し、また壺形態についても広口壺Dといった煮沸行為にしばしば使用される器種が選択的に供献されている可能性を示唆した。そして葬送儀礼において煮沸行為を伴う儀礼の存在を推測し、煮沸された飲食物を参列者が共食することが葬送儀礼の中で重視されていたことを想定している。

大庭氏の分析は河内平野の弥生中期周溝墓の事例から帰納的に実証されたものであり、それをそのまま本地域の墳墓出土土器に持ち込むことには躊躇される。しかし、痕跡的ではあるが、本地域の墳墓出土土器の中にも二次的被熱痕を伴う土器が混在している事実は、儀礼としての煮沸行為が行われていなかったことを実証する根拠とはなりえない。むしろ供献土器に煮沸具である甕が一定数含まれていることからも、二次的被熱痕を伴う土器を積極的に評価することが重要であろう。本地域における上述した状況は、こうした煮沸行為が形骸化したものとなりつつあったことを反映しているものとみなしたい。つまり、1ないし2個体の土器で煮沸行為をおこない、それをもってその他の甕や壺について煮沸をおこなったとみなす、いわば象徴化された状態を想定する。そして、こうした儀礼行為自体の簡略化傾向にあっても、なお土器とくに煮沸具を必要個体数揃えるという意識はまだ残存していたことに注目しておきたい。

穿孔された土器は、森広遺跡S T 302など4基の墳墓を除いた5基の墳墓の供献土器に認められた。穿孔土器が出土していない墳墓についても、未公表資料などに穿孔部位が残されている可能性などもあり、本来的に穿孔土器を伴わなかったと断定できる状況にはない。さて、穿孔土器は、1墳墓最大でも4個体と限られた数の土器にしか施されていない。器種は各墳墓によりさまざまではあるが、穿孔土器10個体のうち8個体までが壺であること、また穿孔位置も概ね底部に偏り、いずれも焼成後の穿孔であること、穿孔された孔の大きさは2~3cm程度のものが多数を占めることは、穿孔にあたって一定の規範の存在を想定させる。こうした穿孔行為がすべて土器の実用を否定するための行為であるなら、その位置や形状から土器に入れられ供されていたものとは液体であったと想像される。

さて、こうした供献土器の穿孔行為について田代克己氏は、魏志倭人伝や記紀の記載などを参考に、「葬送儀礼の場で使用された器物は、すべてけがれをはらう必要」があり、こうした穿孔行為は「けがれ」をはらうために行われた所作であるという（田代1986）。墳墓における「けがれ」を、どのような考古学的証拠をもって実証するかは重要ではあるが困難な作業である。また実用を否定するためだけの行為であるなら、わざわざ手間のかかる穿孔をしなくても、破碎すれば充分であろう。実用を否定しつつも、あえて完形に近い状態の土器を供献すること、これが求められたに違いない。

また供膳具の中に穿孔行為が乏しいことは、供膳具と煮沸具との供献形態に差があったことを意味している。深沢芳樹氏が想定した（深沢1996）ように、穿孔行為が葬送儀礼の最終局面におこなわれたのであれば、こうした仮器化の行為は、それが結果として「けがれ」をはらうことになったとしても、おそらく飲食儀礼の中で最も重要でかつ儀礼の初期になされた煮沸行為、東四国地域ではすでに簡略化されてはいるが、こうした煮沸行為を参列者自らが否定することで、儀礼そのものが終了したという意識を強く認識させる目的が根底にあったのではないか。そして具体的な煮沸行為の象徴化と同調して、穿孔行為も限定された個体へと収斂していったものと理解したい^(註21)。

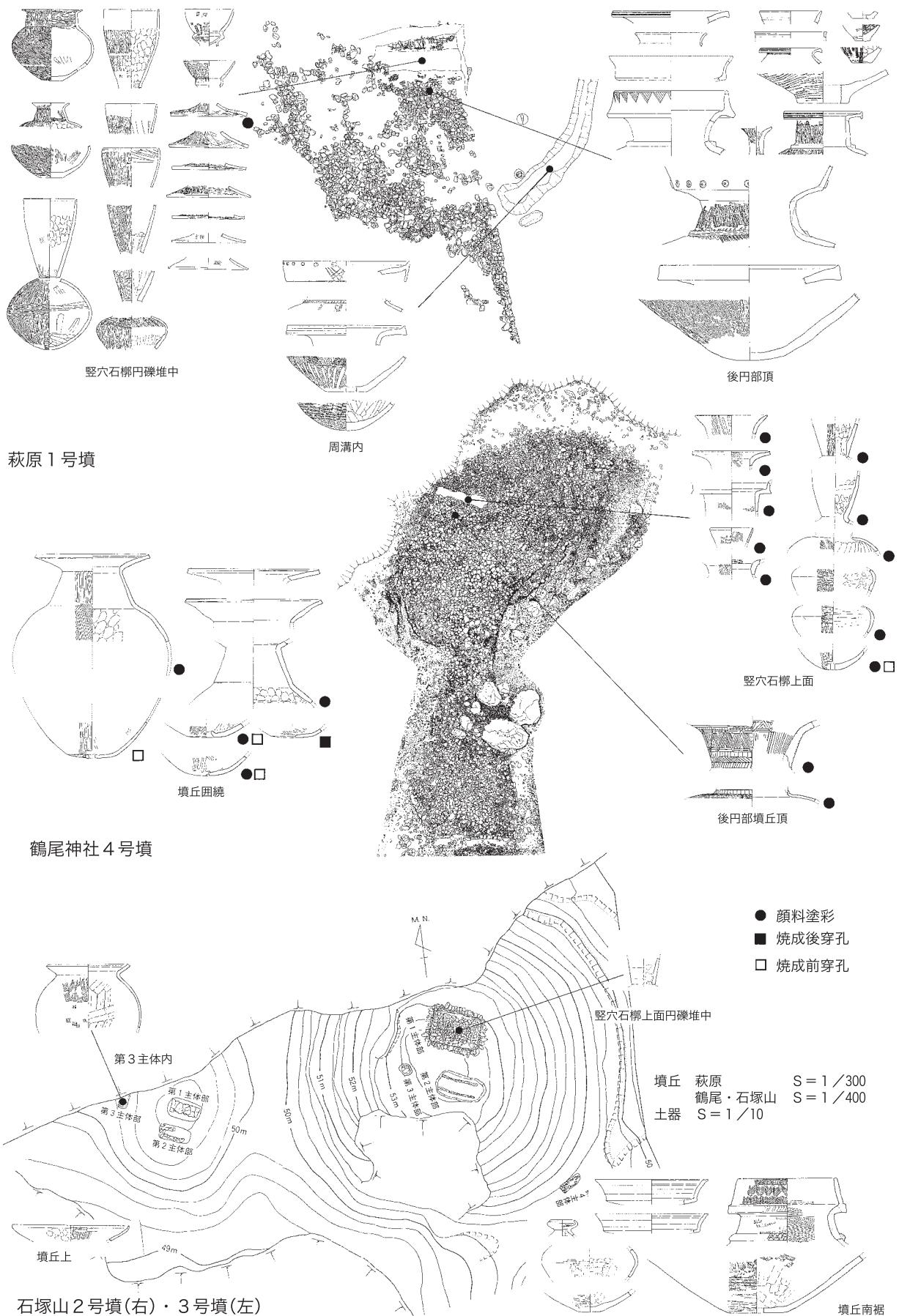
各墳墓より出土した供献土器は、その胎土や色調などから、いずれの墳墓においても複数の素地粘土を用いた土器が供献されていることが判明した。このことはおそらく、その製作地が複数地域に跨ることを意味している。しかしながら、深沢氏がおこなった土器の属性からその製作地を求める詳細な土器の地域色の研究については、本地域は立遅れているのが現状であり、個別に土器の製作地を求めるることは困難である。こうした中、奥10号墓や樋端墳丘墓などにおいて高松平野産と阿波及び吉備系統の土器が認識され、中・遠距離の土器及びその製作技術の情報の移動が確認された意義は大きい。葬送儀礼を契機として機能したネットワーク（深沢1996）が、本地域においても機能していたことを示している。

以上のように、供膳具の墓壙上面への破碎供献を中心とした供献儀礼が、遅くとも弥生時代後期中葉の本地域の弥生墓において行われていたことが判明した^(註22)。その最初期には、吉備地域からの影響によりこうした儀礼を成立させた可能性が想定されるが、吉備地域で特徴的な特化した壺と器台の儀礼は遂に受容されず、独自の墳墓儀礼を確立していく。各墳墓により若干の相違は認められるものの、概ね既述してきた土器供献儀礼の内容が東四国地域の弥生首長墓間で認められることから、本地域首長層間で共有された伝統と評価したい。現状ではそのように評価できる後期中葉における本地域での供献儀礼の確立期を大きな画期として評価し、これを第1の画期と呼称する。

3. 前期古墳における土器供献儀礼

次に前期古墳における土器供献儀礼について考察を進めたい。前期古墳についても近年の大規模開発や史跡整備など様々な目的により資料の蓄積がなされてきた。しかしながら実態不明な古墳もかなりの数にのぼり、いくつかの問題については将来的な検討に委ねなければならない。また、資料数も多く、個々の古墳を詳細に検討することは紙幅の関係もあり割愛し、後述する重要な画期となるいくつかの古墳について紹介し、後の検討の材料としたい。

萩原1号墳^(註23) 比高約18mの南向きの小舌状丘陵端部に構築された、全長26m前後の積石塚前方後円墳である。埋葬施設は、後円部中央に設けられた石積み墓壙壁を伴う竪穴石槨とくびれ部両側に壺棺2基がある。副葬品は、竪穴石槨より舶載画文帯同向式神獣鏡、管玉、鉈が出土している。その他墳丘上から、鉄剣、鉄鎌、刀子、鉄斧片が出土しているが、周辺埋葬に伴う可能性もある。築造時期は弥生



第13図 前期古墳出土の供献土器 1

終末期に遡るが、前1期に含め考察する。

供献土器は、豎穴石槨上面、豎穴石槨外周、周溝の大きく3箇所より出土している。しかし個別の遺物の詳細な出土位置は公表されておらず、とくに豎穴石槨外周出土としたものの位置付けに曖昧な部分を残す。ここでは、豎穴石槨外周と周溝内出土の土器を区別せず、墳丘上とくに後円部上への供献土器として一括して記述をすすめる。将来、詳細な出土位置が公表された時点で、改めなければならない評価については躊躇せず改めることとしたい。

石槨上面への供献土器は、石槨上面に集積された白色石英円礫堆中より出土したものである。4cm角ほどに小片化しているものが多く、おそらく供献行為に伴って破碎されたと考えられる。器種は、少なくとも小形広口壺2個体、細頸壺3個体、小形台付直口壺7個体、高坏1個体、小形鉢1個体などが認められ、とくに細頸壺と小形台付直口壺の同種多量供献がなされている点に注意したい。このうち細頸壺2個体(fig31-3・4)と小形台付直口壺1個体(同10・12)は、高松平野産土器の搬入品である^(註24)。またその他の小形直口壺は、胎土の点で吉野川南岸からの搬入の可能性が想定される。実見を許された中で、讃岐産小形台付直口壺脚部外面に赤色顔料による塗彩を確認した。また、穿孔と二次的被熱痕はすべての土器において認められなかった。なお讃岐産土器の供献は、土器の破碎供献を伴う円礫堆儀礼が讃岐経由で阿波に導入された可能性を想像させる。

墳丘出土の供献土器は、中形広口壺、中形二重口縁壺、中形複合口縁壺、大形広口壺、大形二重口縁壺、中形甕、高坏などがあり、中形壺を主体とした供献行為が推定される。石槨周辺の攪乱などを考慮すれば、高坏など小形器種は本来石槨周辺への供献土器であった可能性が高い。いずれも細片化しており全体形状は不明で、また墳丘積石の攪乱や削平などのため、供献状態の復元は困難である。大形広口壺(fig23-15)を除いて、器形や胎土の点からいずれも吉野川南岸からの搬入を含めた在地産の可能性が想定される。唯一大形広口壺は、形態及び胎土の面で高松平野からの搬入土器と考えられる。なおいずれも顔料による塗彩や穿孔、二次的被熱の痕跡は認められなかった。

石塚山2号墳^(註25) 比高15mほどの低独立丘陵端部に築造された径約25mの円墳である。埋葬施設は、墳丘頂部に石積み墓壙壁を伴う豎穴石槨(第1主体)と箱式石棺(第2主体)、土器棺(第3主体)があり、墳裾部に配石土壙墓(第4主体)が構築されている。副葬品は乏しく、第1主体より鉄剣が出土したのみである。

供献土器は、第1主体上面の円礫堆と墳裾部から出土している。円礫堆より出土した土器は、細頸壺1個体のみである。細頸壺は、4cm角ほどの小片で、ほかに同一個体とみられる体部小片も出土していることから、破碎供献された可能性が想定される。器形及び胎土の点から、高松平野産の搬入品とみられる。また顔料による塗彩や穿孔、二次的被熱の痕跡は認められない。円礫堆は、墳丘の比較的浅い位置で検出され、さらに攪乱を蒙った形跡も認められることから、土器類の二次的移動の可能性を考慮する必要がある。

墳裾からは、細頸壺1個体、小形台付直口壺1個体、高坏2個体、大形複合口縁壺1個体、中・大形壺底部片各1点などが出土している。このうち、複合口縁壺と中形壺の底部片を除く土器は、すべて高松平野からの搬入土器である。いずれも顔料の塗彩や穿孔、二次的被熱の痕跡は認められない。大形壺2個体は、土器棺の可能性も想定される。ただしいずれも胎土や焼成の点で、第3主体の土器棺とは別個体である。また墳裾より出土した中・小形土器群については、本来円礫堆へ破碎供献されたものである可能性を想定したい。

石塚山3号墳 上記2号墳に西接して築造された径約12mの円墳である^(註26)。埋葬施設は、全長1.7m前後的小豊穴石槨2基(第1・第2主体)と土壙墓(第3主体)がある。副葬品は、第1主体より鉄器片が出土しているのみである。前1期の築造を想定する。

供献土器は、第3主体より中形甕1個体が、墳丘上より小形鉢1個体がそれぞれ出土している。中形甕は、第3主体埋土下層より2cm角ほどに小片化して出土した。調査によって明確な棺痕跡は認められないが、主体部の掘り方形状から箱形木棺を直葬した可能性があり、棺蓋上への完形土器の破碎供献を想定したい。墳丘上から出土した小形鉢とみられる口縁部小片は、詳細は不明ながらいずれかの埋葬施設への供献の可能性が高い。胎土の点で、中形甕と酷似し在地産であろう。またいずれも顔料による塗彩や穿孔、二次的被熱の痕跡は認められない。

鶴尾神社4号墳^(註27) 高松平野北端部、瀬戸内海に面した標高232.6mの独立山塊石清尾山から、南東方向に派生した支尾根上に立地する全長約40mの積石塚前方後円墳である。埋葬施設は、後円部頂に構築された長さ約4.7mの豊穴石槨で、副葬品として舶載獸帶方格規矩四神鏡1面が出土している。副葬品及び後述する供献土器の内容から、前1期の築造が推定される。

1982年の調査により、コンテナ10箱程度もの大量の土器が、墳丘各所から出土している。調査が、墳丘積石の大幅な移動を伴わない清掃程度にとどまったため、実際にはこの数倍の土器が供献されていた可能性も考えられる。また、出土した土器は5cm角ほどの小片が多数を占め、接合が困難であり、器形の全体が判明した資料はない。報告書には、92点の土器が図示されているが、近年の川部浩司氏の再整理作業においても、内数点の土器が新たに接合するなど、課題を残している(川部2001)。

報告書に掲載された供献土器は、小形広口壺2種(報告書第17図2・5)、中形広口壺2種(17-13・14~17)、細頸壺1種(17-6・7)、小形二重口縁壺1種(17-3)、精製小形直口壺1種(17-5)^(註28)、小形直口壺1種(17-4)である。うち、中形広口壺1種は、線刻とベンガラとみられる赤色顔料による加飾壺である。これ以外にも、未報告資料の中に、前方部出土の資料として中形広口壺2種、出土位置が不詳な資料として複合口縁壺1種、豊穴石槨周辺出土の資料として小形短頸壺と考えられるもの1種、直口壺もしくは細頸壺と考えられるもの1種、ミニチュア土器と考えられるもの1種などが確認された。このように、資料の総体が公表されているわけではなく、公表資料のみで論じるには限界があり、再整理の必要性が痛感される。これについては、機会を改めて検討することとしたい。

豊穴石槨内出土とされる遺物は、少なくともコンテナ1箱分が出土している。報告者も述べているように、石槨内出土と墳丘出土の遺物の接合例が少なからず認められたことから、これら石槨内出土のものは、本来後円部墳頂ないし石槨上面に供献されていたものと考えられる。しかし過去の盗掘による石槨上面の破壊・攪乱により、本来の供献位置を正確に復元することはもはや不可能に近い。

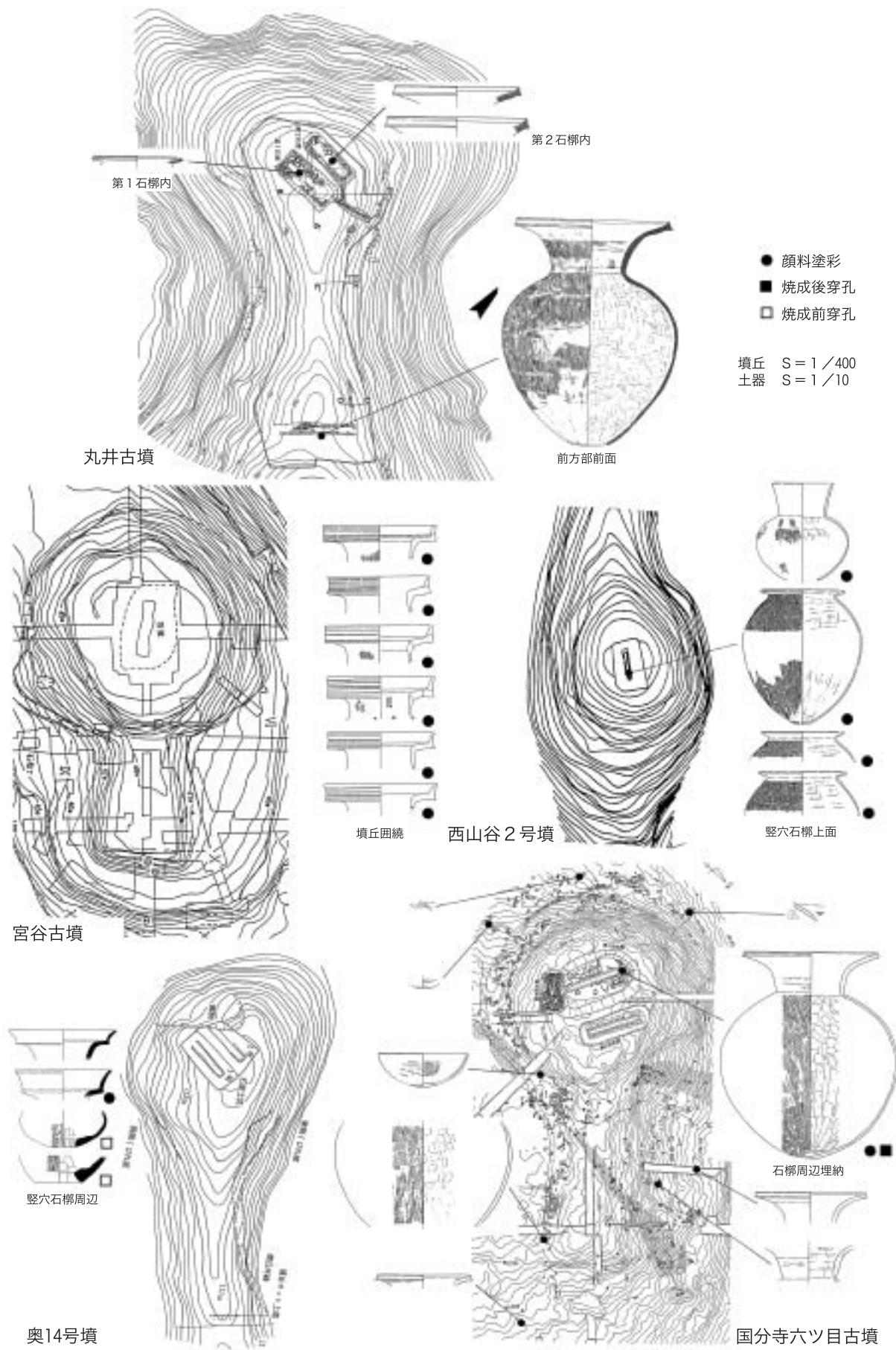
さて豊穴石槨周辺出土の遺物は、加飾中形広口壺と小形広口壺、細頸壺、二重口縁壺、精製小形直口壺、小形直口壺、ミニチュア土器がある。いずれも加飾中形広口壺を除いて微細な破片資料が大半を占め、全形をうかがえる資料はない。また加飾中形広口壺を除く各器種は、いずれも石槨内もしくは石槨近辺からの出土が大半を占めるようであり、後円部墳頂のみならず墳丘各所に広く破片が散在する可能性は低いとみられる。細片化のため正確な個体数は不詳だが、細部の調整手法や胎土の特徴などから、細頸壺の4~5個体を最高に、いずれも数個体程度にとどまる可能性が高い。以上のような理由から、加飾中形広口壺とは出土状況の異なるこれら一群の土器を石槨上面への供献土器群と推測したい。また加飾中形広口壺は、豊穴石槨周辺もしくは後円部墳頂への供献の可能性を想定する。

上述した資料以外は、すべて墳丘各所より出土した、広口壺と複合口縁壺である。広口壺は、頸部が内傾する報告書記載のタイプと、頸部が直立ないし外傾する未報告のタイプの2タイプがある。前者が多数を占めると思われるが、正確な比率は不明。いずれもおそらく工人差によるとみられる細部形態のヴァリエーションを含みながら、ほぼ同規格の壺の集合である点が大きな特徴である。いずれも細片化しており現状では説得性をもった個体数のカウントは困難である。土器総体の重量及び口縁部比から、少なくとも20個体は供献されていた可能性があり、本来はその数倍にのぼる大量の土器が供献されていたと推定される。正確な供献位置の復元は困難ながら、墳頂部にも一定量の土器の散布がみられることから、墳頂部に一定間隔を保って囲繞供献されていた可能性を想定したい。なお複合口縁壺は、本地域のみならず、阿波・吉備・播磨などで土器棺として使用されており、本例も1個体のみの出土であることから土器棺としての用途も考えられる。

顔料を塗彩した土器は、石槨周辺出土土器のほぼすべてと、墳丘出土の中形広口壺の一定量に認められた。いずれも肉眼観察による限りベンガラと推定される。石槨上面出土の細頸壺の一部には、体部内面に顔料付着を確認し、容器としての使用の可能性も想定され、今後の接合・復元と類例の検討を必要とする。墳丘出土の広口壺に塗彩の有無による2者が認められたことは、両者の供献位置、例えば後円部には塗彩土器が、前方部には塗彩されない土器がそれぞれ供献された可能性も想定されるが、詳細な出土位置が公表されていないため判断は保留しておきたい。また後述するように、土器の系譜や胎土の面で、非在地産のものが含まれる可能性が想定でき、こうした搬入品にも塗彩されている点は、こうした顔料塗彩行為が土器製作地ではなく、供献行為の直前になされたことを示していよう。これと関連して、後述する穿孔土器が在地産土器に限られる点も、在地産土器のみが供献専用の土器として製作されたことを示している。穿孔行為は、石槨周辺出土の細頸壺と墳丘出土の中形広口壺に認められ、いずれも底部中央に径1cm前後の小円孔が穿たれる。また広口壺底部とみられる1点(17-20)のみ焼成後穿孔が確認された以外は、すべて焼成前穿孔である。出土した供献土器は、石槨周辺の細頸壺と加飾中形広口壺及び墳丘出土の中形広口壺・複合口縁壺などが、器形及び胎土の面から在地での製作の可能性が考えられる。それ以外の土器は、在地の土器組成の中ではなく、胎土の面からも高松平野周縁部以遠からの搬入品である可能性が想定される。

丸井古墳^(註29) 比高約100mの丘陵上に立地する、全長約30mの前方後円墳である。埋葬施設は、後円部中央に構築された2基の竪穴石槨(第1・第2主体)である。副葬品は、第1主体より鉄鎌、鉄斧、管玉、ガラス小玉が、第2主体より舶載画文帯環状乳神獸鏡がそれぞれ出土している。前1期の築造と推定される。

供献土器は、中形甕と中形広口壺がある。後述する前方部出土の広口壺を除いて、すべて小片化して出土しており、本来の供献位置から遊離したものである。中形甕は、両主体部の攢乱土中を中心に一部前方部からも体部片が出土している。おそらくは埋葬施設周辺に数個体程度が供献されていた可能性が想定される。広口壺は、前方部端葺石前面よりほぼ1個体が横転して出土している。近接して炭化物粒の集中箇所も検出されており、報告者は火を焚いた儀礼がおこなわれていた可能性を想定している。しかし、こうした儀礼と供献土器が同時性を示しているかどうかは不明である。その他前方部前面出土のものと同一形態の広口壺片が、前方部周辺を中心に、後円部墳丘上や埋葬施設攢乱土中などから出土している。おそらく数個体程度の壺が埋葬施設周辺もしくは後円部頂、前方部頂などにそれぞれ供献されていた可能性が想定される。



第14図 前期古墳出土の供献土器 2

これら供献土器について実見の結果、数点の壺体部片とみられる土器片外面に、赤色顔料による塗彩がみられた。肉眼観察による限り、ベンガラとみられる。その他甕を含め、穿孔や二次的被熱の痕跡は認められなかった。また広口壺の胎土や色調には二種類があり、甕はそのうち一種類の壺と酷似した胎土であることを確認した。

奥14号墳 比高127mの支尾根頂部に築造された全長約30mの前方後円墳である。後円部に2基の豊穴石槨が構築され、第1石槨より舶載画文帯環状乳神獸鏡、鉄劍、硬玉製勾玉などの玉類が、第2石槨より舶載画文帯環状乳神獸鏡と袋状鉄斧がそれぞれ出土している。前1期の築造と推定される。

供献土器は、墳丘上とくに後円部周辺より二重口縁壺が複数個体出土したとされる^(註30)。埋葬施設の周辺に数個体程度が供献されていた可能性を想定したい。公表されている図面には、細部形態の異なる二重口縁壺2個体が図示され、うち1個体には外面に赤色顔料が塗彩されているとされる。底部も2点が図示され、いずれも底面に径4cm前後の焼成前穿孔がみられる。二次的被熱痕については不明である。なお、同一山塊には後続して奥3・13号墳の2基の前方後円墳が築造されているが、両墳からは供献土器は出土していない。

西山谷2号墳^(註31) 吉野川下流域北岸、阿讚山脈より南へ派生した比高約67m（標高74m）の舌状丘陵端頂部に築造された、径約20mの円墳である。埋葬施設は、全長約4.7mの豊穴石槨である。副葬品は、斜縁上方作銘獸帶鏡、鉄劍、鉄槍、鉄鎌、鉄斧、鉈が出土している。前1期の築造と推定される。

供献土器は、豊穴石槨内の被葬者の足側を中心に、小破片に破碎された状況で、棺床に接して小形直口壺1、中形甕3が出土している。接合不能な土器小片が多量に出土しており、報告者も述べるように完形品を棺上へ破碎供献した可能性が推定される。いずれも、胎土中に結晶片岩粒を含み、吉野川下流域南岸産の可能性が高い。また、いずれも内外面に水銀朱の付着が認められ、棺床にも多量の水銀朱の散布が確認されたことから、施朱儀礼に使用した後、破碎埋納された可能性が考えられる。なお、二次的被熱の痕跡や穿孔は認められなかった。

野田院古墳^(註32) 比高約360mの支尾根頂部に築造された、全長44.5mの積石塚前方後円墳である。後円部に設けられた2基の豊穴石槨を埋葬施設とする。副葬品は、徹底的な盜掘のためわずかに鉄劍残欠と玉類が残されていたに過ぎない。前2期の築造と推定される。

供献土器は、後円部の1段目テラス周辺や積石中、前方部列石周辺などから数十個体程度の大量の中形広口壺が、豊穴石槨周辺の積石中より壺形土器に加えて小形甕1個体、中形直口壺1個体、小形直口壺2個体、小形鉢1個体などがそれぞれ出土した。いずれも小片となっており、本来の供献位置から遊離したものである。報告者は、出土状況から中形壺は後円部墳頂平坦面及び1段目テラス面に一定の間隔をたもって囲繞供献され、甕と直口壺、鉢は石槨上面へ破碎供献されていた可能性を推定している。墳丘上へ供献された中形壺は、整・成形手法や胎土、焼成状況が共通する2タイプが認められる点で、鶴尾神社4号墳に共通する。中形壺は、口縁部内面から体部上位外面がベンガラにより塗彩されている（第20図参照）。また明確な二次的被熱痕は認められず、底部は小片のみの出土のため、穿孔の有無は不詳である。いっぽう石槨上面への供献土器には、在地系統のもののほか小形甕、中形直口壺、小形鉢などに畿内布留系のものを含む。いずれも胎土は在地産のものである。顔料塗彩、二次的被熱痕は認められず、口縁部のみの破片が多数を占めるため明確な穿孔は確認できなかった。

宮谷古墳^(註33) 比高約39mの舌状丘陵上に築造された、全長約37.5mの前方後円墳である。後円部中央に設けられた全長約5.95mの豊穴石槨を埋葬施設とする。副葬品は、舶載三角縁神獸鏡、重圈文鏡、鉄

剣、鉄鎌、鉄斧、鉄鑿、鉈、碧玉製管玉、ガラス小玉が出土している。前2期の築造と推定される。

供献土器は、在地系二重口縁壺がくびれ部を中心として少なくとも20個体は出土している。完形品での出土はなくすべて破碎しており、出土状況より本来墳頂平坦面に供献されていたものが転落・埋没したのである。出土した壺は、口径20cm程度の中形壺で、底部は径数cmほどの円孔を焼成前穿孔する。また口縁部の細部形態に若干のヴァリエーションは認められるが、ほぼ同一形式に属し、胎土の面でも酷似することから、同一集団内での製作・供献が想定される。これとは別に、口径30cm程度の大形二重口縁壺の破片が、埋葬施設上の攪乱土及びくびれ部より出土している。やや離れて出土してはいるが、胎土や形状より同一個体の可能性が高く、復元される個体数も1~2個体と限られることから、大形壺は埋葬施設周辺に限って供献された可能性を想定したい。出土した中形壺は、口縁部を中心に一部体部上半外面にかけて、赤色顔料の塗彩痕がかなりの破片で観察される。顔料は、肉眼観察による限りベンガラと推定される。なお、いずれの土器片にも、二次的被熱に伴う煤などの付着は認められなかった。

国分寺六ツ目古墳^(註34) 比高約70mの丘陵端頂部に構築された、全長約21mの前方後円墳である。後円部に豊穴石槨(第1主体) 粘土槨(第2主体) 箱式石棺(第3主体)の3基の埋葬施設が設けられ、そのうち第1主体より鉄剣、鉄刀、鉄斧、鉈、刀子などの副葬品が出土している。前3期の築造と推定される。

供献土器は、墳裾各所より少なくとも中形広口壺3個体、小形鉢1個体ほかが出土している。すべて小片化しているため、器種組成や数量に不詳な部分が少くない。しかしながら、壺類は前方部周辺に、鉢ほかの小形器種は後円部にそれぞれ散漫ながらも集中して出土する傾向にあり、それぞれの供献位置を一定程度反映している可能性がある。こうした出土位置を積極的に評価するなら、鉢など小形器種は後円部埋葬施設周辺(他の古墳で小型供膳具が埋葬施設周辺から出土する例が多いこと、埋葬施設が盗掘により大きく攪乱され、その際に土器類も後円部周辺に転落した可能性を想定する)に、壺類は前方頂部にそれぞれ供献されていたと考えられる。いずれの土器も煮沸痕跡は認められず、意図的に穿孔された土器片は出土している中には認められなかった。また、広口壺の頸部外面や体部外面にかろうじてベンガラにより塗彩された痕跡を確認した(第20図参照)。

また墳丘上への供献土器とは別に、第1主体西側小口部の墓壙底より正置させた中形広口壺1個体が出土している。この壺は、墓壙掘削後に据え置かれ、棺床設置時にその粘土によって口縁部付近まで埋められ、さらに納棺後粘土によって被覆、石槨壁体がその上面より構築されたとされる。口縁部から体部上半外面にかけて、ベンガラとみられる顔料により塗彩され、底部は径8mmほどの小円孔が焼成後穿孔される^(註35)。なお二次的被熱痕は認められない。

前山1号墳^(註36) 比高約150mの尾根稜線頂部に築造された、全長約18mの極小前方後円墳である。埋葬施設は、後円部に構築された全長約3.1mの豊穴石槨で、割抜木棺の両側に立石を設ける特異な構造を呈するとされる。副葬品は盗掘により残されていなかった。前3期の築造と推定される。

供献土器は、墳丘各所より在地系中形二重口縁壺が、埋葬施設内埋土より高坏脚部と小形鉢とみられる小片が出土している。壺類は、墳丘各所より出土しているが、個体数は最大でも数個体程度とみられ、墳丘を囲繞するものではなかった可能性が高い。しかし、宮谷古墳同様、規格化された壺で構成される点は注意したい。壺は、いずれも胎土中に結晶片岩粒を含む在地産とみられるもので、古墳眼下の集落遺跡である石井城ノ内遺跡周辺で製作された可能性が想定される。小形器種は本来の供献位置を遊離して出土しているが、埋葬施設周辺であることは間違いない。出土した土器類はいずれも器表面の剥落が

進行し、顔料の塗彩、穿孔、二次的被熱痕は確認できなかった。

蓮華谷 2 号墳^(註37) 比高約22mの舌状丘陵の尾根端部に築造された、径10mほどの円墳である。長さ約2.8mの木棺を直葬した粘土槨より、仿製四神形鏡、鉄刀、鉄剣、鉄斧、鉈、ヒスイ製勾玉、管玉などの副葬品が出土している。前3～4期の築造と推定される。

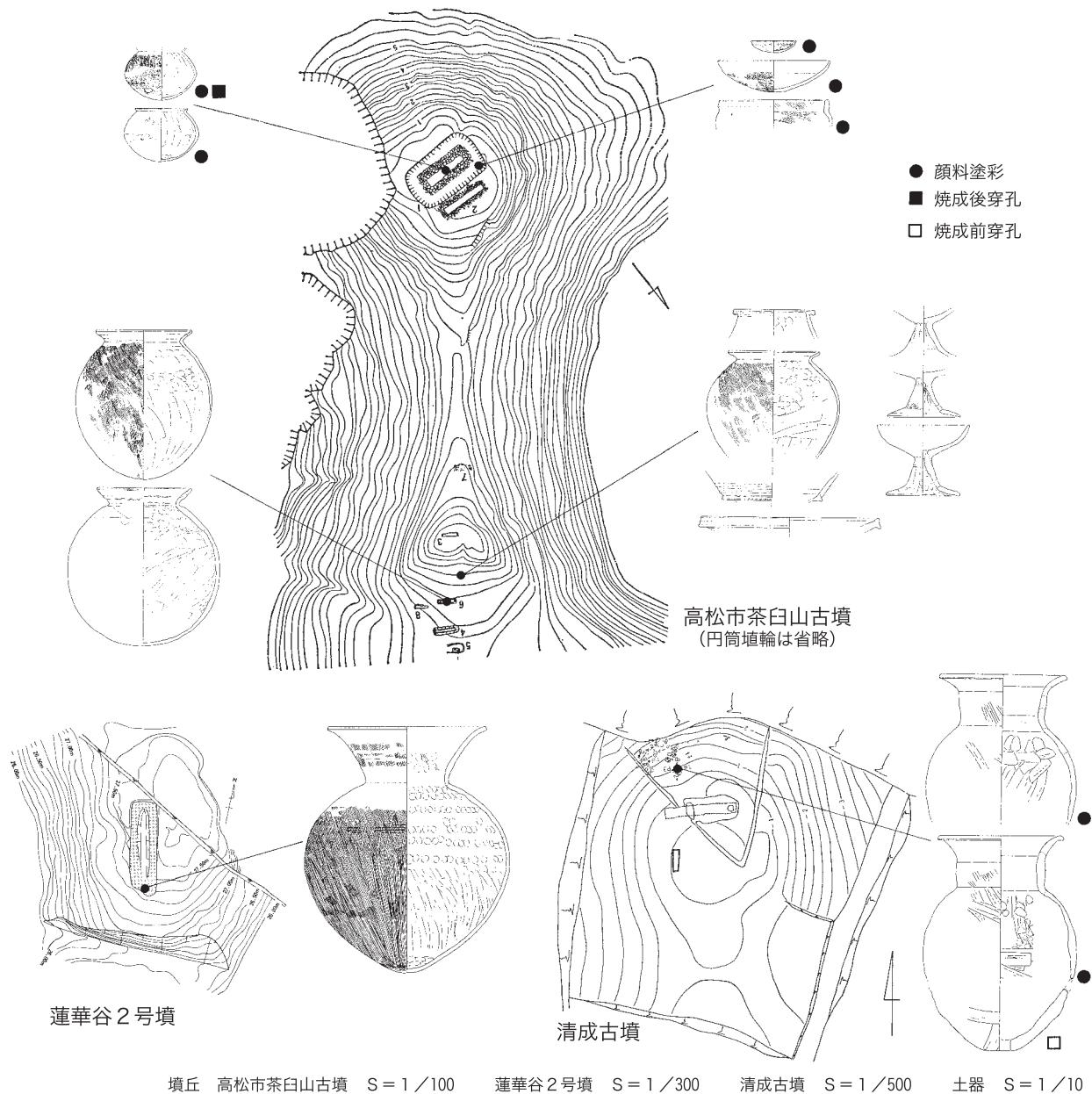
墳丘から供献土器類は出土していない。粘土槨の墓壙床面に敷かれた円礫上より、在地系中形広口壺1点がほぼ完形の状態で出土している。出土状況の詳細について、報告書より伺うことは困難だが、記載から粘土敷設時に据え置かれた可能性が想像できる。土器に顔料の塗彩、穿孔、二次的被熱の痕跡は確認されない。

高松市茶臼山古墳^(註38) 比高41mほどの独立丘陵頂部に構築された、全長約75mの前方後円墳である。報告書未刊のため、詳細は不明。埋葬施設は後円部に竪穴石槨2基（第1・2主体）、前方部上で箱式石棺1基（第3主体）と粘土槨1基（第8主体）のほか、前方部前面に2基の箱式石棺（第5・6主体）と同じく2基の土壙墓（第4・7主体）がそれぞれ確認されている。副葬品は、後円部竪穴石槨より舶載画文帯同向式神獸鏡、鉄剣、大刀、鉄鏃、鉈、鍬形石、玉類が出土している。その他の埋葬施設からの副葬品の出土は報告されていない。前3期の築造と推定される。

供献土器類は、後円部竪穴石槨のうち南側第1主体の棺内より小形短頸壺2、第1石槨北東隅より小形鉢1、中形鉢2が、前方部前面の転落した葺石周辺より中形広口壺1、中形二重口縁壺？1、中形甕1、高杯3が、前方部前面の箱式石棺（第6主体）より中形甕2がそれぞれ出土したとされ、そのほかに出土位置不詳の土器片少量などがある。また墳丘からは、ベンガラにより塗彩（第20図）された円筒埴輪が出土している。円筒埴輪の詳しい出土状況は不明ながら、前方部前面の葺石集積周辺部からの出土が大半を占めるようであり、保管されているその量からも前方部頂に数個体程度が樹立されていたのみの可能性、つまり囲繞供献ではない可能性が想定される。なお埴輪類は二重口縁形態の普通円筒のみであり、形象埴輪は確認されていない。

さて、これら供献土器類のうち、石槨棺内より出土した2個体の小形短頸壺には、外面上半部から内面にかけて肉眼観察により水銀朱とみられる赤色顔料が確認され、うち1個体は底部付近を焼成後穿孔される。また、石槨周辺より出土した鉢類にも同様に、内外面に赤色顔料が微量ながら確認された。小形短頸壺は、水銀朱を入れた容器として施朱儀礼に使用された後、穿孔され棺内へ副葬された可能性が高い。鉢類は顔料の付着が短頸壺に比べて著しく微量であり、同様な儀礼への使用を想定することは困難だろう。短頸壺とは異なる供献位置や小形供膳具という点からも、飲食儀礼への使用が妥当であり、顔料の付着は何らかの二次的要因を想定すべきと考える。なお、棺内へ副葬された小形短頸壺は、非在地系の土器であり、施朱儀礼への使用という点からも、こうした儀礼が使用する土器の器種選択とともに外来的要因によるものである可能性を想定させる。その他墳丘周辺及び第6主体より出土した土器類には、顔料塗彩及び二次的被熱痕は確認されず、穿孔の痕跡も認められなかった。本墳出土土器は、上述した小形短頸壺のほか、前方部前面出土の高坏や二重口縁壺、箱式石棺出土の布留系甕などに非在地系統の土器、とくに畿内系土器が使用される頻度が高い点に特徴がある。いずれも搬入品ではなく、在地での製作である点も共通する。なお、これら土器類は、その胎土や色調などから2種類ほどの素地粘土の使用が想定される。

権八原C地区 2号墳^(註39) 比高20mほどの低丘陵支尾根上に立地する古墳で、尾根を断ち割った周溝が弧状を呈することから、円墳の可能性が想定されるが規模など詳細は不明。埋葬施設は箱式石棺で、



第15図 前期古墳出土の供献土器 3

副葬品は出土していない。前6期の築造と推定される。

供献土器は、周溝内より広口壺と二重口縁壺が計9個体出土している。出土状況から、1m前後の間隔で墳丘上へ立て並べられていた可能性が考えられる。壺はいずれも粗製品で、器壁は厚く内面には粘土紐接合痕が明瞭に残され、体部形状も安定しない。広口壺と二重口縁壺の胎土に顕著な相違はなく、いずれも古墳周辺での製作の可能性が想定される。器表面の剥離の顕著な土器を除いて、口縁部内外面から体上半部外面にかけてベンガラによる赤色塗彩が確認された(第20図参照)。また底部には、いずれも棒状刺突具による径3~4cmほどの粗雑な不整円形を呈する焼成前穿孔がみられる。二次的被熱の痕跡は認められなかった。

清成古墳^(注40) 比高約12mの舌状丘陵端部に築造された、径15mの円墳とされる。全長約5.5mの竪穴石槨と箱式石棺各1基を埋葬施設とし、竪穴石槨より鉄鋤と鉄鎌が、箱式石棺より内行花文鏡と鉄製品

がそれぞれ出土した。前6期の築造と推定される。

供献土器は、墳丘斜面より広口壺2個体が出土した。調査された範囲は墳丘の一部に限られるようであり、壺形土器の供献形態など詳細はわからない。土器は、体部形状が不安定で内面に粘土紐接合痕が明瞭に残り、長径3cmほどの結晶片岩小角礫を多量に含むなど粗製品である。土器の製作技術に、もはや在地系の要素の残存は認められない。器表面は剥落が顕著ながら、頸部から体上半部外面にかけて赤色顔料による塗彩が認められる。顔料は、肉眼観察による限りベンガラと推定される。底部中央には、棒状工具の刺突による径3cmほどの不整円形を呈する粗雑な焼成前穿孔が認められる。二次的被熱による煤などの付着は認められなかった。

津頭東古墳^(註41) 比高約10mの丘陵上に立地する長径35mほどの円墳とされる。正式報告書未刊のため詳細は不明。埋葬施設として、豎穴石槨4基、粘土槨2基が確認されている。副葬品は度重なる削平や盗掘にかかわらず豊富であり、初葬の可能性のある1号石槨より彷彿内行花文鏡や鉄剣、鉄刀などが、最終埋葬の可能性のある6号粘土槨より三角板鋤留短甲や銅鏡などが出土した。当該期本地域の最有力首長墓墳の一つである。前7期の初葬、中2期の最終追葬の可能性を想定したい。

供献土器は、詳しい出土状況については不詳である。コンテナ数箱の円筒埴輪と数個体分の中形広口壺が保管されている。広口壺は、細片化しており全体形状は不明。数個体の口頸部破片には、細部形態に若干の相違が認められる。体部は長胴化が進行し、かろうじて倒卵形を呈するとみられる。内面のケズリ調整は徹底されず、器壁は厚く粗雑化は一層進展する。底部は上述した清成古墳までの平底形態とは大きく異なり、当初より底部が充填されず円筒埴輪同様筒状を呈する。つまり、成・整形工程の終了後、乾燥工程の直前に穿孔されていた従来型の穿孔方法とは異なり、土器成形当初より底部には孔が開けられたものへと変化している。顔料塗彩、二次的被熱痕は認められない。

中間西井坪2号墳^(註42) 標高約38mの丘陵裾緩斜面上に立地する、径12.6mの円墳である。墳丘は削平され、埋葬施設は確認されていない。副葬品の可能性のあるものとして、葺石の間より鉄鎌2点が出土している。副葬品が乏しく時期決定は困難ながら、中2期前後に下る可能性が想定される。

供献土器は、周溝内より壺形土器が複数個体出土している。そのほかに円筒埴輪・形象埴輪・土製棺などが出土しているが、これらは周辺の古墳などからの混入である可能性が指摘されている。ここでは報告書の判断にしたがい、本墳には壺形土器のみが供献されたとして以下論を進める。壺形土器は、報告書には5個体以上が記載され、おそらく墳頂部あるいは墳丘斜面に一定間隔をおいて配列されていた可能性が考えられる。津頭東古墳出土例と比して、体部は肩部に若干の張りは残すものの著しく伸長し、器壁も厚く、口縁端部の造作もシャープさを欠く。底部形状は、津頭東古墳で成立した形態がそのまま継続する。顔料の塗彩及び二次的被熱痕は認められない。

4. 前期古墳における土器供献儀礼の推移

以上、長々と個別資料の検討をおこなってきた。以下では前期古墳出土の土器供献儀礼の検討をおこなうにあたり、まずその出土位置を基準に儀礼行為の分類をおこない、それぞれの供献行為の時期的推移を再度整理することとしたい。

まず供献土器類の出土位置は、大きく墳丘上と埋葬施設上面、埋葬施設周辺への埋納の3つに分けることができる。墳丘上への供献行為は、墳頂部ないしは段築の各テラス面などへ完形の土器類を立て並べたと推定される供献行為で、これには数十個体以上の土器類を墳丘頂部ないしは段築の各テラス面へ

一定間隔でもって配列した古墳と、数個体程度の土器類を墳頂部などに配置した古墳の2種類が存在する。前者を囲繞供献、後者を少数配置供献と呼称する。埋葬施設上面への供献行為は、埋葬行為の終了後埋め戻された墓壙の上面に土器類を多くは破碎供献したものである。無数の円礫を伴う古墳も一定数確認され、本地域においては奥10号墓にその淵源を辿ることができる弥生墓からの伝統的な儀礼である。埋葬施設周辺への埋納とは、上面への供献行為とは異なり、完形の壺形土器を墓壙内や埋葬施設内部などへ副葬に近い状態で埋納した行為で、本地域においては7例が確認される。

前1期 庄内式新相併行期の萩原1号墳では、墳丘上へは2ないし3形式ほどに細分される塗彩されない一定数の中形壺が、また埋葬施設上面へも細頸壺と小形台付直口壺を中心とした供膳具類がそれぞれ供献されていた。墳丘上への複数形式の中形壺の供献は、弥生墓の伝統の中で理解されるものである。一方、埋葬施設の上面へ円礫とともに破碎供献された供膳具類は、器種組成の面において弥生墓の伝統延長上に位置するが、細頸壺と小形台付直口壺を中心に同種多量供献なされている点が大きな特徴である。次いで庄内式新相ないしは布留式最古相期に併行するとみられる鶴尾神社4号墳では、墳丘上へは底部に焼成前穿孔を施し、ベンガラにより赤色塗彩された单一形式の中形広口壺が囲繞供献され、とくに後円部頂部には赤彩と線刻により過度に加飾された中形広口壺が配置されていたと考えられる。また埋葬施設上面へは赤彩された細頸壺を中心とした同種多量の供膳具類などが破碎供献されており、萩原1号墳と共に通する。

このように萩原1号墳から鶴尾神社4号墳の間には、墳丘上への土器類の供献行為において、看過しがたい大きな相違が認められる。こうした塗彩された同一形式の焼成前穿孔壺を供献する行為に一定の飛躍を認め、大きな画期（第2の画期）として評価したい。また、萩原から鶴尾神社のきわめて短期間の間に、こうした供献行為の整備がはかられたことも評価すべきであろう。この画期の意味については、節を違えて詳説することとしたい。積石塚前方後円墳、板石積豎穴石槨、遺体への施朱儀礼、舶載鏡の副葬といったまさに古墳としての体裁を整えつつあった萩原1号墳ではあるが、唯一土器供献儀礼においては、弥生墓の伝統の中に埋没していたといえる。

また、囲繞供献はすべての古墳において認められるわけではなく、例えば墳長30mクラスの中規模前方後円墳である丸井・奥14号墳では少数配置供献であり、円墳の石塚山3号・西山谷2号墳では墳丘上への供献行為は認められない。このように囲繞供献導入時あるいはその直後には、すでに墳形や墳丘規模と共に供献される土器の個体数にも格差が生じており、土器供献行為の中に緩やかな階層的秩序が整備されていたことを確認することができる。

さらに壺単体での囲繞供献も、鶴尾神社4号墳と野田院古墳、宮谷古墳のほかは、香川県石清尾山古墳群中の猫塚古墳をはじめとする諸墳と、同県稻荷山古墳や川東古墳など数基にその可能性が指摘される程度で、その数は限定される。おそらく全長40m以上という墳丘規模に示される限定された階層間にのみ許容され、後述する円筒埴輪の導入以降は、壺単体での囲繞供献に対して、本地域の首長層が強い関心を抱かなくなつたことが囲繞供献衰退の一因と想像される。後述するように円筒埴輪導入の意義は、この点においても大きく評価すべきである。

一方埋葬施設上面への供献土器についても、丸井・石塚山3号・西山谷2号例では、中形甕を主体とするおそらくは完形土器の破碎供献がなされ、伝統的な細頸壺や小形台付直口壺は持ち込まれていない。とくに西山谷2号墳では、施朱儀礼に使用した土器を棺上へ破碎供献していたことが推定された。丸井古墳では土器の残存状態から施朱儀礼への使用の有無を断定することはできず、また石塚山3号墳では

施朱儀礼に使用された痕跡は認められなかった。現状で施朱儀礼が確認されるのは西山谷 2 号墳に限られる。しかし確実に使用が認められない石塚山 3 号墳例を施朱儀礼の象徴化と捉えるなら、施朱儀礼への土器の使用とその破碎供献という、弥生墓での小形供膳具を中心とした飲食儀礼の伝統上では成立し得ない外部起源の儀礼行為が、中形甕という新たな器種の選択と共に導入されたことが推定される。施朱儀礼に使用した石杵などを埋葬施設上面へ供献する行為は、既述した樋端墳丘墓など弥生終末期の墳墓に認められる。しかしそこでの土器の供献は、飲食儀礼に使用されたものに限られていたのである。大庭氏は、こうした土器の供献行為が、「畿内を中心とした首長層の間で古墳時代になって新たに創設・共有された」ものであることを示した（大庭1996）。

こうした埋葬施設上面への土器供献の内容にみられる鶴尾神社例との格差は、墳丘上と埋葬施設上面への土器供献行為が、それぞれ個別に弥生墓の伝統から脱却していったこと、つまり土器供献行為は段階的に整備されていったことを示している。

前 2 ~ 3 期 墳丘上への壺形土器の囲繞供献は宮谷・野田院古墳に、少数配置供献は国分寺六ツ目・前山 1 号墳に、土器供献を欠落する古墳は香川県奥 3 ・ 13 号・同古枝・同御館神社・蓮華谷 2 号墳などにそれぞれ継続し、供献儀礼における階層構造はやや弛緩しつつも固定化されたと考えられる。一方、本期の最も大きな変革は、前 3 期の高松市茶臼山古墳における円筒埴輪の導入である。本地域における最初期の円筒埴輪儀礼の導入であり、土器供献儀礼の画期（第 3 の画期）としてその意義は大きく評価されねばならない。供献土器の中に占める畿内系土器の頻度の多さからも、こうした円筒埴輪の移植が畿内地域の集団の主導のもとになされた可能性は高いと思われる。しかしそれは囲繞供献ではなく、前方部頂への少数配置供献である点にこの期の特徴が如実に表現されている。畿内においては既に円筒埴輪の囲繞供献は完成されており、あえて少数配置を採用した背景は、円筒埴輪の地方波及を論じる上で重要な視点とはなろう。この点については別稿において検討したい。また、円筒埴輪とともに在地系広口壺の少数配置供献が共存することは、外部起源の儀礼を純粋に受容したのではなく、在地の伝統と融合する中で消化されたとみられる点も重要である。

埋葬施設上面への破碎土器供献も、高松市茶臼山古墳第 主体（中形甕）国分寺六ツ目古墳（小形鉢）野田院古墳（小形甕・直口壺）前山 1 号墳（高杯・小形鉢）で確認できる。伝統的な器種の払拭は既に完了し、貯蔵具以外に小形供膳具が確認される。こうした小形供膳具の供献行為は、貯蔵具である甕類で想定された施朱儀礼後の破碎供献とは異なり、弥生墓に認められた飲食儀礼の象徴化された残滓であろう。そして本期をもってこうした墓壙上面への土器供献行為はほぼ終焉し、土器供献行為の主体は墳丘表飾へと収斂されるとみる。

また、この期には埋葬施設周辺への完形土器の埋納儀礼が出現する。こうした埋納儀礼には、在地系譜の中形壺 1 個体のみを埋納する国分寺六ツ目・蓮華谷 2 号・香川県猫塚・同大窪経塚古墳^(註43)などのタイプと、前 4 期以降に下る快天山・吉岡神社古墳にみられる非在地系の完形土器を埋納するタイプ、施朱儀礼に使用した小形壺を棺内へ副葬する高松市茶臼山古墳第 主体部例の都合 3 タイプにわけられる。各古墳により埋納方法には相違がみられるが、被葬者との位置関係が判明した国分寺六ツ目・蓮華谷 2 号・高松市茶臼山・快天山古墳例では、被葬者の足下側へ供献されていることで共通する（大庭1996）。高松市茶臼山例以外供献に伴う儀礼内容（使用目的）が判然とせず、こうした器種や供献位置の差がどのような要因によって生じたのかを明らかにすることは困難であり、良好な資料の増加を待ちたい。また西山谷 2 号墳と高松市茶臼山古墳では、施朱儀礼に使用した土器の器種選択とその取り扱い方に相違

がみられるのも興味深い。なお円墳の蓮華谷2号墳を含むことは、埋納供献が一定の階層間に広く共有されていた可能性を示唆する。

前4～5期 壺形土器単体での囲繞供献は、その確実な例は確認されず、香川県石清尾山古墳群の首長墓墳の中にその可能性が見出されるに過ぎない（例えば姫塚・稻荷山姫塚古墳など）。少数配置供献は前5期の吉岡神社古墳に継続する。土器供献を欠落する古墳は、香川県かしが谷2・3号・同城山4号・同野牛古墳など小規模な円墳を中心に確認される。円筒埴輪は、香川県横立山経塚・同船岡山・同快天山・同御産盤山古墳など、墳長40m以上の大型前方後円墳を中心にその数は一気に拡大し、多くの場合壺形土器の少数配置供献を伴う。この期には、中・小規模前方後円墳の建造数は大きく衰退し、前方後円墳建造の制限に顕現される墓制的な階層構造の再編が行われた可能性が高い（蔵本1999b）。円筒埴輪が大型前方後円墳クラスの首長層にまず導入された背景には、こうした集団が畿内の集団とのより直接的な交渉を担っていた可能性も想定できる。

埋葬施設周辺への埋納儀礼は、快天山・吉岡神社例がある。2例以外に調査例が乏しく、前3期との系譜関係を含め積極的な評価は控え、類例の増加を待ちたい。

前6～7期 壺形土器の囲繞供献は、かろうじて前6期の香川県石船塚古墳にその可能性が指摘できるにとどまり、遅くとも前6期の石船塚古墳をもって積石塚古墳の建造停止と共に終焉した可能性が想定される。少数配置供献は、なお権八原C号・清成古墳といった小規模円墳にのみ継続し、ここに至り前期初頭以来の伝統的な壺形土器の供献儀礼は大きく変質・衰退したことは間違いない。また円筒埴輪は、香川県岩崎山4号・同石船塚・同今岡・同中間西井坪1号・同田尾茶臼山・津頭東・徳島県大代・同奥谷1号・同曾我氏神社1・2号などと、大型首長墓墳以外の中・小型円墳などにも採用され裾野を広げる。前6期以降供献土器の粗製化は著しく進展し、前7期の津頭東古墳例では、顔料塗彩はおそらく省略され、さらに底部穿孔は底部中央に小円孔を穿った鶴尾神社以降の伝統的なものではなく、当初より底部を成形しない筒状の体・底部を呈する形態へと大きく変化する。おそらく墳丘上へ据え置くという供献形態から、円筒埴輪と同様の底部を埋めて据え付けるという形態への変化を示唆するものであり、基本的な器形は在地系の壺を踏襲するが、もはや旧来の壺形土器供献儀礼ではなく円筒埴輪と一体化した儀礼行為へと変質したものと評価できよう。また埋納供献は調査された古墳には認められず、本期においてもはや衰退した可能性も想像される。以上のように、本期において供献土器儀礼の前期的様相とでも把握しうる伝統性は完全に衰退したと評価でき、ここにさらなる画期を求めることができる（第4の画期）。

中1期以降 前期以来の首長墓墳の系譜は多く断絶するなど、おそらく首長墓墳の新たな再編期とみられ、中1・2期の本地域の様相は不明瞭な部分が少なくない。おそらく円筒埴輪は、再編された首長墓墳の中へも持ち込まれてはいるが、多くの場合それは前期の円筒埴輪儀礼ではなく、中・小規模墳での顔料塗彩の省略、集約的な生産・供献と、中期的様相を帯びた異質なものへ変化していると想像している。この問題については、別稿において検討したい。

また一方で、在地系壺形土器を用いた供献儀礼は、かなりの変質を蒙りながらもなお中間西井坪2号墳において確実に存続する。翻って在地土器の様相を顧みれば、遅くとも布留4式古相併行期には弥生後期に淵源を有する伝統的な器種組成は払拭され、布留系土器様式の生活空間への導入が達成されていることは間違いない（蔵本2001）。中間西井坪2号墳での供献儀礼は、そうした土器様式の交替とは関わりなくその伝統的器形は保持されていたことを示しており、儀礼における伝統への根強い固執をいみじ

くも顕現している。

5. 第2の画期の意味

前節において、鶴尾神社4号墳に認められた墳丘上への土器供献行為を取り上げ、それを第2の画期として評価した。ここでは、その具体相について検討をおこない、前期古墳における土器供献儀礼の成立の背景について考察をすすめることとしたい。第2の画期によって成立した土器供献儀礼の特徴は以下の諸点である。

まず第一点目は、墳長40m以上の大型前方後円墳を中心に囲繞供献が複数の古墳において認められる点である。いずれも本来の供献位置を遊離して出土しているため、出土状況からの推測でしかない。しかし、弥生周溝墓の周溝内での群としての一定のまとまりをもった土器出土状況から推測される供献行為とは異なり、後述する器種選択の面からも、墳頂部への配列を伴った囲繞供献であったことは間違いない。また囲繞供献が例外なく後円部を中心になされるのに対して、少数配置供献には前方部のみといった例が複数認められる。このように供献形態の差異がその供献位置つまり儀礼内容にも一定程度反映し、より階層性を明確化している可能性がある。

二点目は、供献された器種が同一形式の中形壺に統一され、讃岐においてはもっぱら広口壺が、阿波においては同様に二重口縁壺が多用される傾向にある点である。これら中形壺は、それぞれ在地の弥生時代からの伝統的な壺形態の中にその祖形が求められ、何らかの基準により、在地の壺の中からとくに選択されたものである。そして、基本的に在地において製作されたものであり、その中に搬入品が含まれないことも追加しておきたい。

三点目は、顔料塗彩がほぼすべての壺形土器になされており、いずれもベンガラと推定されることである。顔料塗彩行為自体は、弥生墓の伝統の中にも存在したが、限定された数個体程度にとどまっており、前期古墳のようにほぼすべての土器が赤く彩色されているわけではない。弥生墓においては多分に呪術的な行為であったものが、前期古墳においては視覚的なものへその比重が傾斜したと考えられる。つまり、積石などの石材のもつ単調で暗いトーンの色彩の中へ鮮やかな赤い土器を配置することにより、強いコントラストによる効果を意図しての行為と想像される。弥生墓において土器への塗彩行為は儀礼の一環として位置付けられ、葬送儀礼のある段階で塗彩行為がなされた可能性も想像される。しかし前期古墳においてはもはやそれが製作段階でなされ、あらかじめ塗彩された土器が墳丘へと持ち込まれたのである。後述する穿孔儀礼についても同様で、被葬者を前に供献する土器に対して何らかの行為を集団で行うこと、その行為に重要な意味があったものが、儀礼とは無関係な場所であらかじめ同様な行為が施された土器を、墳丘へ持ち込むことだけが目的であるかのように儀礼の内容が変質したのである。なお水銀朱ではなくベンガラが用いられたのは、量的に多数の土器を塗彩する必要性と、埋葬施設に専ら使用する顔料との差異を際立たせることに起因するのであろう。

四点目は、底部への穿孔がほぼすべて焼成前になされていることである。底部への穿孔行為も、弥生墓の供献土器の中にその淵源を求めるることは可能であるが、弥生墓の場合必ず焼成後の穿孔であった。このことは、弥生墓の儀礼行為の中でその土器が何らかの用途に使用されたことを意味し、既述のように穿孔行為を参列者自らが行うことによって、儀礼行為の終了を強く認識させることに意味があったと考えた。つまり、弥生墓においては参列者が儀礼行為に直接参加している可能性を考えたのである。しかし、前期古墳においてはすでに儀礼の最終段階で、既に孔の穿たれた土器を墳丘に立て並べるのみ

であり、参列者の儀礼への参加は極度に制限されたものとなった。

また焼成前穿孔の成立とともに、穿孔位置はほぼ底部中央に固定される。その方法も棒状刺突具による外面側からの穿孔で、古墳により若干の誤差を含みつつも、おおむね径数cm程度の底径に比してかなり小さめの孔が穿たれることも共通する。これと関連して底部形状は、生活空間出土の土器を中心として早くに丸底化がなされる中にあって、供献土器に限り平底の伝統が継続することも注意したい。おそらくは穿孔位置を意識したことであろう。こうした伝統的形態へのこだわりは、必然性に乏しい口頸部や倒卵形の体部形状にも認められる。

五点目は、高松市茶臼山古墳前方部前面箱式石棺供献例を唯一の例外として、煮沸行為の痕跡がまったく認められないことである。これは、埋葬施設上への供献土器にも共通する。もはや前期古墳の土器供献儀礼において、煮沸行為は必要とされず、かろうじて供膳具や壺を供献するという行為のみに、その遙か遠い記憶が痕跡的に残存しているにすぎないといえる。ここにも参列者の儀礼からの疎外をみてとることができよう。

六点目は、基本的に中・遠距離からの搬入土器がみられない点である。野田院・高松市茶臼山・吉岡神社古墳などのように、外部系譜の器形を採用したり、複数種の素地粘土を用いた土器が揃えられていたりはするが、基本的には古墳周辺で製作されたと想定される土器であり、弥生墓のように遠隔地から搬入された土器が墳丘へ持ち込まれていないことに注意したい。この点で問題となるのは、集落内での土器消費の在り方、つまりは土器の搬出入が日常生活レベルでどの程度なされていたかがなお不明な点であり、弥生墓と質的な差を指摘することは現状では困難かもしれない。しかし、弥生墓においては、台付小形直口壺に象徴されるように、日常生活空間では出土数が限られる、いわば儀礼専用器とでも表現すべき器種が選択され供献されている事実があり、墳墓での土器供献を目的とした土器の遠隔地間移動を想定するができる。深澤氏が正しく指摘したように、そのような墳墓への搬入土器の供献が、複雑な地域間関係の確認行為としてなされたと想像され、前期古墳においては土器による確認行為をもはや必要としなくなった、後に述べるように様式化された儀礼の共有関係こそが問題とされるようになったと評価したい。

以上のように、第2の画期においてなされた特定の壺形土器供献の内容は、それまでの弥生墓の供献土器の内容とは大きく異なり、弥生墓の伝統を踏まえながらも、外部からの大きなインパクトなくては生じ得ないものであると考える。

結論から述べるならば、こうした壺形土器の供献を成立させたものは、吉備あるいは畿内地域の特殊壺形埴輪であろうと想像する。特殊壺形埴輪成立のインパクトが、本地域の供献儀礼に影響を与え、特化した壺形土器の供献を促したのではなかろうか^(註44)。ではなぜ特殊壺形埴輪自体が導入されなかったのであろうか。おそらく特殊壺型埴輪は、特殊器台形埴輪とセットをなして墳丘へ供献されるべきものであり、そのセット関係を崩して壺のみを墳丘へ持ち込むことはなかった。つまり器台の上に載せられて供献される壺であり、直接墳丘の上へ据え置かれる壺ではなかった。一方本地域においては、弥生時代後期中葉に日常生活空間からも器台は姿を消し、器台を用いる習慣は持ち続けていない。奥10号墓と林坊城S X 03墓に器台が供献されるのを唯一として、墳墓の中にも壺は持ち込まれるが、器台は持ち込まれてはいない。そしてその壺は、墳丘上へ直接供献されたのである。こうした伝統が、前期古墳成立時にも墳丘への器台の持ち込みを拒否し、器台を欠落させたままで特化させた壺単体での供献行為の成立に寄与した、つまり在地系譜の壺を用いた供献儀礼を成立させた背景だと理解したい。弥生後期後半

段階での本地域の土器様式に大きな要因を求めるが、それを促した契機についてはなお検討を要する。いずれにせよ本地域の弥生墓において、殊更に多様な器台を頻用する吉備の弥生墓とは異質な儀礼が展開されていたことを重視し、それが後の供献儀礼にも影響を及ぼした可能性を想定する。

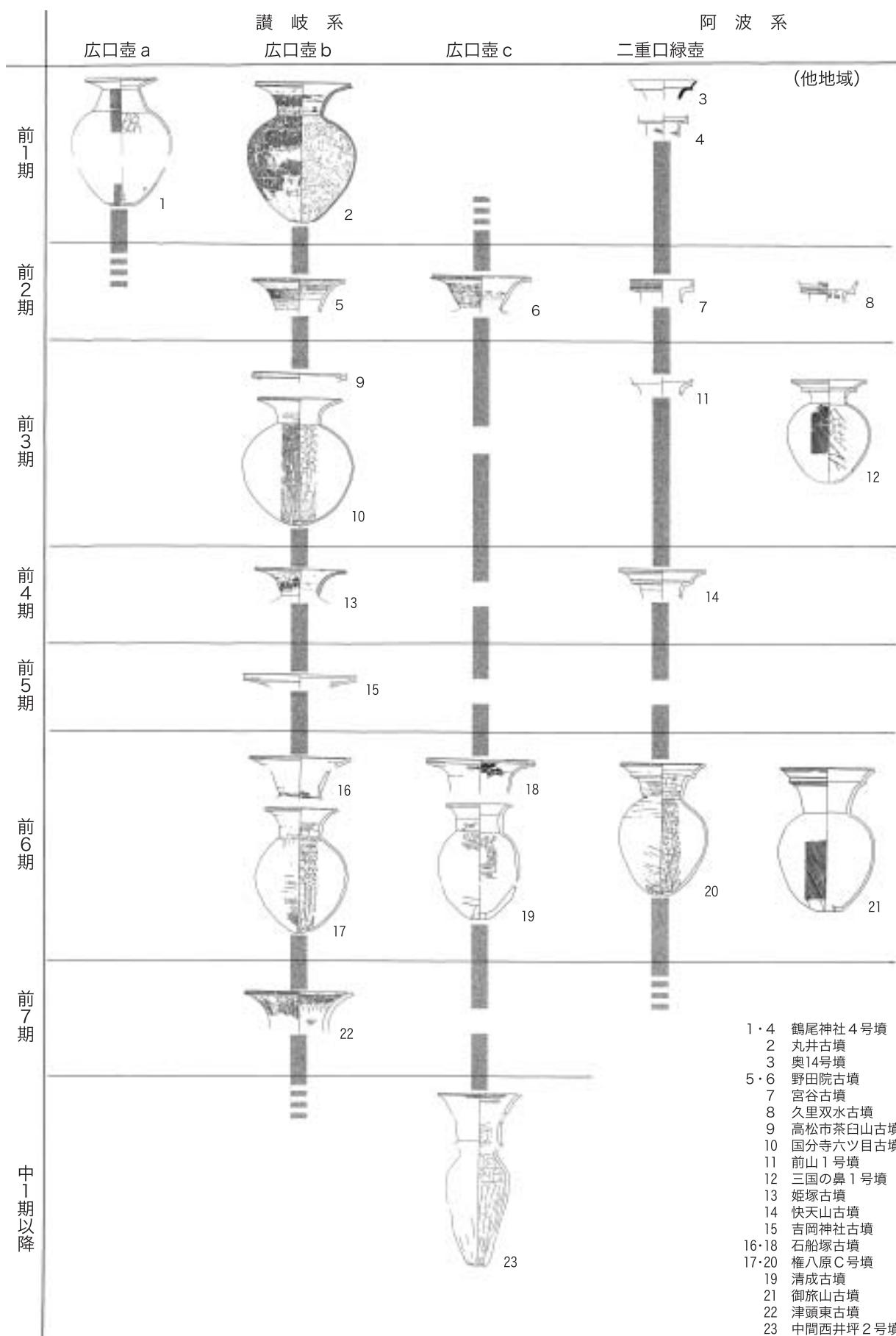
また供献土器も、墓への供献専用の特殊な器を成立させるのではなく、日常生活空間で使用されている中形壺を、穿孔と彩色を施すことのみによって儀器化していることも重要である。特殊な器を成立させる可能性は、唯一鶴尾神社 4 号墳の加飾壺の中に認められたが、それが継続・発展されることはなかった。おそらくは囲繞供献を優先させたために、肥大した加飾性を有する専用儀器の成立が押し止められたと理解したい。

そして大きな変革は、第 3 の画期とした円筒埴輪の導入によってなされる。高松市茶臼山古墳へ導入されたのは二重口縁形態を呈する特異な円筒埴輪であり、また前方部頂に数本のみ樹立されていた可能性が想定される。きわめて象徴的な使用に限定されていたことは、円筒埴輪儀礼の本質的な意味を理解しないままとりあえず体裁を整えた、こうした導入に際しての慌ただしさをも彷彿とさせ、さらに近接して在地系広口壺が出土していることは、伝統的な壺供献儀礼の中へ円筒埴輪儀礼を挿入したといった印象が抱かれる。いずれにしろ、ここにおいてようやく壺と器台がセットとなった供献形態が成立し、以後本地域の墳墓祭祀の中へ拡散していくことは既述したとおりであり、初期に生じうるこうした混沌とした状況は、時代性を敏感に反映したものと考えたい。

これまで本地域の前期古墳の墳丘上へ供献された壺形態の土器を、壺形土器などと呼称してきた。しかし上述したようにその壺形土器に託された思想は、形態的にたとえ日常生活空間で使用される土器と異ならなくても、やはり墳墓への供献専用の土器であるという確たる意識が埋め込まれていたに違いない。そしてそれを促したのは、吉備あるいは畿内の特殊壺型埴輪あるいは初期埴輪による同種多量囲繞供献の成立のインパクトではなかろうか。鶴尾神社 4 号墳を契機として成立したこうした壺形土器を、以下では東四国系壺形埴輪と呼称したい。ただしここで提唱する壺形埴輪は、上述した地域的・歴史的背景を備えたものであり、他地域の前期古墳に供献された壺形土器をすべて埴輪として位置付けるものではない。

東四国系壺形埴輪は、前節において検討したように出現期を盛期として以後徐々に衰退し、早くも前期末には大形前方後円墳への供献はみられなくなる。逆に円筒埴輪は、前期前葉の大形前方後円墳への導入以後、急速に中・小規模墳へ浸透し中期を待たずに普遍化していく。両者の供献儀礼はこの点をみてもやはり異質な内容を有するのであり、それは各々の儀礼を成立させた主体の相違を物語ると考える。また円筒埴輪の導入以後、壺形埴輪と併用されることはあっても、両者が一体化したいわゆる朝顔形態の埴輪は遂に成立させることはなかったことにも注意したい。東四国系壺形埴輪が本来的に墳丘上へ直接供献されるべきものであり、円筒埴輪の上へ載せて供献されるものではなかったことを暗示していると考えたい。

第16図は、東四国系壺形埴輪の編年案である。弥生時代の各地の土器組成や出現期における比重のあり方によって、広口壺系を讃岐系、二重口縁壺系を阿波系と考える。広口壺系は口縁部形態により、内傾する頸部より強く屈曲して斜め上方へ開く鶴尾神社 4 号墳例を典型とする広口壺 a と、外傾する頸部より緩やかに屈曲して大きく外反して開く丸井古墳例を典型とする広口壺 b、同様に外傾する頸部より内面にやや強い稜を伴って鈍く屈曲して開く野田院古墳例を典型とする広口壺 c の 3 形式に細分される。同様に二重口縁壺系も口縁部形態により、直立気味に立ち上がる二次口縁形態の宮谷古墳例と、強く外



第16図 東四国系壺形埴輪編年案

反する形態の2者がみられるが、例数が乏しいため分類はおこなっていない。現状では、図示した編年案を想定しているが、なお資料の増加や既存資料の再整理により例数の増加と若干の変更は見込まれる。

東四国系壺形埴輪の成立の問題に関連して、重要な要素となるのはその供献形態である。赤塚次郎氏は、「壺形埴輪は東海地域の伝統性を淵源にし、この思想を初期大和王権が援用したもの」であり、東海地域には「埴輪への飛躍によって生み出された円筒埴輪が全国的に普遍化する以前、すでに「壺をもって墳墓を囲繞する」という風習が広がっていた可能性」を提示する（赤塚2001）。そしてその初期の例として、西上免古墳をあげる。

西上免古墳はその壺の出土状況をみる限り、後の削平などの影響を考慮してもなおその個体数は乏しく、囲繞供献という表現には無理がないだろうか。また氏は、「瀬戸内地域には器台系のイメージが先行する」とされるが、少なくとも吉備地域においては器台とセットとなった壺が存在し、讃岐地域においては器台を欠落させる。埴輪儀礼の中で壺を重用する思想は、弥生時代の瀬戸内地域の中にも存在し、東海地域のみに固有のものではない。むしろ東海地域においても、弥生後期以降初期古墳において器台を欠落させたことを重視すべきであろう。埴輪儀礼の中において壺と器台を重用する思想は吉備及び畿内地域において囲繞供献として結実して各地に波及し、その受信側である各地の伝統的土器供献儀礼の在り方（多分に在地の土器様式に規定されたものである）によって、円筒埴輪導入以前の土器供献儀礼がむしろ規制された可能性を指摘したい。

6. 東四国系壺形埴輪の拡散

東四国系壺形埴輪は、東四国内にとどまらず遠隔地にも供献されていることが明らかとなってきた。高橋克壽氏は、大阪府壺井御旅山古墳と権八原C号墳出土の二重口縁壺形埴輪の類似から、壺井御旅山古墳の壺形埴輪を讃岐系譜であるとし、「古市古墳群造営以前の南河内と讃岐の両地域の首長同志のつながり」をその背景に想定する（高橋1998）。

行論の都合上、壺井御旅山古墳出土の壺形埴輪を再度観察したい。体部は、かろうじて倒卵形を呈し、外面はタタキ調整の後右下がりのハケ目、内面はケズリ調整される。この結果体部器壁厚は5mm程度と、タタキ・ケズリ調整が省略される権八原例より薄く、古い様相とみることができる。頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部付近で屈曲して一次口縁をなす。一次口縁端部上面は外傾する面をなし、そこに粘土紐を接合して強く外反して引き出し二次口縁となす。二次口縁端部はやや粗雑に丸くおさめ、一次口縁端部は強く斜下方へ引き出される。頸部外面は縦ハケ調整の後ヨコナデ、内面は横ハケ調整の後ヨコナデもしくはナデ調整される。口縁部内外面は基本的にヨコナデ調整が卓越する。頸部の成形は、私が以前東四国系土器群の指標とした「擬頸部分割成形手法」が用いられる（蔵本1999a）。底部は径8cm前後の鈍い平底を呈し、焼成前穿孔される。穿孔の方法には、外面より径1.5cm程の棒状の刺突具ないし指で突いて穿孔したものと、ヘラ状工具により切り取るように穿孔したものなどその手法に違いがあり、また孔の形状も讃岐地域で普遍的な径1.7cm前後の整った小円孔を呈するもののほか、長径3cm程度の不整形なものなどがある。胎土は、その特徴から花崗岩起源の素地粘土の使用の可能性が想定され、在地において製作された可能性を否定するものではない。口縁部内外面にベンガラとみられる赤色顔料の塗彩を認める。以上のように、体部形状、口縁部形態、口頸部の成形手法、穿孔方法などいくつかの点において東四国地域の影響下に製作されたものであることは間違いない。また円筒埴輪とセットとなって供献されているが、壺形埴輪が円筒埴輪上に載せられることはなく、墳裾に直接囲繞供献されて

いることも、円筒埴輪導入以前の東四国地域の伝統の中で理解できるものである。なおこの壺形埴輪についてより細かく地域を限定するなら、二重口縁形態の壺形埴輪の供献が卓越する阿波に系譜を求めることが妥当だといえる。

壺井御旅山古墳以外にも東四国系壺形埴輪の類例は、例えば大阪府久宝寺南遺跡K3号墓周溝内下層資料や佐賀県九里双水古墳、福岡県三国の鼻1号墳にもみられ、いずれも阿波系二重口縁壺形埴輪^(註45)である。類例は今後増加する可能性がある。これら遠隔地への拡散現象は、土器製作技術といった情報の移動ではなく、おそらく一定数の工人集団の移動を想定すべきであり、古墳築造への関与を通した首長間の連携の具体相を物語ると考える。

なお大王墓を含む畿内の大型前方後円墳において、東四国系壺形埴輪の供献例は現状で確認されていない。このことは東四国系壺形埴輪供献が、やはり畿内を核とする円筒埴輪儀礼とは本質的に異なるものであり、他地域へのインパクトという面においても比肩すべくもない地域的な土器供献儀礼の一類型でしかなかったことを示している。

結語

東四国地域における弥生後期から古墳前期にかけての土器の供献行為を通して、墳墓の有する儀礼的行為の内容とその変質、地域性などについて考察をおこなってきた。そこにみられたのは、継続と断絶と飛躍・更新であり、おそらくは吉備あるいは畿内から発信された情報は、それを入力した東四国地域内部でさまざまな模索と混乱を引き起こしたことが想像される。そして数多くの前方後円墳の中に結実したものは、本地域の首長層の間でイメージされたアイデンティティーの墓制的表現であった。

弥生後期の首長墓には、かなり象徴化はされているが、搬入土器の供献、顔料塗彩、穿孔など、儀礼に使用された器物に残された痕跡から、参列者が儀礼へ直接参加した証をうかがうことができた。首長の遺骸を前に、参列者は自ら持ち寄った器で飲食を共にすることにより、亡き首長の魂を悼み慰め交感し、さまざまな儀礼行為に彩られた呪術性の中で、本来死穢であった首長の遺骸は聖なるものへと浄化された。

共同体を成立させるための最大の用件は同一性である。社会は共通性の上になりたっている。まさにこの飲食儀礼こそ、首長を共同体の内部にとどめるための同一性の社会的確認行為であり、もっとも優先されるべき儀礼行為であった。そして聖なる首長には社会的合意のもと新たな権威が付与されたのである。

前期古墳にみられる儀礼行為のさまざまなレベルでの様式化によって、その呪術性はみせかけのものとなり、もはや参列者による直接的関与を否定し逆に疎外する方向へと向かわせる。こうした様式化は、首長の権威の社会的合意を必要としない、つまり首長個人の宗教的資質によることなく安定してその権威を継承しうるためのイデオロギーと体制が創出されたことを意味する。まさに古墳は王の遺骸を入れる容器にほかならない。その容器の様式こそが問題とされたのであり、威信財を含むさまざまな儀礼の贈与は、王の権威をその共同体の外部から表象するものに他ならない。

坂靖氏によると、「大和東南部地域の「王墓」の系譜の中で、その王墓が築造されるたびに新しい埴輪が創出され、各地に影響を与えていた」という(坂2002)。つまり、大王の世代毎に新たな埴輪儀礼が創出され、それが各地の首長へ発信されているのである。王権によって創出された諸儀礼すべてが「模範的儀礼」であり、周縁へはその「モデル」を「コピー」することによって波及していく(蔵本2004)。こ

こでは儀礼の共有のみが意味をなす。王権は、常に新たな儀礼の創出を要請され、各地の首長はそれを受け取ることで、権威の継承と帰属意識の確認をおこなっていた。こうした儀礼の贈与を媒介とした各地の首長に対する統治戦略によって、王権が手にしたのは「親和と支配の微妙な関係」(竹沢1996)ではなかったか。つまりこうした贈与の累積が、かつて画一的(近藤1983)と表現されたものの実態であり、共同体の崩壊を防ぐための同一性なのである。東四国地域にも、その出現時には「模範的儀礼」を創出する中心がはからずも存在した。しかし、畿内の王権による侵食によって、その小宇宙(鶴尾システム)^(註46)はしだいに縮小し、畿内王権が創出する秩序に吸引される。やがて畿内の王権も、社会的分業のより一層の進展と対外関係の変化によって、王の専制性が実在化してくるにつれ、前方後円墳での儀礼様式から王をも疎外し、その非対称的贈与関係の構造自体に内在するそれを成立せしめた互酬的儀礼システム(その完成されたシステムの最初期の古墳をもって、「箸墓システム」と呼称したい。)により自らを崩壊させていくのである。

謝辞

小稿の執筆に際して、吉岡神社古墳の発掘調査を担当された香川大学教授丹羽祐一先生には、調査内容を含め種々の課題について適切なご指導、ご助言をいただきました。また出土遺物を保管する丸亀市教育委員会には、遺物の実測作業などに際し、格別のご高配を賜わりました。なお京都大学総合博物館、瀬戸内海歴史民俗資料館、大阪府教育委員会、大阪府立近つ飛鳥資料館、徳島県埋蔵文化財センター、徳島県立博物館、高松市教育委員会、さぬき市教育委員会、坂出市教育委員会、丸亀市教育委員会、善通寺市教育委員会、綾南町教育委員会、綾歌町教育委員会、徳島市教育委員会、青木勘時、阿河銳二、東信男、天羽利夫、一瀬和夫、今井和彦、魚島純一、梅木謙一、大賀克彦、大久保徹也、大嶋和則、岡本敏行、加納裕之、亀山行雄、木村義行、栗林誠治、小池香津江、小浜成、近藤武司、近藤玲、阪口英毅、 笹川龍一、澤山孝之、柴田昌児、清家章、高島芳弘、辻美紀、寺澤薰、中村弘、橋本達也、橋本輝彦、原芳伸、廣瀬常雄、町川義晃、松岡宏一、三宅良明、森岡秀人、山下平重、山田隆一、山元敏裕、渡部明夫の諸機関や諸兄からは資料の実見などに際してお世話になり、また貴重なご助言やご協力をいただきました。さらに掲載した遺物の実測は蔵本が行いましたが、浄書は猪木原美恵子嬢の手を煩わしました。これらすべての方に、末筆ではありますが深く感謝いたします。

木棺痕跡

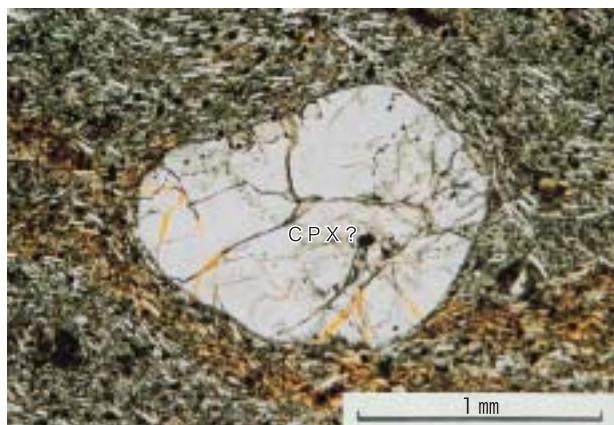


豊穴石櫛内部

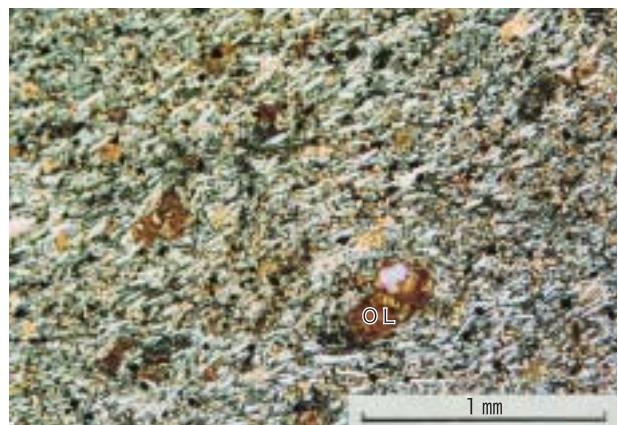


石櫛粘土床断面

吉岡神社古墳調査写真

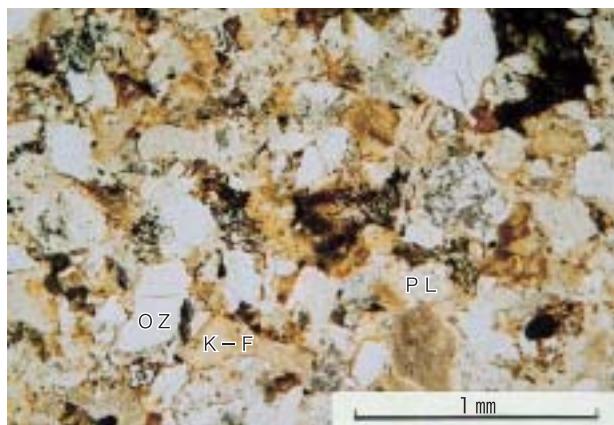


(オープンニコル × 5)



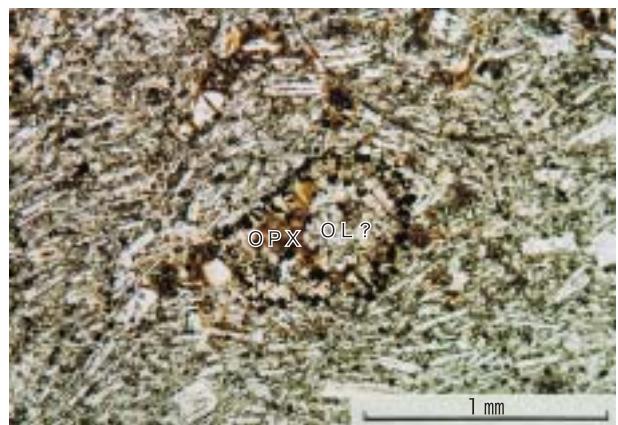
(クロスニコル × 5)

豊穴石櫛板状石材



(オープンニコル × 5)

豊穴石櫛粘土床円礫



(オープンニコル × 5)

青ノ山山頂周辺採集板状石材

吉岡神社古墳出土等石材顕微鏡写真

図版 2



直口壺



銅鎣・鉄鎣・玉類

吉岡神社古墳出土遺物写真

附篇 香川県内前期古墳出土供献土器資料

今回的小論の検討をすすめるにあたり、いくつか資料の再調査をおこなった。ここではそうした資料を紹介し、本篇の参考としたい。

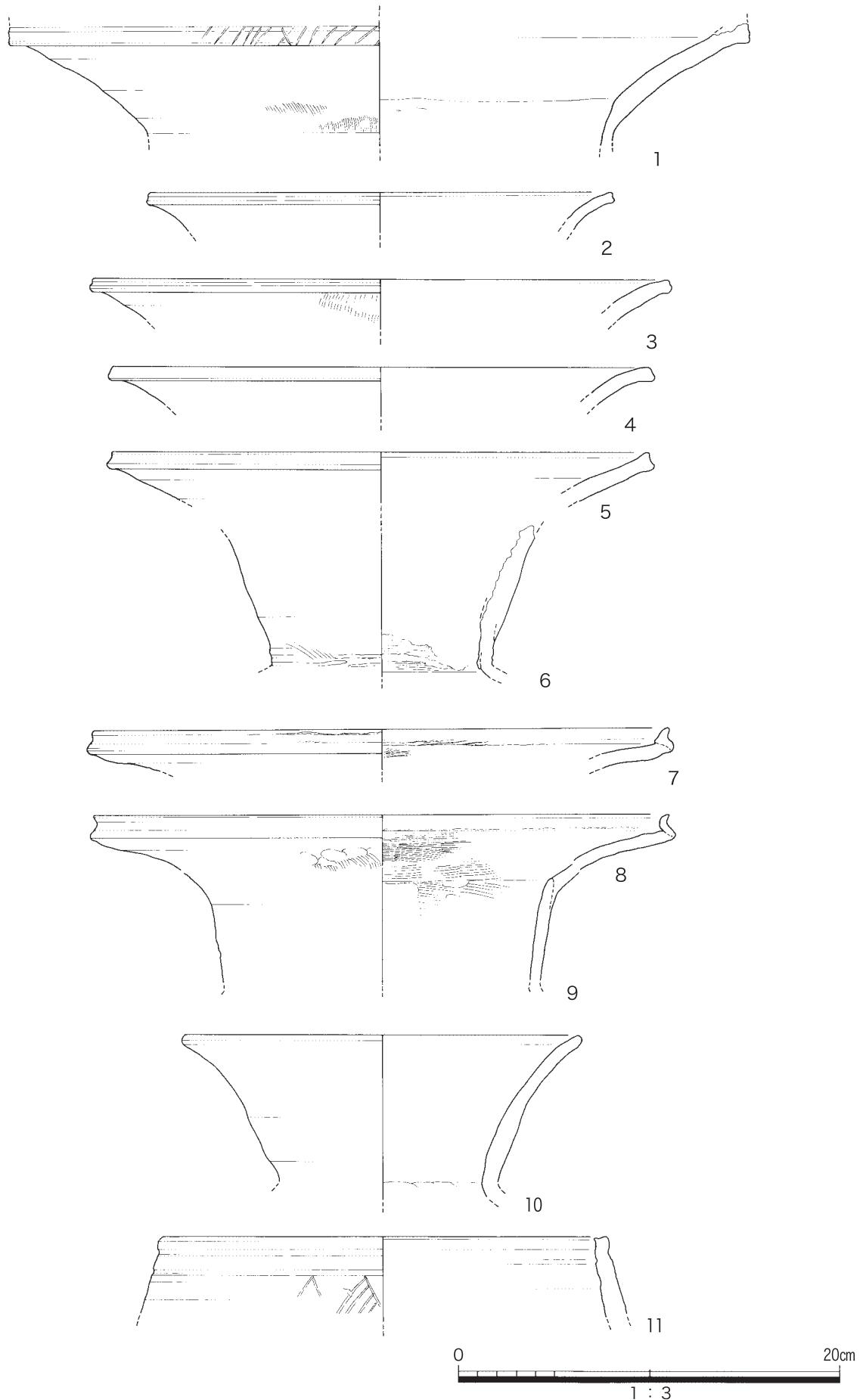
第17図1は、高松市稻荷山姫塚古墳後円部南東斜面での採集資料である^(註47)。9~10cm角ほどの小片で、口縁部には若干の歪みがあるため、復元した口径や傾きにはやや難がある。現状での口径38.6cmの大形壺に復元される。口縁部は緩やかに外反して開き、端部は四角くおさめ、端面は直立する。端部上面には、明瞭な粘土紐の剥離痕が認められ、さらに口縁部は上方へ拡張されていたことは間違いない。口縁部内外面はヨコナデ調整。端面には、上端に浅い凹線を施した後、ヘラ状工具により乱雑な斜線を刻む。内外面はベンガラにより塗彩される(第20図参照)。

同図2~9は、同市石船塚古墳採集資料である^(註48)。いずれも中形広口壺^(註49)で、頸部から緩やかに外反して開くタイプ(2~6)と、僅かに外傾して立ち上がる頸部より強く屈曲して外反して開くタイプ(7~9)の二者がある。前者の端部は、四角くおさめつつ僅かに下方のみ(3)もしくは上下へ(2・4・5)肥厚させる。また端面に浅い1条の沈線を巡らせる(2・4)と、ヨコナデにより凹線状に浅く窪む(3・5)の二者がある。後者の端部は、端部上面に小さく粘土紐を継ぎ足して、強く外反させつつ摘み上げ端部を丸くおさめる。また7の端部は、この摘み上げの際の強いヨコナデ調整により、外面が凹線状に窪む。両者の相違は、調整手法にも及び、前者ではヨコナデ調整が卓越するのに対して、後者ではヨコナデ調整が省略され口縁部内外面にハケ調整が残存する。また、器表面の剥離の進んだ9を除いて、いずれも肉眼観察により限りベンガラと推定される赤色顔料により塗彩される。

同図10は、綾歌町快天山古墳第3号石棺の南小口、つまり被葬者の棺外足下側より出土した直口形態の広口壺である^(註50)。外傾して立ち上がる頸部より、口縁部は緩やかに外反して開く。端部は四角くおさめる。器表面は剥離が顕著で、顔料塗彩の有無は確認できない。

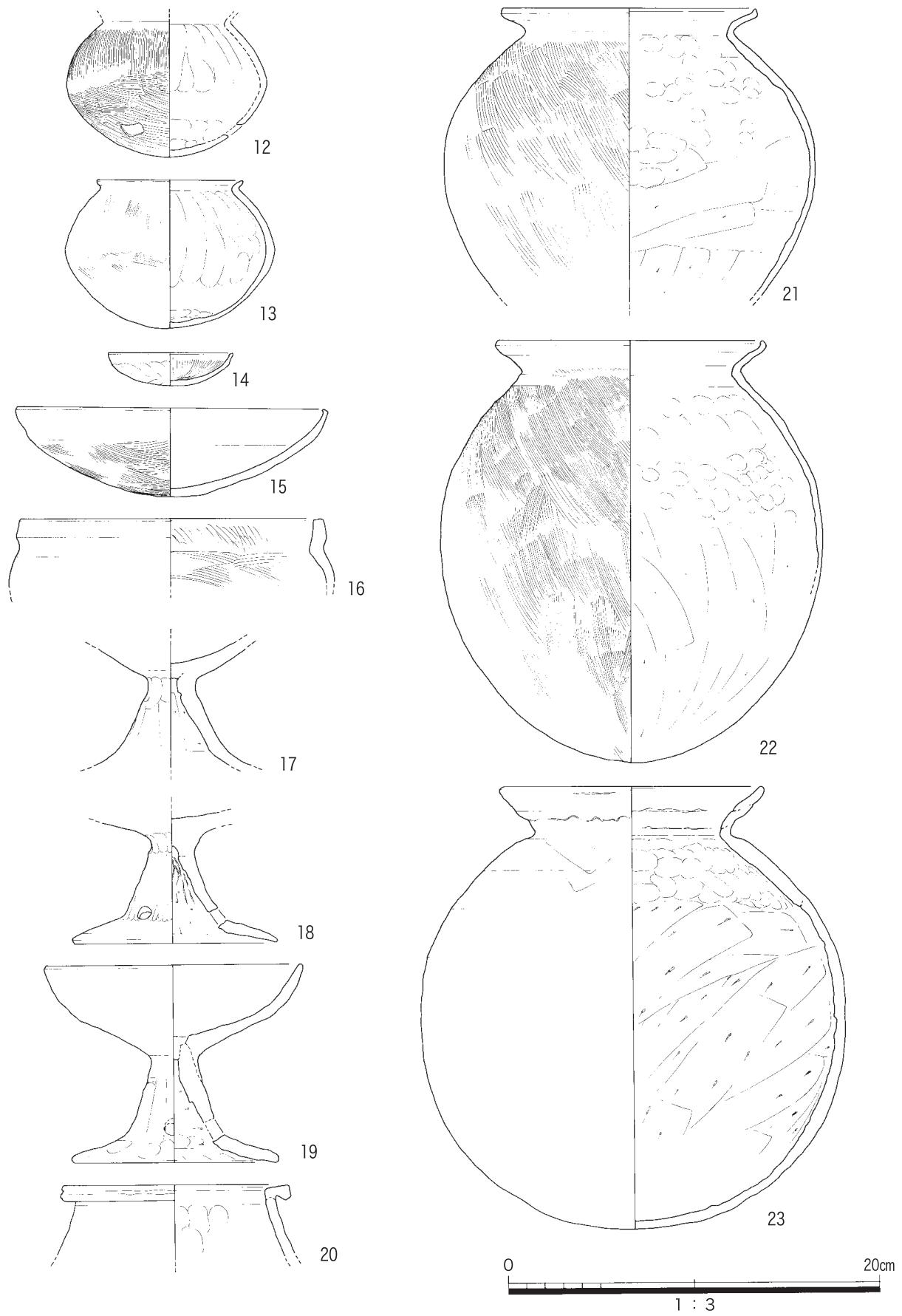
同図11は、坂出市タイバイ山古墳採集資料とされる^(註51)。従来器台として紹介されてきたが、本地域の弥生後期中葉以降の基本的器種組成に器台はみられず、また大形器台としても口縁部の拡張が異常に大きいことなどから、複合口縁壺の口縁部片として図示した。あるいは別器種の可能性も残る。4~5cmほどの小片であり、図示した口径や傾きにはやや難がある。口縁端部は四角くおさめつつ、内端部を小さく内上方へ摘み出す。外面は2条の浅い凹線の下位に鋸歯文を施す。顔料による塗彩の痕跡は認められない。複合口縁壺への加飾は、庄内併行期に盛行し布留併行期には急速に衰退するとみられることがから、あるいは古墳とは関係しない遺物である可能性もある。参考資料としての提示にとどめたい。

第18・19図12~25は、高松市茶臼山古墳出土資料である^(註52)。14・15は第 主体竪穴石槨棺内への副葬品、12・13・16は第 主体竪穴石槨外北西隅からの一括出土品、17~21・24・25は前方部前面葺き石周辺出土、22・23は前方部前面第 主体箱式石棺出土資料である。12は、皿状を呈する精製小形鉢。ほぼ完形である。丸底の底部より鈍く屈曲して口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面は放射状のミガキ調整を時計回りに施す。底部外面はナデ調整とみられるが不明瞭。内外面に赤色顔料が部分的に付着し、塗彩の可能性も考えられる。二次的被熱痕及び穿孔は認められない。13は、丸底中形鉢。ほぼ完形である。口縁部は鈍く屈曲して外傾して立ち上がり、端部を四角くおさめつつ内側へ小さく摘み出す。端面は内傾する。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面底部は押圧後横及び斜め方向の細かなハケ調整を加える。内外面にかろうじて赤彩痕跡を認める。二次的被熱痕及び穿孔は認められない。14・15は、ほぼ同タイプの小形精製短頸壺。両者とも完形品で出土したようだが、14は口縁端部を欠損



第17図 前期古墳出土供献土器実測図 1

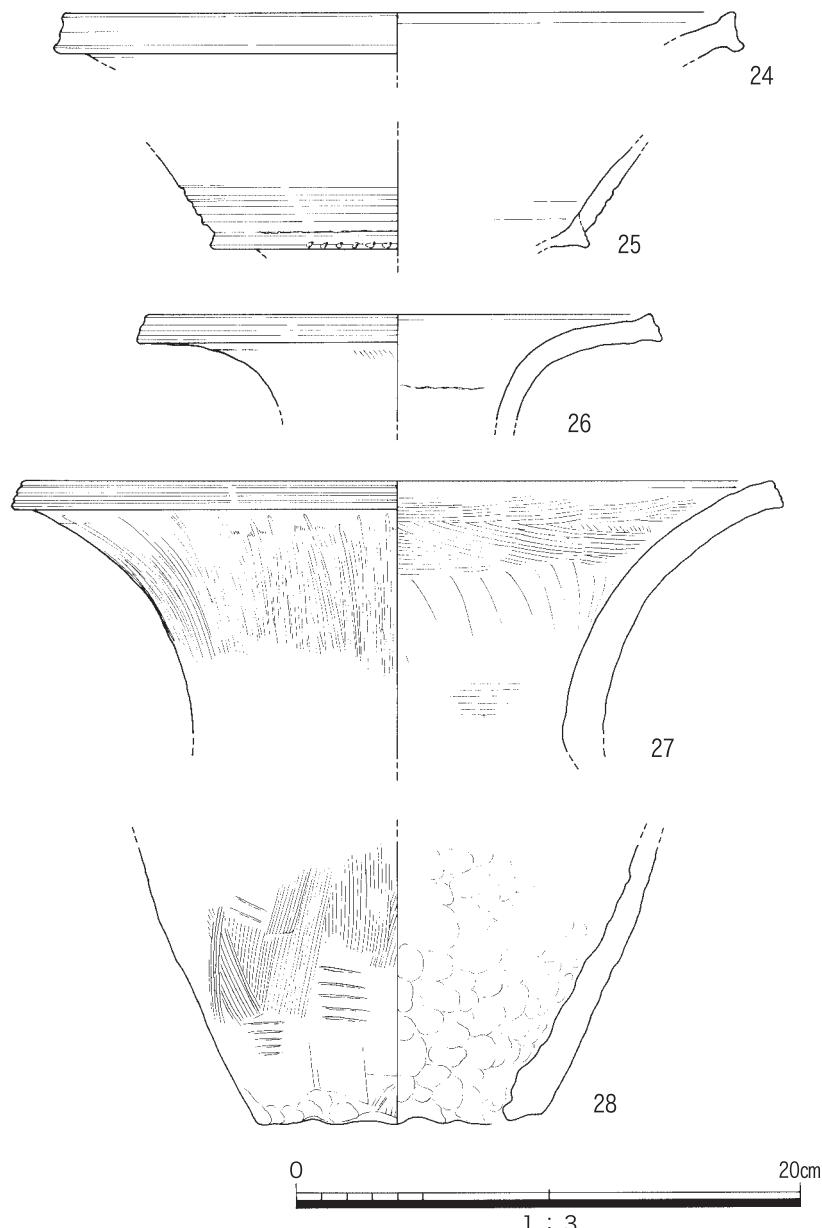
する。いずれも最大径付近が鈍い稜をなす張りの強い体部に、口縁部は小さく外傾して開き端部は尖り気味に丸くおさめる。体部は上位縦方向のハケ調整の後、下半部を横ないし斜めハケ調整後、14では一定方向のミガキ調整を加える。内面は指ナデもしくは押圧により、平滑に仕上げられる。14のみ底部付近に2cmほどの不整方形の焼成後穿孔を認める。いずれも内面には厚く水銀朱とみられる赤色顔料が付着し、容器として使用された可能性が考えられる。なお二次的被熱痕は認められない。16は、小形鉢として図示した。接合不能な小片に破碎しているため、全形をうかがうことはできない。うち口縁部片のみを図示したが、小片のため復元図示した口径や傾きには難がある。口縁部は直立気味に立ち上がり、やや内湾して端部を四角くおさめる。全体に器表面の磨滅が進展しており、内面のみやや粗いハケ調整が確認された。破片の一部に赤色顔料の付着を認め、破断面にも付着していることから、人為的かどうかはともかく破碎後顔料の付着をみたことは確実である。なお二次的被熱痕は認められず、穿孔については不明である。17～19は粗製の高杯。粗粒の小石粒を含み、調整も粗雑。いずれも出土時は完形であったとみられるが、小片に破碎した状態で保管されておりうち2点は全形をうかがうことができない。杯部形状が判明した19では、やや浅い椀状を呈し、端部は丸くおさめる。接合不能な小破片を図上で復元したため、実際はもう少し深い杯部となる可能性もある。脚部は下位で強く屈曲して裾部が短く開く。脚頂部は小粘土塊を充填し塞ぎつつ、脚上端の側面より杯部を成形する。18では脚外面にミガキ調整が加えられるが、他の2点は粗くメントリ状にナデ調整されるのみ。内面は基本的にケズリ調整されるが、18はそれが不徹底なため上位に粘土紐巻上げ痕とシボリ目痕が残される。脚下端には、3方向の小円孔の透し孔を伴う。いずれも顔料の塗彩痕及び二次的被熱痕は認められない。20は在地系小形甕。口縁部は強く屈曲して水平に近く開き、端部は主に下方へ肥厚して内傾する端面をなす。端面には浅い1条の沈線を認める。顔料の塗彩及び二次的被熱痕は認められず、穿孔は不明。21～23は中形甕。21・22は在地系の甕で、いわゆる東四国系薄甕（蔵本1999b）である。東四国系甕は、いずれも球形体部に強く外反して開く口縁部を有し、端部は内上方へ摘み上げられる。体部外面は右下がりのハケ、内面は下半ケズリ調整の後肩部付近に押圧・ナデ調整を加える。24の外面中位には、二次的被熱による煤の付着を認める。またやや長胴化傾向にある22は、形式的に21に後出する可能性があり、22が前方部前面の副次的埋葬に伴うことはこうした土器の年代観と矛盾しない。23は粗製の布留系甕。口縁部は内湾して開き、端部は丸みのある矩形状におさめる。内外面ヨコナデ調整は徹底されず、粘土紐接合痕を明瞭に残す。体部は反転復元した図上でほぼ球形を描くが、実際は成形時に手で持ち上げた際に生じたとみられる歪みにより長楕円形を呈し、部位によって整った円弧を描かない。外面肩部に横方向の板ナデ調整に布留系の影響を認めるが、内面はケズリ調整が上端まで及ばず、肩部は東四国系甕同様押圧やナデ調整により整えられる。体部の器壁厚は5～6mmと厚く、ケズリ調整は本来的な目的とは異なり、器表面の凹凸を均す程度であったようだ。まさに在地系技法を用いた布留系甕模倣形態である。以上中形甕は、赤色顔料による塗彩痕は認められず、また穿孔は確認できない。なお22は、布留系甕との確実な供伴が確認される在地系甕として、その併行関係を知る貴重な資料となる。24は在地系中形広口壺口縁部の小片。端部は上下に強く引き出され、内傾する端面は強いヨコナデ調整により浅く凹線状に窪む。本篇で述べた広口系壺形埴輪b類である。小片のため断定はできないが、顔料の塗彩痕及び二次的被熱痕は確認できない。25は二重口縁壺として図化したが、小片でもあり器種を断定できない。屈曲部外面に断面三角形状の突帯をもち、上位に粘土紐を接合してわずかに外反して開く口縁部となす。突帯上面にはヘラ状工具による刻み目を、口縁部下端には4条の凹線をそれぞれ施す。顔料の塗彩痕及び二次的被熱痕は認



第18図 前期古墳出土供献土器実測図 2

められない。

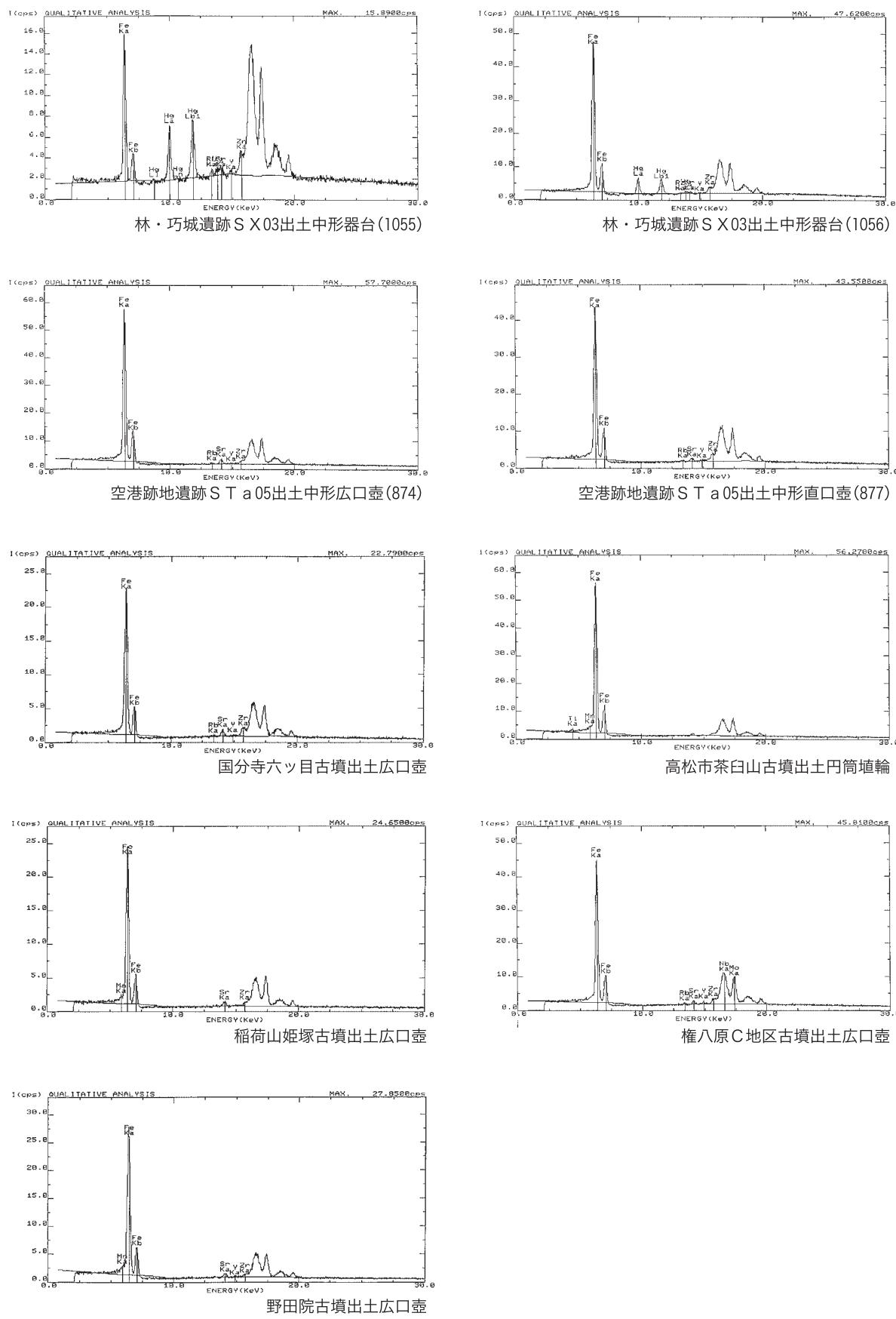
第19図26～28は、綾南町津頭東古墳出土の広口壺である（註53）。口縁部は2点を圓化した。いずれも口縁部は緩やかに外反して開き、端部は四角くおさめつつ、中形壺（27）は小さく下方へ引き出し、小形壺（26）は上下へ小さく肥厚する。端面には、いずれも2～3条の浅い沈線が施される。小形壺は外面ナデ調整されるのに対して、中形壺ではさらに縦方向のミガキ調整を加えるなど古相を呈する。筒状を呈する底部（27）は、内湾気味に外傾して立ち上がる。外面にはタタキ調整痕が認められるが、内面はそれを受けたとみられる押圧のみでケズリ調整はなされず、したがって器壁厚は1cm前後と厚い。底基部は粗雑に押圧ないしナデ調整され、端部は部位により異なるが基本的に四角くおさめる。なお、いずれも顔料の塗彩痕及び二次的被熱痕は認められない。



第19図 前期古墳出土供獻土器実測図 3

図面番号	古墳名	器種	外面調整	内面調整	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存率	備考
17 - 1	稻荷山姫塚古墳	広口壺	縦ハケ後ヨコナデ斜面上端に浅い凹 線をひき、さきに斜線縦刻。	ヨコナデ。下端ケズリ?	-	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (5YR7/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
17 - 2	石船塚古墳	広口壺	ヨコナデ。端面に1条沈線。	ヨコナデ	口径(24.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (5YR5/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
17 - 3	石船塚古墳	広口壺	縦ハケ後ヨコナデ。端面に1条沈線。	ヨコナデ	口径(30.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
17 - 4	石船塚古墳	広口壺	マメツ・剥離。端面ヨコナデにより浅 く窪む。	マメツ・剥離。端部付近に浅い1条沈線。	口径(28.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
17 - 5	石船塚古墳	広口壺	ヨコナデ。端面凹線状に浅く窪む。	ヨコナデ? 端面付近にハケ状工具痕。 附近にハケ状工具痕。基部	口径(28.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
17 - 6	石船塚古墳	広口壺	横方向のナデ調整後一部縦ナデ。基部 付近にハケ状工具痕。	ヨコナデ? 端部強いヨコナデにより凹 線状に窪む。	口径(28.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
17 - 7	石船塚古墳	広口壺	ヨコナデ。端面凹線状に浅く窪む。	ヨコナデ? 端面付近ヨコナデ。	口径(28.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?8弱	外面に赤色顔料塗彩	
17 - 8	石船塚古墳	広口壺	横方向のナデ調整後一部縦ナデ。基部 付近にハケ状工具痕。	ヨコナデ? 端部付近ハケ後、粘土紐貼付。マメ ツ・剥離により最終調整不明。	口径(30.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?8弱	外面に赤色顔料塗彩	
17 - 9	石船塚古墳	広口壺	ヨコナデ。端部付近ヨコナデ。	-	口径(30.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?8弱	外面に赤色顔料塗彩	
17 - 10	快天山古墳	広口壺	マメツ・剥離	マメツ・剥離	口径(20.5)	密：0.1~3.5mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR5/6)	口縁部?8弱	外面に赤色顔料塗彩	
17 - 11	タイハイ山古墳	複合口縁壺	ヨコナデ。端部付近に2条の浅い凹 線。下位に鋸齒文を鏽刻する。	ヨコナデ	口径(30.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR5/6)	口縁部?8弱	外面に赤色顔料塗彩	
17 - 12	高松市茶臼山古墳	小形短頸壺	体部上立縦ハケ後下立縦ハケ後底部付 近一定方向の三刀半調整。	横ハケ後頭部付近ナデ。	-	密：0.1~3.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	-	外面に赤色顔料塗彩	
17 - 13	高松市茶臼山古墳	小形短頸壺	口縁部ヨコナデ。体部上位は縦ハケ後 縦線ヨコナデ。	マメツ・剥離	口径(20.5)	密：0.1~3.5mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR5/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
17 - 14	高松市茶臼山古墳	小形鉢	口縁部ヨコナデ。底部押圧後横及び斜 線部ヨコナデ。	マメツ・剥離	口径(23.2)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 12	高松市茶臼山古墳	中形鉢	口縁部ヨコナデ。底部押圧後横及び斜 線部ヨコナデ。	マメツ・剥離	口径(16.4)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 13	高松市茶臼山古墳	中形鉢	口縁部ヨコナデ。体部上位は縦ハケ後 縦線ヨコナデ。	マメツ・剥離	口径(16.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 14	高松市茶臼山古墳	高杯	口縁部ヨコナデ。底部押圧後横及び斜 線部ヨコナデ。	マメツ・剥離	口径(16.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 15	高松市茶臼山古墳	高杯	口縁部ヨコナデ。底部シボリ目後横ケズリ めハケ。	マメツ・剥離	口径(16.4)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 16	高松市茶臼山古墳	中形鉢	マメツ・剥離。体部にかろうじてハケ 調整痕あり。	マメツ・剥離	口径(16.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 17	高松市茶臼山古墳	高杯	口縁部ヨコナデ。底部粗いメントリ 杯部マメツ・剥離。脚部粗いメントリ	マメツ・剥離	口径(16.0)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?4/8	口縁部?4/8	
18 - 18	高松市茶臼山古墳	高杯	口縁部ヨコナデ? 横部マメツ・剥離。 脚部シボリ目後横ケズリ。	マメツ・剥離	口径(10.9)	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	脚部?4/8	脚部?4/8	
18 - 19	高松市茶臼山古墳	高杯	口縁部ヨコナデ? 横部マメツ・剥離。 脚部粗いメントリ	マメツ・剥離	口径(13.7)	密：0.1~4.5mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	脚部?4/8	脚部?4/8	
18 - 20	高松市茶臼山古墳	小形甕	口縁部ヨコナデ。底部シボリ目後横ケズリ めハケ。	マメツ・剥離	口径(11.0)	密：0.1~5.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	脚部?4/8	脚部?4/8	
18 - 21	高松市茶臼山古墳	中形甕	口縁部ヨコナデ。体部斜めハケ。	マメツ・剥離	口径(13.5)	密：0.1~5.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	脚部?4/8	脚部?4/8	
18 - 22	高松市茶臼山古墳	中形甕	口縁部ヨコナデ。体部斜めハケ。	マメツ・剥離	口径(14.3)	密：0.1~5.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	脚部?4/8	脚部?4/8	
18 - 23	高松市茶臼山古墳	中形甕	口縁部ヨコナデ。体部は板ナデ後ナデ、 調整後肩部に横板ナデ。	マメツ・剥離	口径(13.8)	密：0.1~5.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	脚部?4/8	脚部?4/8	
19 - 24	高松市茶臼山古墳	広口壺	ヨコナデ	ヨコナデ	口径26.4	密：0.1~2.0mmの石英・長石・角閃 石・黒雲母粒含む	良好 (75YR6/6)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
19 - 25	高松市茶臼山古墳	二重口縁壺	ヨコナデ後ヨコナデ後端部に刻み目、 縦ハケ後端部付近を中心にヨコナデ。	ヨコナデ	-	やや粗：0.1~4.5mmの石英・長石・角 閃石? 黒雲母・火山ガラス粒含む	良好 (5YR4/8)	細片	内外面に赤色顔料塗彩	
19 - 26	津頭東古墳	広口壺	縦ハケ後ナデ。端部浅い凹線2条。	ヨコナデ	口径19.9	やや粗：0.1~3.0mmの石英・長石・角 閃石? 黒雲母・火山ガラス粒含む	良好 (5YR4/8)	口縁部?2/8	口縁部?2/8	
19 - 27	津頭東古墳	広口壺	縦ハケ後端部付近を中心にヨコナデ、 縦ハケ後端部付近を中心にヨコナデ。	ヨコナデ	口径29.6	粗：0.1~6.0mmの石英・長石・黒雲 母・火山ガラス粒含む	良好 (75YR6/6)	口縁部?2/8	口縁部?2/8	
19 - 28	津頭東古墳	広口壺	タキ調整後縦ハケ。基部は押圧・ナ デ。	ヨコナデ	底径(11.0)	やや粗：0.1~3.0mmの石英・長石・黒 雲母・火山ガラス粒含む	良好 (5YR4/6)	底部3/8	底部不整円形	

第1表 前期古墳出土供獻土器觀察表（法量の（ ）内数値は推定を含む）



本文註

- 註1 薄片プレパラートの作成は筆者があこなった。また、偏光顕微鏡による石材鑑定については、鳴門教育大学小澤大成先生のご指導を得た。記して感謝いたします。
- 註2 分析は徳島県立博物館魚島純一氏のご協力を得た。分析は、徳島県立博物館に設置されたエネルギー分散型蛍光X線分析装置（テクノス製 T R E X 630 L）を使用し、次の条件で非破壊の定性分析をおこなった。X線管：Mo（モリブデン）、X線管電圧：50 kV、X線管電流：0.2 mA、検出器：電子冷却式 Si（Li）、分析範囲：直径2 mm、測定時間：100秒、測定雰囲気：大気
- 註3 香川県内ではさぬき市岩崎山4号墳より5本、高松市猫塚古墳より8本がそれぞれ出土している。
- 註4 銅鏡の分類と名称は、高田健一氏の分類案に従った（高田1997）。
- 註5 鉄鏡の分類と名称は、杉山秀宏氏の分類案を参照した（杉山1988）。
- 註6 色調の観察には、長崎2001を使用した。
- 註7 勾玉の石材については、愛媛大学理学部皆川鉄雄氏によって、透綠閃石（軟玉ヒスイ）との理化学的分析結果が提示されている（丸亀市立資料館展示パネルより）。
- 註8 穿孔状況の観察については、X線写真とともに歯科医師が用いる歯形取り用の樹脂を使用した。この方法については、新潟県埋蔵文化財調査事業団田海義正氏のご教示を得た。記して感謝いたします。
- 註9 旧稿において讃岐の前方後円墳の立地について、後円部を平野部側に前方部を尾根上方へ向ける選地をなす例が多いことを指摘し、奈良盆地などの他地域の前方後円墳の選地と比較しながら、そうした選地が「個別地域毎に伝統的に受け継がれており、地域固有の秩序と位置付けられること」を指摘、さらに墳丘形態や埋葬施設などの諸要素が一体となった「一つの地域性を形成していた」可能性を示唆した（蔵本1995）。こうした見解は、以後大久保徹也氏（大久保2000）や北條芳隆氏（北條2000）らによって追認され大方の支持を得ているものと考える。さらにこうした伝統的選地原則を共有する古墳に対して、讃岐地域との「親縁性」という表現で、秩序の空間的広がりについて考察を試みた（蔵本1999b）。こうした筆者の見解に対し菅原康夫氏は、宝幢寺1号墳と愛宕山古墳の2基について、その立地する地形条件から「親縁性の根拠に欠ける」と批判する（菅原2001）。しかし上述したように、私がそこで指摘したのは、さまざまな属性の中での例えば前方後円墳の選地原則という様式化された儀礼の共有によって括られた帰属意識の表現であり、具体的な地形条件の中での微細な相違は問題とはならない。論点は、小論を読んで頂ければご理解頂けるのではないかと思う。
- 註10 本瓦は、讃岐国分寺跡出土複弁八葉蓮華文軒丸瓦SKM06に祖形を求めることができあり、歓喜寺の創建に国衙あるいは国分寺の何らかの関与を想定できる可能性もある。
- 註11 「高津（たかつ）」を「こうつ」と読み「郡津」の転訛の可能性を考えたい。こうした点を含め、鶴足郡衙については別稿を用意したい。
- 註12 千田稔氏は、その保持する物資集積機能から、郡家が港津を含め交通路と密接な位置関係にあることを指摘している（千田2001）。
- 註13 こうした名称に研究史的意味はとくに意識していない。
- 註14 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター保管資料。
- 註15 さぬき市教育委員会所蔵資料。
- 註16 さぬき市教育委員会所蔵資料。
- 註17 さぬき市教育委員会所蔵資料。
- 註18 東かがわ市教育委員会所蔵資料。
- 註19 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター保管資料。
- 註20 綾歌町教育委員会所蔵資料。
- 註21 墳墓における土器の供献を、飲食儀礼の痕跡と捉える点で近藤義郎氏の考えと相異はない。しかし近藤氏は、供献土器の出土状態は祭祀後の「片付け」を示しており、穿孔は祭祀に使用する前、つまり祭祀に先立ってなされ、特殊壺・特殊器台の登場と共に、象徴化された相當祭祀の理念が成立したことを指摘する（近藤2003）。この点で、筆者の理解と大きく相違する。近藤説は、儀礼行為の前に儀器化がなされたことを前提とし、その論拠として「片付け」論を準備、片付けによって結局土器は破損し、使用できない状態になるのであるから、あ

えて穿孔により仮器化する必然性に乏しいと推測する。ここで問題となるのは仮器化行為であり、その目的をどのように理解するかという点にある。

私は、「片付け」行為がなされたとしても、その行為の途中で生じた不慮の破損と、穿孔行為を同列に評価すべきではないと思う。また儀礼の前に穿孔したのであれば、あえて焼成後に穿孔をすることなく、より容易で確実な焼成前の穿孔がその当初よりなされたのではなかろうか。本文中にも述べたように、穿孔は位置や形状などが一定程度規定された儀礼行為であり、外觀上完形に近い状態の土器を供献することに意味があつたのである。そしてそれは、やはり使用を前提とした穿孔であり、その意味で焼成後への穿孔時期の移動を重要な画期としたい。

- 註22 埋葬施設上面より供膳具が出土した墳墓には、京都府芝ヶ原12号墳など近年資料数が全国的に増加してきた。こうした供膳具の供献はおそらく吉備あるいは北近畿地域を震源として円礫堆儀礼（蔵本2004）などとともに各地に波及した可能性が想定されるが、なお類例の追加を待って再度検討したい。
- 註23 財団法人徳島県埋蔵文化財センター所蔵資料。
- 註24 細頸壺の一部（fig31 - 5 ~ 9）については、実見を許されなかつたため搬入品の可能性は高いが断定はできない。讃岐産の可能性が指摘される広口壺（同1）は、器表面のコーティングによって胎土の観察ができなかつたため、胎土からの搬入関係は不明。器形は、高松平野周辺での類例に乏しい。
- 註25 綾歌町教育委員会所蔵資料。石塚山2号墳については、旧稿において豊穴石櫛に板状安山岩が使用されていることから、古墳として評価した。しかし、供献土器や副葬品目からは古墳として積極的に評価できないことも事実であり、なお類例の増加を待ち検討したい。
- 註26 報告書では、前方後円墳とされる。しかし、前方後円墳とするとあまりに後円部の形状が不整形であり、第3主体部がくびれ部近くに位置してしまうこと、そして前方部とされる部分の検出範囲が後世の削平により小範囲に限定され、積極的根拠をもって断定できないことなどの理由から、円墳として評価したい。
- 註27 高松市教育委員会所蔵資料。
- 註28 17~5を頸部とする壺を想定している。しかし掲載の図は天地逆と思われる。未報告資料の中に、単口縁の壺口縁部小片があり、接合はしなかつたが、頸部と同一個体の可能性を考え直口壺とした。しかし細片のため、確実に器種を特定できたわけではない。
- 註29 さぬき市教育委員会所蔵資料。
- 註30 残念ながら現在所在不明となっており、実見しておらず詳細については不明。
- 註31 財団法人徳島県埋蔵文化財センター所蔵資料。
- 註32 善通寺市教育委員会所蔵資料。
- 註33 徳島市教育委員会所蔵資料。
- 註34 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター保管資料。
- 註35 報告書では焼成後穿孔とされるが、現状ではマメツなどのため確認できない。
- 註36 徳島県立博物館所蔵資料。
- 註37 徳島県埋蔵文化財センター所蔵資料。
- 註38 瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵資料。
- 註39 報告書未刊のため、古墳の正式名称は不明。香川県1983で墳丘墓とされた古墳を指す。瀬戸内海歴史民俗資料館及び財団法人香川県埋蔵文化財調査センター保管資料。
- 註40 徳島県立博物館所蔵資料。
- 註41 綾南町教育委員会所蔵資料。
- 註42 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター保管資料。
- 註43 猫塚古墳と大窪経塚古墳出土の壺は、いずれも調査によって出土したものではなく、出土状況の詳細は不明である。しかし、土器の完存度と器表面の状態などから、これら土器が埋納されたものであることは間違いないと考える。
- 註44 同様の指摘はすでに古屋紀之氏によってなされている（古屋1998）。
- 註45 壺井御旅山古墳と三国の鼻1号墳の墳丘平面企画は、相似形をなすという指摘がある（塩谷1992）。
- 註46 かつて「鶴尾型墳墓祭祀」と呼んだ（蔵本2000）ものがその内容である。

註47 個人採集資料

註48 京都大学文学部総合博物館所蔵資料。

註49 いずれも小片のため、復元した口径や傾きにはやや難がある。また2は器壁厚が6.5mm前後と他の壺と比べて著しく薄く、あるいは小形広口壺になる可能性もある。

註50 瀬戸内海歴史民族資料館保管。報告書には、体部も細かく破碎して出土したとあるが、現在所在不明で確認できない。

註51 坂出市郷土資料館保管資料。詳しい採集地点は不詳だが、内面に「府中町北谷山頂古墳」と墨書きがある。ほかに資料館には、壺棺とされる1個体分の大形壺の体部破片が保管されている。

註52 瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵資料。

註53 綾南町教育委員会所蔵資料。

引用・参考文献（報告書などは一部省略した）

赤塚次郎2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市教育委員会

天羽利夫1986「四国の首長たち」『図説発掘が語る日本史第5巻 中国・四国』新人物往来社

上田睦2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号

大久保徹也1995「讃岐」『全国古墳編年集成』雄山閣

大久保徹也1996「壺形埴輪」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡』香川県教育委員会ほか

大久保徹也2000「四国北東部地域における首長層の政治的結集 - 鶴尾神社4号墳の評価を巡って - 」『前方後円墳を考える - 研究発表要旨集 - 』古代学協会四国支部

大久保徹也2002「四国北東部地域における地域的首長埋葬儀礼様式の成立時期をめぐって」『論集 徳島の考古学』

大庭重信1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』第26号史学編

大庭重信1996「雪野山古墳にみる土器副葬の意義」『雪野山古墳の研究 考察篇』雪野山古墳発掘調査団

香川県教育委員会編1983『新編香川叢書 考古篇』

香川県教育委員会編1984『香川県埋蔵文化財調査概報』

鐘方正樹2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号

木下晴一1991「条里型地割施工以後の微地形変化 - 丸亀市飯野町付近の事例 - 」『香川地理学会会報』 11

木下晴一1995「遺跡の立地と環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取遺跡』香川県教育委員会ほか

木原溥幸1988「国司と農民」『古代の讃岐』美巧社

國木健司1997「香川県」『瀬戸内中期古墳社会の変動と要因』古代学協会四国支部

蔵本晋司1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号

蔵本晋司1999 a「中間西井坪遺跡谷7出土土器について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡』香川県教育委員会ほか

蔵本晋司1999 b「讃岐における古墳出現の背景 - 東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察 - 」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡』香川県教育委員会ほか

蔵本晋司1999 c「香川県における帆立貝形古墳をめぐる諸問題」『中国・四国前方後円墳研究会 第5回研究会資料集』

蔵本晋司2000「四国北東部における前方後円墳創出期の諸様相」『前方後円墳を考える - 研究発表要旨集 - 』古代学協会四国支部

蔵本晋司2001「四国島における畿内系土器の動向(予察)」『庄内式土器研究』

蔵本晋司2004「四国北東部を中心とした前半期古墳における石材利用についての基礎的研究」『関西大学考古学研究室開設50周年記念 考古学論叢』

小池香津江2003「前期古墳における土器祭祀の成立と展開 - 大和の事例の整理から - 」『続文化財学論集』第1分冊

近藤義郎1983「前方後円墳の成立」『前方後円墳の時代』岩波書店

- 近藤義郎2003『楯築弥生墳丘墓』吉備人出版
- 坂靖2002「特殊器台から埴輪へ」『日本考古学協会2002年度柵原大会 研究発表資料集』
- 佐藤竜馬2000「讃岐・川津地区遺跡群の動向」『古代文化』第52巻第6号
- 塩谷修1992「壺形埴輪の性格」『博古研究』第3号
- 菅原康夫2001「まとめ」『阿讃山脈東南縁の古墳群 - 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報 -』(財)徳島県埋蔵文化財センター
- 杉本厚典2003「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』(財)大阪府文化財センター
- 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『柵原考古学研究所論集 第八』吉川弘文館
- 清家章1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究 考察篇』雪野山古墳発掘調査団
- 千田稔2001『埋もれた港』小学館
- 高田健一1997「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢 史学篇第31号』
- 高橋克壽1998「古墳時代の造形 - 墓輪」『考古学による日本歴史12 芸術・学芸とあそび』雄山閣
- 竹沢尚一郎1996「贈与・交換・権力」『岩波講座現代社会学17 贈与と市場の社会学』岩波書店
- 田代克己1986「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観 鳥越憲三郎博士古稀記念論文集』雄山閣
- 田中晋作1998「筒形銅器について」『網干善教先生古稀記念 考古学論集』上巻
- 都出比呂志1981「元稻荷古墳前方部の調査」(京都大学考古学研究室向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」)『史林』54巻6号
- 寺沢薰1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 矢部遺跡』奈良県立柵原考古学研究所
- 長崎盛輝2001「日本の傳統色 その色名と色調」青幻舎
- 丹羽佑一1995「丸亀市域の古墳文化の展開」『新編丸亀市史 1自然・原始・古代・中世編』丸亀市
- 橋本達也2000「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える - 研究発表要旨集 -』古代学協会四国支部
- 深澤芳樹1996「墓に土器を供えるという行為について(上)・(下)」『京都府埋蔵文化財情報』第61・62号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 福永伸哉1996「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究 考察篇』雪野山古墳発掘調査団
- 福永伸哉1998「古墳時代政治史の考古学的研究 - 国際的契機に着目して - (平成7~9年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書)』
- 古瀬清秀1985「原始・古代の寒川町」『寒川町史』寒川町史編集委員会
- 古屋紀之1998「墳墓における土器配置の系譜と意義 - 東日本の古墳時代の開始 -」『駿台史学』第104号
- 北條芳隆1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 北條芳隆2003「東四国地域における前方後円墳成立過程の解明(平成12~14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書)』
- 松尾昌彦1992「銅鏃の副葬をめぐる一試考」『古代文化』第44巻第4号
- 松山市教育委員会編1998『松山市文化財調査報告書63 朝日谷2号墳』
- 丸亀市教育委員会編2000『丸亀の文化財』
- 三宅良明2002「宮谷古墳・奥谷1号墳の墳丘構造について」『論集 徳島の考古学』
- 山田良三2000「筒形銅器の再考察」『柵原考古学研究所紀要考古学論叢』第23冊
- 渡部明夫1991「讃岐」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社

図出典

第1図 丸亀市都市計画図 61、982 を使用

第2図 香川県教育委員会編1984『香川県埋蔵文化財調査概報』より一部改変

第6図 大阪府教育委員会ほか編1999『河内平野遺跡群の動態 - 南遺跡群 弥生時代後期~古墳時代前期 -』

- 長尾町教育委員会編1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
 香川県教育委員会編1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡』
- 第8図 木下晴一1995「遺跡の立地と環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取遺跡』香川県教育委員会ほか より一部改変
- 第10図 香川県教育委員会編1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡』 より一部改変
- 第11図 寒川町教育委員会編1997『大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 森広遺跡』
 長尾町教育委員会編1999『県住宅供給公社による宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 陵遺跡』 より一部改変
- 第12図 古瀬清秀1985「原始・古代の寒川町」『寒川町史』寒川町史編集委員会
 白鳥町教育委員会編2002『高松廃寺・成重遺跡・樋端墳丘墓 - 白鳥町内所在遺跡発掘調査報告書』
 香川県教育委員会編2002『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 空港跡地遺跡』 より一部改変
- 第13図 徳島県教育委員会編1983『萩原墳墓群』
 高松市教育委員会編1983『鶴尾神社4号墳調査報告書 - 高松市石清尾山所在の積石塚前方後円墳の調査 -』
 綾歌町教育委員会編1993『石塚山古墳群』
- 第14図 長尾町教育委員会編1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
 一山典・三宅良明1991「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報42』日本考古学協会
 徳島県埋蔵文化財センター編2001a『阿讚山脈東南縁の古墳群 - 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報 -』
 古瀬清秀1985「原始・古代の寒川町」『寒川町史』寒川町史編集委員会
 香川県教育委員会ほか編1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊 国分寺六ツ目古墳』 より一部改変
- 第15図 香川県教育委員会編1983『新編香川叢書 考古篇』
 徳島県教育委員会編1994『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 4』
 石井町文化財保護委員会編1969『石井町文化財調査報告書 第4集』 より一部改変
- 第16図 高松市教育委員会編1983『鶴尾神社4号墳調査報告書 - 高松市石清尾山所在の積石塚前方後円墳の調査 -』
 長尾町教育委員会編1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
 古瀬清秀1985「原始・古代の寒川町」『寒川町史』寒川町史編集委員会
 善通寺市教育委員会編2003『』
 一山典・三宅良明1991「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報42』日本考古学協会
 唐津市教育委員会編1993『久里双水古墳確認調査概要報告(2)』
 香川県教育委員会ほか編1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊 国分寺六ツ目古墳』
 高島芳弘2000「前山古墳群の発掘調査成果」「前方後円墳を考える - 研究発表要旨集 -」古代学協会四国支部
 小郡市教育委員会編1985『みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告1 三国の鼻遺跡』
 綾歌町教育委員会編2002『綾歌町内遺跡発掘調査報告書 第6集』
 長尾町教育委員会編1983『川上・丸井古墳発掘調査概報』
 北野耕平1994『御旅山古墳』『羽曳野市史』第3巻史料編1 羽曳野市
 香川県教育委員会ほか編1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊 中間西井坪遺跡』 より一部改変

丸亀市吉岡神社古墳の再検討

～土器供献儀礼を中心に～

蔵本晋司

小論の目的は、北東部四国地域における土器供献儀礼を素材に、古墳成立期の儀礼の意味を探ることによって、古墳に埋葬された人物に託された觀念のあり様を明らかにすることにある。墳墓への土器供献の開始は、弥生前期後葉の区画墓の出現とともに確認される。弥生後期後葉以降に普遍化する特定個人墓との間に、供献行為の存在という部分に限れば質的な差異は乏しい。しかし、特定器種の選択・加飾・穿孔などといった儀器化は、後期後葉以降に急速に進展する。古墳出現段階には埋葬施設上の供献と墳丘装飾へと大きく二極化を遂げ、前期中葉の埴輪の囲繞供献の外的導入により弥生墓からの伝統は払拭される。

筆者は、基本的に土器供献儀礼は、被葬者の「たましい」と儀礼執行者の交歓のありようを示していると考える。それは墳丘頂部でおこなわれた、最も重要な慰靈と癒しの儀礼であった。古墳の出現は、そうした弥生墓にみられた呪術的な側面を後退させ、きわめて画一的でビジュアルな儀礼行為へと変質していく過程であると評価する。

Restudy On The Yoshioka Jinja kohun Of Marugame City On The Focus Of Earthenware Sacrifice Ritual Sinji Kuramoto

The object of this article is, by studying the Earthenware Sacrifice Ritual, to explore the significance of ritual in the period of the beginning of tumulus forming and to reveal the ideology that buried persons trusted. It also is confirmed that the Earthenware Sacrifice to tumulus began with the appearance of divided tumulus in the latter half of the Yayoi Early Period.

As for the specified private grave prevailed from the Yayoi late period, there is no qualitative difference in the existence of sacrifice behavior. However so-called tool rituals including the choice of specified tools, adding decoration, hole boring and so on, developed rapidly after the latter half of the Yayoi late period. In the stage of appearance of Tumulus, there is a significant bipolarization in the sacrifice in burial facility and grave decoration. The introduction of surrounding sacrifice, such as the burial mound figure, swept away the tradition of the Yayoi tumulus.

The author thinks that, basically speaking, Earthenware Sacrifice Ritual indicates the fraternization between souls of the buried and the ritual executer. Hold on the top of tomb, it is the most important ritual to memorize and console the dead. The appearance of tumulus can be thought as the process that the magic aspect of the Yayoi Tumulus retreated and changed to the extremely uniformed and visual ritual behavior.

丸龟市吉岡神社古坟の重新研究
～以土器供奉礼仪为中心～
藏本 晋司

本文的目的在于通过以东北部四国地区的土器供奉礼仪为素材、探索古坟形成时期的礼仪含意、从而揭示埋葬在古坟中的人物所寓意的观念形态。向坟墓中加以土器供奉的形式被确认为是随着弥生前期后叶独立坟墓的出现而开始的。

在弥生后期后叶之后普遍出现的专用个人墓穴中、如果只从供奉行为的存在方面来看、没有什么实质性的差异。然而、特定式样的选择、装饰、穿孔等的礼仪器具化却在后期后叶之后得到快速的发展。在古坟出现阶段、在埋葬设施上大致形成了供奉与墓丘装饰的两极化、由于前期中叶的明器围绕供奉的外部引进而打破了弥生墓所遗留的传统。

笔者认为土器供奉礼仪基本上象是表达举行礼仪的人与被葬者的“灵魂”心灵相通的含义。这种礼仪是在墓丘顶部进行的、是最为重要的祭奠与寄托哀思的礼仪。古坟的出现可以被看作是摈弃那种从弥生墓可以看到的施行巫术的一面、而向极其规范化、形象化的礼仪行为转变的过程。

마루가메 시 요시오카 진자 고분의 재검토
～토기공현 의례를 중심으로～
구라모토 신지

소론의 목적은 북동부 시코쿠 지역에 있어서의 토기공현 의례를 소재로 고분 성립기의 의례의 의미를 찾음으로서, 고분에 애장된 인을에게 위탁된 관념을 분명히 하는 것에 있다. 분묘에의 토기공현의 개시는 야요이 시대 전기 후엽의 구획 무덤의 출현과 함께 확인된다.

야요이 시대 후기 후엽 이후에 부편화되는 특정 개인 무덤과의 사이에, 공현 행위의 존재라고 하는 부분에 한정하연 질적인 차이는 부족하다. 그러나, 특정 기종의 선택·가식·천공 등의 의기화(儀器化)는 후기 후엽 이후에 급속히 진전된다. 고분 출현 단계에는 애장 시설상에서의 공현과 분구장식으로 쿠게 양극화를 이루고, 전기 중엽의 하니와(埴輪)의 위요(圍繞) 공현의 외적 도입에 의해 야요이 시대 무덤으로부터의 전통은 불식된다.

필자는 기본적으로 토기공현 의례는 피장고의 「영혼」과 의례 집행자의 교환(交歡)의 상태를 나타내고 있다고 생각한다. 그것은 분구 정상부에서 행해진 가장 중요한 위령과 위안의 의례였다. 고분의 출현은 그러한 야요이 시대 무덤에 보여진 주술적인 축연을 후퇴시켜, 극히 획일적이고 시각적인 의례 행위로 변질해 나가는 과정으로 평가한다.